ノハレモニア

ハルモニア

水之江めがね

<harmonia/>
by
Megane Mizunoe
2011

Illustration　Atoki
DTP & Design　moki
Historical Supervision　Arika Seno

Contents

<part:number=01:title=Miss.Immortality/>

<part:number=02:title=A Worm Hole/>

<part:number=03:title=She,I’m Not/>

<part:number=04:title=The Day We Went Away/>

<part:number=epilogue:title=In The Twilight/>

<part:number=01:title=Miss.Immortality/>

<?Desire-in-Text Markup Language:ver=1.2:encoding=DMO-590378?>
<!DOCTYPE dtml PUBLIC :-//WENC//DTD DTML 1.2 transitional//EN>
<dtml:lang=ja>
<body>

01

いまから語るのは、

<declaration:calculation>
<pls: 敗残者の物語 >
<pls: 背信者の歴史 >
<eql: つまりわたし >
</declaration>

<theorem:number>
<i: ひとがしびとになると、ことばになる>
<i: しびとがほとけになると、空(くう)になる>
</theorem>

いや、それは正確じゃない。より正しく言うのなら、

<rule:number>
<i: ひとがしんでしまったら、ことばにしておかなければならない>
<i: しんだひとが神仏にまで上りつめてしまったら、ことばにしてはならない>
</rule>

という禁止で語られるべき。

なぜって、こどもがおとなになってやがて死んでしまうまでは身体と心がそなわっているけれど、死んでしまったら身体は朽ちてしまう。残るのは心だけだけれど、他者に認識されない心はあっても無いと同じ。他人の心の中にあることばだけが、生き残っている。それらが変質しないためには紙に書き残されるべき。それすらもやがて風化していって、神仏としてあがめられるようになれば、ゆがんだことば、間違った思い出だけが人々の間をたゆたっている。だからśarīraがわたしたちの中を監視しているのは、何をことばとして残しておくかを決めるためだ。śarīraは身近な米の形でわたしたちの身体に忍び込んで、身体の中に刻まれたことばを盗み出していく。生きるために食べているごはんの中に仕組まれたśarīraがしぬための備えになっている。おとなになっていくということは、ゆるやかにしんでいくことだ。

だから、

<list:item>

<i: からだがこどものままでいるうちは>

<i: やせっぽちのこどもでいるうちは>

<i: śarīraはわたしのからだに、入れない>

<i: śarīra がからだに入るのは、しんでいくあかし>
</list>

そして十二歳のわたしはといえば、おとなになるのなんてまっぴらだった。

「ねえ、一緒にいきませんか」

と言い出したのは神子（みこ）だった。豊聡耳神子（とよさとみみのみこ）。常ならば厩戸皇子（うまやどのみこ）の敬称で呼ばれる。

その日は豪族一同集まって誰だったかの結婚を祝う宴があったのだった。大人たちが歌ったりおどったり、お酒を飲んで騒いでいる中、連れてこられた子供たちは誰もが、どこかしらけたような顔をして立っていた。その中でひとりだけ大人びた顔立ちで、神子はわたしのことをじっと見つめていた。そうしてするすると近づいてくると、出し抜けに声をかけてきたのだった。

「なぜ人間は死ぬのか、って世界に対して、一緒に問い詰めてやるんですよ。

<list:item>
<i: なぜ、ひとは死ななければならないのか>
<i: なぜ、いつまでも子供でいられないのか>
<i: なぜ、楽しいときは終わってしまうのか>
<i: なぜ、すべての物語には結末があるのか>

</list>

どれだけ逃げても逃げ切れないぐらいのしつこさで、世界に向けて問いかけてやるんですよ」

それはまるきり自分自身の言葉のように聞こえた。日頃思っていることそのままが、神子のくちびるからこぼれおちていた。

この無数の死にあふれた世界にあって、完全に孤立していたといえば嘘になるけど、それでもわたしは日々感じていた。

<declaration>

<i: 誰もが同じようにしんでいくのは間違ってるって>

</declaration>

つい先頃の戦乱を忘れたかのように、宴の時は緩やかに過ぎていく。未だに国のそこかしこに戦の火種はくすぶっていたけれど、わたしたちのいるこの一瞬は平和そのものだった。水田の底にはどろどろとした憎しみの汚泥がわだかまっていても、稲の穂先はさらさらとさわやかな風に揺られているみたいに。じきにくる嵐のことなど考えもせずに、気ままに揺らいでいるみたいに。

「ねえ、知っていますか？　物部布都（もののべのふと）」

かがり灯の火影に目を輝かせて、神子は言った。
「……どうして、わたしの名前」
「知らない訳がない。わたしは耳が良いのです。蘇我と婚姻した物部の姫君のことはよく聞いています。そこで行われているたくさんの秘術のことも。śarīraから逃れるための厳しい生き様のことも」
声を出さずに神子は笑った。濃い闇の中に溶けていくようだった。
「君、śarīraについてどこまで知っていますか」
「……兄にならいました。
<reference:textbook:id=hsj56093-4n7mn-2jp:line=3496>
<content> śarīraは蕃神のもたらした三尸であり、国津神もそれに同意したうえで倭国の人間に導入されている。増加する人間の死に対応するために十王が作り出した死後管理機構。五穀、特に米を媒介として人間の体内に潜伏する目に見えない虫である。人間の生涯を生きているうちから言語に変換し、予め仏の骨、すなわち仏舎利に送信しておくことで死後の取り扱い、すなわち輪廻を迅速に判定することが可能になる。仏舎利を格納し、また情報を効率的に収集するための塔は、仏教徒らによる崇拝の対象となっている。また、集められた情報は

国津神も把握し、神々に対する暴言を吐いた輩に罰を当てるための基礎資料として用いられている。荒ぶる神々とその末裔らによる一種の恐怖政治を支えるための重要な機構（システム）となっている。</content>

</reference>

って。でも厩戸皇子さまは、」

「敬称では呼んで欲しくない。わたしのことは神子で結構」

「神子さまは、」

「様も不要です。君には、ただ神子とだけ呼んで欲しい」

呼び捨てにするのはためらわれたが、強い鋭い瞳に見据えられては逆らうことが出来なかった。

「……神子は、śarīra を騙してでも不老不死になりたいのですか」

「なりたい、のではなくて、なるように定められているのです。どうして人間が死ななければならないか、わたしには到底理解ができないのです」

眉一つ動かさずに、彼女は言った。

「生まれてからのこの十二年間、世の中というものをずっと見続けてきましたが、人間が本当に死ぬべきものであると、わたしにはどうしても理解できないのです。故に、

<declaration:proud>
<i: わたしはどうにかして不老不死になる方法を見つけなければならない>
</declaration>
そのように天命が定められたのです」
その時、ひときわ大きく太鼓の音が鳴り響き、おとなたちがわあっと声を上げて笑いさんざめくのが聞こえた。神子がため息をつく。
「……ここではゆっくり話もできませんね。どうです、布都。明日、あなたの家にうかがいましょう。共に遠乗りにでも出かけませんか」
「でも、馬、なんて……」
持っていないし、それに乗ったこともない。第一、自由な外出を兄が、物部守屋(もりや)が許すはずはない。
今だって遠くの席から見張られている。この宴の中で何を口にしたのか、誰と話したのか。ありとあらゆることを把握されている。そういう風にわたしは育てられてきた。Sarīra の代わりに兄が逐一行動を見張っているのだ。
「そんなものはどうにでもなります。所詮、ひとはひとに過ぎない」
小さくかぶりを振って、神子はわたしの肩に触れようとした。わたしは思わずびく

りと身体を震わせてしまった。
「……ああ。申し訳ありません」
手を空中にさまよわせて、神子はどこか居心地悪そうに詫びた。わたしは何か言い訳をしようとして、それから良い言葉が思い付かずに口を閉じた。どういう風にこの方と話せばいいのか判らなかった。誰かと一対一で話をすることなど、兄と、あとは夫である蘇我馬子を除いてはほとんど無かったことなのだ。
それから程なくして、宴はお開きになり、わたしは女輿(めこし)に入れられて物部の家に帰ることになった。すぐ隣の闇の中で馬に乗った兄の目が光っているのが見えた。偏執的に粘り着くような視線で輿の御簾(みす)越しに見られているのを感じて背筋が凍った。身体を丸めて、出来るだけ見ないようにする。
夫である蘇我馬子(そがのうまこ)は時折忍んでくるだけで、女は結婚しても実家で暮らす。馬子には何人も妻がいて、わたしはその中の一人にすぎない。それがこのあたりでは当たり前のことで、わたしはそれが時々さみしかった。もちろん、わたしの歳を慮って指一本ふれず、彼は親しげに話をしたり、和歌を取り交わしたりする程度の仲ではあったけれど、それでも彼のような穏やかな人間はいなかった。少なくとも物部の家には陰気な兄しかいないのだ。今日わたしが宴に来られたのだって、彼が呼んでくれたから

だった。もちろん人前で堂々と話をすることなどはしたなくて出来はしない。ただ会釈を交わすだけのことだった。それでさえ、兄にきつく睨まれてしまっていた。

暗い闇の中で箱めいた女輿に閉じ込められて、急速に身体の熱が冷めていくのが判った。酒は飲んでいないのだけれど、宴の熱気に当てられていた頬から血の気が引く。ぬかるみに満ちた河のそばの家路をゆくと、ぐじゅぐじゅと泥の中に、一歩また一歩と担ぎ手の足が囚われていく音が聞こえてくる。それだけで肌が粟立つ心地がした。

突然、どっという音がして輿が止まった。

「きゃっ、」

ぐらりと傾いてわたしは声を上げた。すんでのところで落ちてしまうところだった。必死で縁にしがみつく。したたかに膝を打ったけれど、どうにか落とされずに済んだ。

「おっと失敬」

言葉だけの詫びだ。兄の声には笑みが含まれている。

「……いいえ」

試されたのだとすぐに判った。輿の担ぎ手が転ばされれば、上に乗っている人間は振り落とされるより他ない。危ういところだった。

その先に続いた兄の酔った言葉。

「おい、布都。お前が今日口にしたものを当ててやろう。茹で栗を三つに胡桃を二つ。竹の子の柔らかい穂先だけ一口、桑の実を十四粒、水を二杯。米はもとより、酒も飲まなかったろうな。あれにも śarīra は含まれている」

「……はい」

「だが宴の半ばで橘の実の蜂蜜漬けを食べたろう。あれはいけない。お前には驕った食べ物だ。śarīra はなくとも、念を入れるに越したことはない」

大人たちの誰かに勧められたものだ。仕方なく口にした。それでも口応えをすることが恐ろしくて、わたしはただ詫びた。

「……申し訳ありません」

「帰ったら清めをしてやろう。ありがたいと思え」

その声にはたっぷりとした笑みが含まれていた。酔った兄の尖った頬骨が月夜に影を落とすようだった。

やがて馬の足音も止まり、家に着いた。河内にある物部の本宅ではなく、飛鳥の別邸は常に住む者はおらずしんと静まりかえっている。輿の担ぎ手たちもわたしを邸内におろすとすぐに裏の小屋に引っ込んでしまった。兄と二人きりになった。

「火鉢を持て。夜も更ければ些か冷える」

「……はい」
うなずいて歩む。さきほどぶつけた膝が痛んだ。引きずりつつも急ぐ。兄の罵声が飛ぶのを恐れて震える。炊屋(かしきや)から消えかけの火種と炭を持ってきて部屋へ運ぶ。
「遅いぞ」
「申し、わけ……あっ」
つまづきそうになった。すぐそこに兄の剣が転がっていた。わざとでなければそんな場所に置くはずがない。火をこぼさないように必死で抱きかかえると、鋭い痛みが手のひらに走った。火鉢を慌てて床に置く。手はこぼれかけた炭に触れて水ぶくれになっていた。
「蹴ったな、物部の剣を」
落ち度を見つけると、いかにも楽しそうに兄は笑んだ。これもまたいつものことだった。わたしはただ絶望して、詫びの代わりに深く深く頭を地面にすりつけた。声はもう出ない。ただ浅い呼吸のみがひくひくと喉のうわべを出たり入ったりしているだけ。
「どういうことか判らないほどの歳でもあるまい」
にちゃりと音がしそうなほどに粘ついた声を出して兄は言った。そしておもむろに

後頭部に暖かく湿った感触がした。そのまま押しつけられる。その重みで、頭を踏まれているのが判った。汗の腐敗した酸い臭い。まだ泥を落としてもいない酔った中年男の指の間から匂って来るひどい体臭を、出来るだけ嗅がないように息を止める。

目を閉じると他の感覚が研がれてしまうから、まぶたを開いたままで何も考えないように、ただ中空を見つめる。床の上の塵だけに意識を集中させた。ぎりぎりと軋む頭蓋骨の痛みも、踏みつけられることの意味も、考えないようにした。ただの人形のようにして、わたしは嵐が過ぎ去るのを待った。人間では居られなかった。ひとの心を持ったままでは壊れてしまいそうだった。

「お前、つまらんな。慣れてしまって」

兄はそうつぶやくと、足をどけた。

「手桶二つと水を持て。いつものことだろう」

ひゅうひゅうと喉が風の音を立てるばかりで返事も出来なかった。ただ頭を下げてきびすを返した。背中から何とも判らない罵声が聞こえる。兄は酔っているのだ。判っている。酔っていなければこんなことはしない。そう信じるよりない。

いつもの通りに、わたしはお清めの準備をする。片方の手桶にたっぷりと水を張り、洗い晒しの麻布を中に入れて湿らせる。それから兄の側に向き直る。兄の酒精にまみ

れた息使いは荒い。されこうべのように眼(まなこ)の落ちくぼんだ顔がすり寄りそうなほどの近くへ来た。

わたしはゆっくりと頷くと、目を開いたまま心を遠くへ飛ばして、兄の指先がわたしの口の中を荒らしていくのに耐えた。喉奥へ兄の骨張った指先が入り込めば、自ずと腑(はらわた)が震えて中のものがまろびでる。滑らかに汚れは手桶に流れ込んだ。

この身体にはもう吐き癖がついていた。そういう風に育てられてきた。物部の神の機嫌を損ねないために、わたしは悪いものを食べてはいけないのだった。悪い、甘い、美味しいものを食べてはならないのだ。生け贄(いけにえ)の娘は幸福になってはいけないのだ。

汚れをあらかじめ用意した布で拭って、わたしは深く頭を下げ、その部屋を後にした。兄の前を離れて初めて、まなじりに涙が浮かんだ。悔しさと悪心と惨めさとで胸の内が沸き立つ。自分の部屋で声を殺して、やせた一人のこどもが泣いていた。

03

<coma>
<dream:blink>
<i: 闇 >
<i: 浮遊感 >
<i: 嘔吐感 >
<i: 頭痛 >
<i: 悔恨 >
<i: 精神的外傷 >
</dream>
</coma>
<awake/>

昔の夢を見て目を覚ました。闇の中で汗みずくになって飛び起きる。見回す。自分の身体に触れる。生きている。一人で、眠っていただけだ。それでもかたかたと震え

る歯が鳴り止まなかった。怯えて縮こまっている。関節がこわばって痛い。

「げほっ……」

まだ喉奥に何かが入っているような気がする。硬い中年男の指が口腔を蹂躙していく感触に、喉をかきむしる。何度も咳き込んで吐き出そうとするけれど、せいぜい胃液しか出ない。空咳を何度もして身体の中を蝕んでいる幻の感触を追い出そうとする。爪を立てて喉をかきむしる。皮膚が破けても構わない。自分の中に入り込んでいった感触を打ち消そうとして、何度も何度も指先を突き立てる。

それが、止まる。暖かな手が覆い被さってくる。背中から抱きしめてくれる。どくどくと鳴る自分の心臓が反響しているのが判った。

「……布都」

友人の心配している声がした。ぬるぬるとした血の感触と、それから痛みをようやく感じた。

自分の有り様を改めて見直す。自分の部屋で、脱いだ衣をかけて眠っている。千四百年も昔の習俗のままだ。幻想郷から柔らかな布団を持ってくることも出来たのだが、まだ身体がそれになれておらず、うまく眠ることが出来なかった。だから硬い木の床の上に何枚かの筵(むしろ)を敷いてその上で縮こまって眠っていた。はだけてしまった着物を

かき寄せて、肌を隠した。自分の体を見られるのは未だに恥ずかしかった。
「……すまぬ、屠自古。取り乱した」
自分の声はかすれていた。息をする。空気は上っ面をなぞるばかりで、肺の奥まで染みこんでいかないような気がする。亡霊の彼女が問う。
「どうしたの。悪い夢でも見たの」
「ん……む」
どう答えたらいいのか、考えあぐねているうちに、むにーと頬を引っ張られた。
「な、何をする！」
「そういうつらいときはいちいち言葉の意味とか考えないの、馬鹿。うちのしょうもない神子が伝染るでしょ」
それからまたぎゅっと抱きしめられた。わしわしと髪の毛をかき混ぜられる。されるがままになっていた。
そうやって暖かな体温に包まれているうちに、呼吸が少しずつ整ってくる。きちんと息が身体の中に入ってくる。心臓がいつも通りの緩やかなリズムを取り戻してくる。
ふと、屠自古が呟いた。
「もう、あんたの兄貴は居ないんだよ」

「……我が心を読んだのか」
「あんなにうなされてれば、読めなくてもすぐ判るって」
ふんと鼻先で笑われる。わたしは小さく首を横に振った。屠自古にはかなわない。長い長い眠りを経たあとも何一つ変わりはしない。子供の頃からずっと。
「生きてれば、あたしがブン殴ってやんのになあ」
しみじみ、悔しそうに言った。それが嬉しくて、わたしはわずかに唇を緩ませた。からかうように言う。
「亡霊だというのに、ずいぶん荒っぽい。そこは祟ってやるとか呪ってやるとか、そういうところではないのか」
「だってそういうのあたしのサガじゃないし。殴った方が早いし」
「まったく亡霊とは思えんな」
手も温かく体に触れることも出来る。ものを食べることさえ出来る彼女は、死んでいることを全く感じさせない。それがこの世界の亡霊というものなのだ。外の世界ではただ煙の中に浮かび上がるだけだった。触れることはおろか、話すことさえできなかった。
この世界に移ってきたことをわたしは感謝する。そうでなければ目覚めることは出

来なかった。
そう。わたしは感謝しなければならない。
こうして三人きりでこの世に在り続けることが出来たことを。

やがて夜が明けた。少しぐらいはうとうとしたかもしれない。柔らかな身体に埋もれて、意識がほんのすこし緩むことがあった。
庭へ出て井戸水を汲む。早朝の冷たい大気に触れて、ほんのわずかに湯気を立てているように見える。その霧とも言えない僅かな湿り気を鼻腔からそっと吸い込む。水の匂いのみを口へゆるりと回し、舌の上で転がすとほんのわずかに甘いような気がする。
それで仙人の食事は終わり。もっとちゃんと食べてもいいのだけれど、今朝はあまり食欲は無かった。śarīra のことを思い出したせいかもしれない。あれはいつでも腹をむかつかせる。自分の中に入れられたことはなくても、人間の生涯を監視するシステムなど居心地が悪い。神や仏の考えることはいつでも頭ごなしで腹が立つ。
腹ごなしにゆっくりと玉砂利の庭先を歩く。
庭には島を浮かべた大きな池がある。ぐるりと回る。わずかに氷が張っているのが

見える。肌寒い冬の大気の中で、椿の花が一輪だけ取り残されたように咲いていた。いや、その花だけが先に進みすぎたというべきか。他の花たちは皆まだ硬いつぼみのままでいた。

早熟なものはいつでも孤独だ。他を待っていることが出来ずに先へ先へと死に急ぐ。まるで神子のようだなと思って、そっと触れると地にぽたりと落ちた。拾い上げると急に色あせて見えてしまって、悪いことをしたと思った。

神子は長い眠りから覚めて、博麗の巫女どもとひと遊びした後、大きく伸びでもするぐらいの気軽さで仙界というものを作った。神霊廟が元あった場所は寺院の地下であったので、居心地が悪かったのだった。だから自分たちの住むべき世界を作った。

世界を作るということが、どういうことなのか、わたしにはよく分からない。椅子を作ったり、家を建てたりするのとはわけが違うのだろうとは思うけれど、朝起きたら「あ、引っ越し済ませておきましたから」と言われた。そうして気が付いたら、今居る家の中にいたのである。

仙界には日の光もあり、空はきちんと遠い、本当の冬空のように見える。けれど、あれらは全て偽物なのだと神子は言う。この庭に敷き詰められた玉砂利もその下の黒土も、植えられた椿も、遠くに見える山や森やせせらぎも、すべては私が作ったのだ

と彼女は驕るでもなく言った。
どこまでが幻影で、どこからが本物なのかについて、わたしは判断する手段を持たない。大昔に住んでいた場所にここはよく似ている。物部の家ではなく、蘇我の家。『嶋大臣』と家主の馬子が呼ばれたように、庭に池がありその中に小島が浮かんでいる。わたしたち三人が幼少時代を過ごした場所だ。その思いを受け止めると、胸の中がじんわりと切なくなる。

<recall>

初めて会ったあの宴の日の翌朝、早速神子は物部の家を訪れてくれた。
兄、守屋が苦虫をつぶしたような顔で客人だぞと宣(のたま)う。そうしてわたしの部屋に通されたのが、豊聡耳神子、それにもう一人はその許嫁(いいなずけ)、蘇我屠自古だった。
数え年で神子が十三、屠自古が十四と、どちらもまだ若い子供であるはずだのに、このように他人の家を自由に訪問することが出来るなどというのは、異例のことだった。神子はやんごとない生まれであるから、そのような自由な振る舞いが出来るのだろうか。厩戸皇子という尊称で呼ばれ、今の大王(おおきみ)の第二皇子という立場は、むしろ堅苦しいものであるはずだったが、神子は一切気にした様子がなかった。

許嫁ふたりで余所の家を訪問するにしては、ひどく身軽な装いだった。どちらも男のように袴を履いているが、髪は結わずにゆるく束ねて垂らしているだけだ。少女とも少年ともつかない不思議な装いだったが、それがどちらもよく似合う。

優しげな顔立ちをした少年と、端然としたたたずまいの少女とでは雰囲気も違うはずだが、それがまるで双子の姉弟のように一対となっていた。

三人で向かい合わせになって座る。何の用なのか、こちらからは聞き出せない。ただ視線を落として俯いているだけだった。神子はただ優しげに笑んでいるばかりで、何も言い出さない。

屠自古はひどく挑戦的な目つきでこちらをじろじろと見ていた。そうやってぶしつけに見つめられると、何か悪いことでもしたかのような気持ちになって困る。

「ねえ、神子。こいつがそうなの。到底そんな風には見えないけど」

屠自古がしびれを切らしたように、問うた。わたしは何のことだか判らなくて、ただひたすら小さくなって座っているだけだった。

「ええ。昨晩はどうも」

神子はそう言うと、こちらへむけてにこりと笑う。その笑みは童めいて幼いのに、その裏側には何か研がれたものが隠されているような、不思議な気配がした。

「良い天気です。馬に乗りませんか」
「……馬には、その、不慣れで」
「教えてあげますよ。難しいことではない」
見かけの優しげな様子には似合わぬほどの押しの強さで、神子は言い張った。
「服も……その、」
自分用の袴など持ち合わせてはいない。第一、それは男の恰好(かっこう)なのだ。
「兄上にお借りしては。子供の頃の古着などありませんか」
「兄が、許すかどうか」
「わたしからお願いしてみましょう。待っていてください」
そう言って、すくりと立ち上がる。そしてすたすたと勝手を知った家のようにどこぞへ歩いて行ってしまった。わたしと屠自古はぽかんとその場に取り残されるだけだった。
「……まったく、あいつったら」
屠自古が苦笑する。そして、改めてこちらを見た。
「悪いわね、急に押しかけたりなんかして」
「いえ、あの」

「朝っぱらから神子がたたき起こしに来たのよ。何事かと思ったわ。仙骨がなんだとかśarīraがなんだとか言ってたけど、さっぱりわかんない」
あいつは人に説明する気がないからなあ。屠自古はそんな風にぼやいた。
「ま、あいつの言うことだから何か面白いことでもあるんじゃん？」
適当な言葉遣いの中に、信頼が垣間見えた。それがわたしにはうらやましかった。
「いいなずけ、ですものね」
「ん、まーね。あんなんでも一応、未来のダンナだし、幼なじみなのよ。一蓮托生、腐れ縁、切っても切れない可愛い妹みてーなもんよ」
「妹……？　弟ではなく？」
不思議に思った。神子は、大王の第二皇子、つまり、あのように麗(うるわ)しく整った顔をしていても少年であるはず、とこの頃のわたしは思い込んでいた。
「あ、しまった」
はっと口を押さえた。それから上目遣いをして悪戯っぽく笑う。きつそうな目つきが和らいだ。
「えーと、聞かなかったことにしてくんない？」
「……はあ」

こっくりとうなずいた。もとより困らせるつもりなどない。
その時ちょうど神子が戻ってきた。手に袴を持っている。
「許可は取りました。行きましょう。いろいろとやらねばならないことがあるのです」
「神子はいっつも説明しないよねえ」
「その時間も惜しいのです。さ、」
神子はうやうやしく屠自古へ手を差し出す。皇子に相応しい優美さだった。
「ちぇ」
屠自古は小さく舌を鳴らして、その手を握って立ち上がる。ほんの少し頬が赤らんでいた。
神子はこちらへの気配りも忘れない。
「袴の着方は判りますか？」
「……やって、みます」
「外でお待ちしていますよ」
そう言い置いて、神子と屠自古は連れだって出て行った。手を握り合う様は見ていて恥ずかしくなるほど仲むつまじく見えた。
着替え、おそるおそる外へ出たが、恐れていたように兄の声は聞こえなかった。ど

のようにして言いくるめたのか、不思議でならなかった。
近くの木に馬が三匹結わえ付けられていた。一匹はまだ子馬のように見えた。ころころとして可愛らしい。空気は初夏の爽やかさを帯びている。普段、ほとんど外に出ないせいだろう、日の光がひどくまぶしく感じられた。吹き渡る涼風が心地よい。
「布都、こちらへ」
馬のそばの神子に手招きを受ける。こわごわ寄った。すぐそばで見る馬は子馬と言えども、確かに獣らしかった。
「怖がらなければ怖くありませんから」
謎解きのようなことを言われても、ぴんとこなかった。小首を傾げる。
「ほら、撫でてごらんなさい」
言われるがまま、触れてみる。
「……暖かい」
見た目よりもずっと毛足が長く、じっとりと汗ばんでいるようだった。息遣いが確かによく判る。人間よりも早い呼吸と脈搏（みゃくはく）。とくとくと鳴っている鼓動は強い。
「そうでしょう。生きているのですから」
神子は嬉しげに笑んだ。不意に優美な指先が触れた。桜貝のように綺麗な爪に思わ

ず見入って、それから急に恥ずかしくなって顔を伏せた。子馬と同じだけの速度と強さで心臓がとくとくと鳴る。こんな気持ちになるのはほとんど初めてのことだった。政略上の都合で、夫ということになっている蘇我馬子に対しても、安らぎを感じこそすれ、このようなときめきを抱いたことはない。

「こぉら！　嫁の目の前でよその女口説いてんじゃないの！」

横から屠自古の声がしてびくりとした。嫌な感じに鼓動がとび跳ねる。慌てて顔を見上げるが、相手の表情は悪戯っぽく笑んでいる。本気で怒っているわけではなさそうだった。

神子も苦笑している。

「ふふ、妬いちゃいました？」

「ばーか、うぬぼれてんじゃないよ」

今度は手が出た。突き出された屠自古の拳を神子がぱしりと受け止める。思わず間に入ろうとするが、うまく動かない。

「あ、あの、けんか、は……」

「大丈夫大丈夫、屠自古のいつものカミナリですから。ね？」

そう言って笑いながら、するりと摑んでいた手を絡めて、距離を近づける。そうし

て触れるか触れないかの口づけを屠自古の頬に落とした。
「っ……！」
「ほら、大人しくなった」
耳朶(みみたぶ)まで赤くなっている屠自古を置いて、さらりと何でもないことのように神子は言う。ぽかんとして見ていることしか出来なかった。
「そろそろ行きましょうか」
「っとにもぉ……後で憶えてろ！　コノヤロ！」
ぶつくさ言いながらも、屠自古は馬にひらりとまたがる。手慣れたものだった。
わたしは改めて馬を見る。子馬と言っても鞍(くら)は腰の高さより高い。どうやって乗ったらいいのか判らなくてただ撫でていることしか出来ない。
「乗せてあげますよ」
神子はそう言いながら、腰をぎゅっと掴む。唐突なことで、また心臓が跳びはねる。
「あっ……えっ、」
「せーのっ」
声と共にぐっと持ち上げられる。足が浮いて心許ない。
「ふ、ふぁ……っ」

「はやく、鐙(あぶみ)に足をかけて」
支えている手がぷるぷる震えてきた。
「ど、どれ……っ？」
「そこの、腹帯からぶら下がってる輪っかに足をひっかけるんです、は、はやくっ！」
あわてて何度か仕損じた後、ようやく馬にまたがることが出来た。どたっと何か倒れる音がしたが、気にしている場合ではない。
「わあ……」
視界が高くなると、見える景色が広がってくる。地面が驚くほど遠い。吹き渡る風も強さを増し、額にはりついた前髪を吹き払う。わずかに天が近づいたような心地さえする。なだらかに広がる田野(でんや)の向こう側、ごく遠くの川沿いで躑躅(つつじ)が咲いているのが見えた。
「ね、いいものでしょう？」
ずいぶん下から声がした。見下ろすと、神子がやれやれといった様子でおしりをはたきながら立ち上がるところだった。さっきの一仕事で尻餅をついてしまったのだ。
「あっ、ご、ごめんなさい」
「布都は軽いから助かりましたけどね」

「だらしないですよー、太子(たいし)様」
屠自古がくつくつ笑う。珍しく神子がむくれた。
「……こういう時だけ敬称使うの止めましょうよ。それに屠自古だって半年前は一人で乗れなかったじゃないですか」
「あーあー、聞こえなーい。つぅか、そんな昔のこと忘れたし」
耳の中に指をつっこんで聞こえないふりをしている。手綱を持ちながらそうしているのだから、器用なものだ。
「さて、そろそろ行きましょうか。まずはそこの樹まで」
神子もひらりと馬に飛び乗る。こちらに配慮してゆっくり歩かせてくれる。
言われる通りに馬を動かす。最初は馬の腹を蹴るのが怖かったが、判るように強く蹴らないと相手に乗り手の意志が伝わらないのだと聞いて、そういうものかと思った。
こわごわ接していては、伝わらない。相手を恐れていては前に進めない。お互いが対等になって初めて何事かを為すことが出来る。
蹄(ひづめ)の音を聞きながら、自分の引いた手綱のとおりに進んでいくのは心地よいことだった。足の間で馬の胴体を挟んで、ぐっと背筋を伸ばすのは普段しない姿勢で疲れるけれど、顔を上げて日の光の下でぐんぐん景色が流れていくのは胸がすく。

雲が一筋だけ山のいただきにかかり、冠をかぶっているように見える。そうなれば、中腹の緑は袍(うわぎ)で、麓で咲いている花は袴か。屠自古の快活な戯(たわむ)れごとを聞くともなしに聞いていた。

やがて道の途中、天蓋のように広く枝を伸ばした見事な桜の大樹にたどりついた。花はすでになく、青々と葉が生い茂っている。神子たちが降りるのを真似ようとして、鐙(あぶみ)の上に立ったはいいが、地面が遠くて、降りる決心がつかなかった。

「しょうがないなあ」

屠自古がそう言って、腰を支えてくれた。ほとんどそのまま抱き上げられそうになる。神子よりも危なげがなく力強かった。

「なに、アンタ。ちゃんとメシ食ってんの？　中身全部空気なんじゃないの？」

驚いたように屠自古が言った。

「あ、その……」

「肉食いなよ、肉。兎(うさぎ)とか雉(きじ)とか。うまいもの食わなくちゃ。今度取ってきてあげる」

ばんばんと肩をたたかれる。ちょっと痛い。

「……仙人の修行としてはあんまり良くないんですけどね」

神子は小さくほおをかいた。それを聞いた屠自古がびしりと指を突きつける。

「そう、そうよアンタ。仙人だとか仙骨だとか、マジ意味わかんねーんですけど。説明してよ」
「説明……うん、そろそろ良い時分ですかね」
神子はそう言うと、ちょうど良く張り出した枝の上に腰掛けた。二人ともそれにならった。
水を張ったままの田に空が映ってまるで鏡のようだ。ゆっくりと雲が流れている。
ごそごそと屠自古が何か袋から取り出した。差し出してくるのを見れば木の実のようだった。
「椎の実煎った奴。うまいんだよ。食い過ぎるとお腹ぴーぴーだけどさ」
こくりとうなずいて乳白色の実を口にする。歯ごたえがあり、ゆっくりと噛むとほのかに甘みがにじみ出してくる。兄の目を気にせずに食べ物を口にするのも、このように親しげに誰かと分け合うのもはじめてのことだった。
「わたしは、ものごころついてよりこのかた、この国のことをずっと考えてきました」
神子がゆっくりと話しはじめた。二人で耳を傾ける。
「大王の威光はたしかにすばらしい。今にも秋津島を覆い尽くさんとしています。けれどその勢いもけして盤石のものとは言えない。ことに、今上の大王は身体が弱く、

即位してすぐの今であっても病がちでしっかりとした秩序を保てずにいる。臣下の豪族たちを見ていても倭国が一丸になっているとは言い難い」

神子が語る言葉はまるで他人事のようだった。自分のおとうさんのことなのに、とわたしは内心で思う。わたしが兄のことを考えるようなやり方では、神子は大王のことを考えない。それがやんごとない方の有り様だと、判ってはいても不思議だった。

「蘇我の家にはよく海を渡って百済や新羅の渡来人が訪れます。彼らは戦乱に追われて倭国へ逃げてくるのです。倭国も今は神々の威光によりひとときの平和を保ってはいますが、大王の座を争って、いつなんどき、戦乱の世が訪れるともわかりません」

それはわたしも思っていたことだった。わたしが蘇我の家の妻になったことだって、それを防ぐための一方策に過ぎない。古い神々の血を引く物部と、渡来人たちを束ねて先進の技術を身につけた蘇我。これらの有力な豪族同士を血で結びつけるための道具であり、同時にいざ戦となれば物部の家を支える呪具でしかない。その故に食べるものを制限され、何かの間違いでśarīra が入らないように見張られている。

霞をふくんだ重い雲が流れていく。少しずつ空がかげっていくようだった。

屠自古がそれを振り払うように、問うた。

「戦のことは知ってるけどさ、それと仙人やらなにやら、どんな関係があるの」

「まあ、そう急かないで。その前に、この国を支えている神のことを話さなければなりません。屠自古も昔からいる八百万の神のことはご存じでしょう」
「まあね、蘇我の家は爺さんの代から仏教だからイマイチ実感わかないけど。つぅか、神にしろ仏にしろ見たことないしなあ。あたし、よくわかんないや」
そのようなことを気軽に口にする屠自古のことがわたしには少し新鮮だった。物部の家は昔からの神を拝んでいるから、目に見えなくても神がそばにいるということは当たり前なのだ。このように不遜なことを兄が耳にしたら、どれほど怒り狂うかと思うとわたしは急に恐ろしくなった。同時に、奇妙な昂揚感が胸の片隅に生まれているのを自覚して、とまどった。
自分は、うまれてはじめて悪いことをしようとしている。
「屠自古は面白いですね」
神子はいかにもおかしそうに笑う。
「あ、今バカにしたでしょ」
「違いますよ。褒めているんです。ね、布都？」
名前を呼びかけられてびくりとする。心を読まれたようなタイミングだった。
「布都は古くからの神を奉じる物部の家の娘でしょう。いろいろな秘術を通じて神の

奇跡を見たことがあるはずだ。到底、神を信じないなどとは口にも出せないはず」
「いやべつに、信じないとまでは言ってないんだけどな」
もごもごと言い訳をする屠自古はおいて、神子は話を続ける。
「神仏が人々を見張るための道具、すなわち śarīra は米を介して伝染する。屠自古は米を食べられない体質なのですよ」
「なんか体が痒くなるんだよな。昔っからそうだ」
「あんな発言をすれば普通は śarīra を通して神の罰が当たるところです。神々の仕事は人々を幸せにすることではない。自らをないがしろにするものに罰をあてることなのですから」
その言葉は、わたしに兄の仕打ちを連想させた。清めと称して行われたいくつかの折檻のこと。顔を立ててやらねばたちまちに逆上して殴られること。そうでなくてもわたしの落ち度をめざとく拾い上げては暴力を振るうこと。そうするためにいつでもわたしを見張っていること。
「太古の昔より、人は神をあがめてきました。稲の初穂を捧げ、最初にとれた鹿を生け贄にし、時としてひと一人の人生を神のために費やすことさえあるのです。それでも神はほんのきまぐれで人に祟る。洪水、山崩れ、大嵐、日照り、流行り病……今の

人間はそれらに勝てるほど強くなかった」
そう、どれだけひどい仕打ちをされても物部の家からは逃げられない。弱い自分ひとりでは生きていけない。兄に頼るほか無いのだ。
「けれど人がこのように弱いのならば、強くなれば良いのではないのですか」
神子の言葉が、わたしの心に響く。考えもしなかったことだった。
「……出来るの、ですか」
「ええ。出来ますよ。何しろ君にはsarīraが入っていない。すなわち神仏の監視を離れて生きることが出来る。加えて素晴らしい仙骨もあるようだ。仙人になるためにうってつけの条件を備えています」
「だから仙骨って何なんだってば」
屠自古が何度目になるか分からない問いを発した。
神子はゆっくりと笑んで、答えた。
「不老不死の超人、すなわち仙人になるための素質です。わたしと同じように布都には生きながらにして神と同等になれる可能性がある」
言っている言葉の意味はよく分からなかった。けれどとくとくと心臓が鳴る。
屠自古が口を挟んだ。

「あれ。なんかうちの親父も似たようなこと言ってた。成仏がなんとかかんとか」
「そうですね。仏教も少し似たようなところがある。善行を積んで禁欲を続けることによって、功徳を重ねれば来世かその次かもっともっと次ぐらいには悟りを開いて仏に成ることが出来るといいます」
その言葉はわたしを落胆させる。死んだ後、ずっと先のことでは意味がない。今生きている時間をただひたすら堪え忍ぶだけでは何の救いにもなりはしない。
「だが、それでは遅すぎるでしょう。わたしは出来るだけ早く人々を救いたい。自分の今、生きているこの身体で、この腕で、この指先で人間を助けたい。そのために必要なのが仙人になるための方法、すなわち道教なのです」
「……？」
わたしはそう言われてもよく分からなくて、ただ黙って首をかしげた。
仏教については、蘇我の家が奉じている蕃神だということを知ってはいる。というのも兄が嫌っているせいなのだが。
道教、仙人などの言葉はさきほどから出てきてはいるが、あまり聞いたことのない言葉だった。
「実は少し前からとある先生についているのです。まだ誰にも教えていない秘密なの

ですが、ぜひ君にも会わせたい。百済や新羅を超えて、はるばる隋(ずい)の国から来られた方なのですよ」
手を取られる。神子の目は期待にきらきらと輝いている。わたしはどう答えたものか分からずに、戸惑ってうつむくばかりだった。
自分にそんな才能があるなどとは思っていない。ましてや神になれる可能性など、考えるだけで恐ろしかった。物部の者にとって神は非日常ではない。日常の中に潜んでいる災厄そのものを神の為されたこととして受け取る習慣がある。
にぎにぎと自分の手を握ったり開いたりしながら、屠自古が問うた。
「仙骨かぁ。いいなあ。あたしにはそーゆーの無いのかな」
「残念ながら」
神子の返事はにべもなかった。取りなすように言葉を付け加える。
「でもね屠自古。君は君のまま、普通の人間でいて欲しい。わたしの妻なのだから。わたしが帰ったときに、ほっと安心出来る場所を作っておいてほしいのです」
「ちぇ。つまんないの」
屠自古は不満げだった。
「あたしもさあ、こう、ぎゅっとしてどかーん的な超かっこいい技とか使えればいい

のにさあ、波動拳とかカメハメ波とか」
「いや、止めてください。夫婦げんかしたらわたしが負けてしまいますから」
「どうせ口げんかだとアンタが勝つんでしょ。したら殴るしかないじゃん」
はたから聞いていて、仲が良いのか悪いのか分からない会話だった。
「では、娘々（にゃんにゃん）先生のところに案内しましょう」
神子はそう言うと、木のうろにそっと手を差し入れた。
</recall>

「ちょっと、布都」
「ひゃっ!?」
突然声を掛けられてわたしは飛び上がった。
心配そうにのぞき込んでいるのは、亡霊の屠自古だった。庭の椿を見ながら子供の頃の思い出に没入していたのだった。
日はずいぶん高くなりつつあった。一刻あまりもぼうっとしていたに違いない。小春日和と呼べそうな良く晴れた青い空が広がっているが、記憶の中の初夏とは違ってなお肌寒い。仙界はまだ冬のままでいる。

「す、すまぬ。昔のことを思い出しておったわ」
「あんたは回想シーンが長いのよ。片腕有角の仙人じゃあるまいし」
ぽかりと頭をどつかれる。丹で強化した身体にはそれほど痛くはないが、常のじゃれあいよりは乱暴だった。常人ならばこぶが出来ていておかしくない。頭を撫でさすりながら尋ねる。
「どうしたのだ。過去を再体験するのも修行の一つではないか。お主らしくもない」
「そうそう、大変なの」
次の言葉でまだぼんやりしていた頭が急に冷めた。
「神子が、どこにもいない」
鏡のように澄んだ青空が不意に割れたような、そんな錯覚を覚えた。

</body>
</dtml>

<part:number=02:title=A Worm Hole/>

<?Desire-in-Text Markup Language:ver=1.2:encoding=DMO-590378?>
<!DOCTYPE dtml PUBLIC :-//WENC//DTD DTML 1.2 transitional//EN>
<dtml:lang=ja>
<body>

01

神子は、昔からよくどこかへ消える子供だった。大人達の誰にも何も言わずにどこかへ行ってしまって、周りを大騒ぎさせた後でけろりとした顔で帰ってくる。そういうときの宮は蜂の巣をつついたような半狂乱で、その中で神子だけが静かに微笑している。

けれど、それは大人たちから見た時の姿なのであって、私たちにだけは必ず何かの手がかりを残しておいてくれた。それは直接口にすることもあったし、大人には判らないやり方で書き置きや伝言を残しておいてくれることもあった。

<list:item>

<i:山に薬草を採ってきます>
<i:川の金砂を拾ってきます>
<i:大王の書庫で立ち読みをしてきます>
<i:渡来人の工房で仏像を彫ってきます>
<i:北方で日照りが起こっているそうなので雨乞いをしてきます>
<i:西方で川が氾濫しているそうなので少し指示を出してきます>
<i:南方で盗賊が暴れているそうなので懲らしめて家来にしてきます>
<i:東方で物(もの)の怪(け)が悪さをしているそうなので御札で調伏してきます>
<list:item>
神子の小旅行はそれだけではなかった。
<i:ちょっと高天原(たかまがはら)行ってきますから、留守よろしくお願いしますね>
<i:黄泉(よみ)見学ツアー申し込んで来たので、三日ぐらい幽体離脱します>
<i:遠眼鏡の術で随の様子見てきます。集中するため何日か帰りません>
<i:奥羽の蝦夷(えみし)と遠隔会議なので行ってきます。夜半までには帰ります>
</list:item>
</list>

万事がこの調子だった。大人が聞いたならば、正気なのかと疑うところだったろうが、わたしたちは全て信じていた。どんなことでも神子ならばやりかねないと思っていた。師ですら舌を巻くほどの才能を発揮して、みるみるうちに道教の不思議な術を身につけていた。

それでも神子はいつでも後ろを振り返って、わたしたちのことを気に掛けてくれていた。自分一人が先にいかないように、自分の行く先を教えてくれていた。だからわたしたちは安心して彼女を追いかけていくことが出来た。

彼女だけならもっと遠くに行けただろうに。

とにかくわたしと屠自古が一番最初にやったのは、神子の部屋に上がり込んで、すみからすみまで手がかりを探し回ることだった。

千四百年前の頃の彼女の部屋と同じように、そこにはあまり物が無かった。客人用の萱(かや)を編んで作った筵(むしろ)や文机(ふづくえ)のようなちょっとした家財道具をひっくり返して調べたけれど、置き手紙どころか、落書きもヒントになりそうな傷や痕跡なども見つからなかった。どれもが新品同然に整えられていて、ほとんど使った様子がなかった。それどころか、彼女が本当にここにいたのかどうか疑わしいほどに部屋は彼女らしい徴(しるし)が

見あたらなかった。床板を剝がそうとして止めた。そんなことをしても、何も見つからないに違いない。
昔はそうではなかった。
彼女は、必ず自分がどこにいるのか、どこで何をしてくるのかを伝えていてくれた。
わたしたちを置いていくことなど、今までにけしてなかったことだ。
「屠自古……どうしよう」
自分の出した声が驚くほど細かった。まるでずっと昔の子供の頃、神子に出会ったばかりの、弱々しい自分に戻ってしまったように頼りなかった。小さく唇を噛む。痛む。その痛みが今にもへたり込みそうな心を、少しだけ立ち上がらせる。
「……とにかく娘々（にゃんにゃん）先生に聞きにいこう。あいつなら何か知ってるかも」
屠自古もまた動揺を隠さなかった。それでもなにがしかの希望に縋（すが）ろうとして、そんなことを口にした。
わたしは小さく首を横に振った。
「我らが知らぬのに、先生が知る道理もなかろう」
「でも他に聞ける人もいないじゃん。あたしたちはこの世界に三人きりなんだから」
改めて言葉にしてしまうと、それはいかにも恐ろしかった。もう兄も大王も、物部

の家も蘇我の家も、何もかもが遠い。幻想郷にはまだ馴染めていない。支配者と思しき紅白の巫女はわずか一度だけこの仙界を訪れたぐらいしか交流がないし、その他の人妖とはほとんどゆっくりと話をしたことがない。

神子と屠自古と、わたし。

心からの仲間と言えるのはこの三人だけだ。

そして娘々先生こと、霍青娥（かくせいが）もまた同じ時代からの旅人ではあるけれど、彼女はずっと昔から旅をしてきて、たまたまあの瞬間に倭国を訪れたに過ぎない。だから、少し意味合いが違った。

それに、彼女は出会った時からいくらか変だった。

<recall>

神子が木のうろの仕掛けを起動させると、横の地面がゆっくりと割れた。なだらかな縦穴が口を開けていた。

「……冗談でしょ？」

最初に口を開いたのは屠自古だった。

「冗談で済んでいたら良かったのですけれどね」

神子は、今度こそ冗談めかした口調で答えた。その言い方自体がひどく込み入ったやり方で、これが本当の出来事、洒落や悪戯ではないということを表していた。
「さあ、早く入って下さい。ひとに見られては困る」
急かされて前へ進む。穴の奥は真っ暗だった。湿った土の匂いがする。足下を何か得体の知れない虫が這っていって、思わず声を上げそうになった。
入り口をどうやってか隠した神子が、先を行く。あらかじめ用意してあったのだろう松明(たいまつ)に火を点す。松やにの焦げた匂いが鼻をついた。
わたしはただついていくだけだった。一番後ろを屠自古が歩いたから、置いて行かれることはなかった。歩いて行くうちに足下が少しずつ乾いた砂利になってくる。空気も乾いてきて、不思議な匂いが少し鼻先をかすめるようになってくる。お香のような甘い匂いがしていた。
そのうちに急に大きな空間が開けた。顔を上げると、立派な装飾の施された扉が目の前にそびえていた。扉には何人もの偉そうな異国の将軍たちがいかめしい顔で描かれていた。
その前に、門番のようにしてどっかりと座り込んでいるひとがいた。
「おぉー、太子様じゃないですかぁ！」

甲高い声を上げて、そのひとは手を振った。もう片方の手には杯(さかずき)がある。よく見ればわたしたちとあまり歳の変わらない女の子のように見えた。愛らしく渡来人風の髷(まげ)を結っている。

苦笑しながらも神子は親しげに呼びかけた。

「楽しそうですね、娘々先生。でもまだ昼間ですよ？」

「いいでしょぉ、暇なんですしぃ。あら、お友達？　可愛いじゃない、んふふ」

よつばいになってすり寄ってくる。それだけでぷんと香り立つ酒精の匂い。立ち上がろうとして、出来なくて、ぺたんと筵に座り直す。泥酔しているようだった。

「えへへへっ、わたし、霍青娥と申しますの！　青娥娘々(せいがにゃんにゃん)ってお国のみんなには呼ばれてました。あ、でもね、太子様みたく娘々先生って呼んでくれてもいいんですよっ！」

下から赤子のように指を握られてぶんぶん振られる。わたしはといえば目をぱちくりさせて、されるがままになっているしかない。

「あのね、せーがは褒めてほしいのぉ。褒めて欲しくてこの国まで来たのですよう」

でれでれと口が半開きのままで端からよだれを垂らしながら、青娥は言った。むせかえるような甘い香りがする。

「えへへー、せいが、かわいい？　かわいい？」

だらしなく笑っている。お世辞にもかわいいとかそれ以前の問題として、まず清潔さというものが欠いていた。だって、鎖骨まで真っ赤になるほどでろんでろんに酔っぱらっているし、服のそこかしこにお酒をこぼしてしまっているのだ。

「……先生、お酒はほどほどに。布都が困っているでしょう」

「ふえーん、つまんないー。やーだー」

ぶんぶんと手を振り回す。捕まれたままなので、逃げられない。どうしようかと思って屠自古を見る。彼女は面倒くさそうな顔をしながらこきこきと手首を鳴らすと、いきなり目の前の少女に殴り掛かった。

あっと目を覆ったが、何も音は聞こえなかった。おそるおそる目を開ける。屠自古の拳の上に、さきほどの女の子がちょこんと腰掛けていた。

「いやん。ずいぶん乱暴ですわね」

ゆらりと胴衣の裾をはためかせて、羽毛が落ちるほどの緩やかさで地面に降りた。音もしない。屠自古は気圧(けお)されたように目を丸くしている。

「……こいつ、何者？　体重が全然ない」

「青娥娘々先生は道教を極めた仙人でいらっしゃるのですよ。壁抜けも分身の術も得意中の得意。出来ないことはありません」

「えへへ。お酒、おいしいですよ？」
青娥は何事もなかったかのようにまた飲み始めた。杯からこぼれた様子もなかった。
「この国のお酒は甘すぎだから、わたし、自分好みの味に作っちゃいました。お酒を蒸して純粋な成分だけを留めてśarīraをナイナイしてキレイキレイしたのです。純米焼酎辛口でとっても美味しいですよ。呑んでみませんか？」
見せられた杯の中は、普通の酒のように白く濁ってはおらず、水のように澄んでいた。思わず疑うようにじいっと見つめてしまった。
その視線を遮るようにして、神子はわたしの前に手を差し出した。そして青娥の方へ杯を押し返す。
「はいはい、まだ我々は子供ですので。あと十年後にでもまた誘ってくださいね」
「神子ちゃんってばお堅いですねえ。よいではないか、よいではないかー」
「そのお召し物、よくお似合いですよ」
「あらー、ありがと！　通っていいですよ」
あっさりと道をあけた。特に何かのこだわりがあるわけでも無いようだった。
と。
通り過ぎようとした瞬間に、ふと思いだしたように口にした。

「あっ、あとねえ、神子ちゃん。その子――布都ちゃんって言うのかしら？　気をつけた方が良いですわ」
ひらひらと手を振りながら、そう忠告した。びくりとして居住まいを正す。
「強すぎる力は身を滅ぼすわ。神子ちゃんがちゃんと一緒にいるなら正しい道（タオ）が得られるだろうけど大丈夫？」
「問題ありませんよ。わたしがちゃんと見ています。約束します」
「わかったー。分からないことがあったら聞きにきてね」
「ええ。今後ともよろしくお願い致します」
両手の拳を付き合わせて、神子は深く大陸風の礼をした。わたしもあわててそれにならう。屠自古はふてくされたままで、そっぽを向いていた。
神子が扉を開ける。大きく開けた空間がそこにあった。天井の高さが見えないほどだった。風はごく弱く上の方へ流れていく。小さな足音だけでも壁にぶつかってよく響く。
「ここはわたしが作りました。そのうちに何かそれらしい建物を建てるつもりなのですが、今はまだ力不足で、空間を作り出すだけで精一杯です」
神子はこともなげにそう言うと、すたすたと歩き出した。その後ろをすっかり興奮

した様子の屠自古がついていく。ばんばんと音を立てるぐらいの強さで背中を叩いている。
「すっげー！　何なのマジ何なの、あんた！」
「ありがとう。でもね、わたしにとっては屠自古の方がすごいんですよ」
「何言ってんの、バカ。あたし、こんなん出来ねーし。つぅか何もしてねーし」
「ふふ。今にわかります」
もう屠自古は答えなかった。ただひたすら照れに照れて、思いっきり神子の背中を叩くだけだった。わたしはその様子を見ているだけで恥ずかしくなって、目をそらした。
少し歩くと、螺旋状になった階段があった。ぐるぐると目が回りそうなほどの高みにのぼり、ようやく天井に着く。一枚の木の板が渡してあり、ぐっと持ち上げると外へ出た。太陽の光がまぶしい。
「あれ、うちの庭じゃね？」
這い出て一番最初に屠自古が言った。
わたしも立って見回す。綺麗に砂利の整えられた小島の中心に立っていた。見事な枝ぶりの松が植わっている。その向こう側には朱塗りの立派な橋が見えた。それから

蘇我の家と思わしき大きなお屋敷もそびえている。
「やった、帰ってきた」
屠自古が呑気に言った。それから振り向いて楽しそうに笑った。
「おやつを食べたら、今度は山に遊びに行こう。三人一緒にさ」
</recall>

子供の頃、神子が最初に見せてくれた彼女の作った世界、すなわち仙界というものはただの土の中に開いた穴だった。当時のわたしはそれだけでも大層驚いたが、よく考えてみればそのままでは普通の洞窟と大差ない。
それがいつの間にか太陽を備え、大空を内包し、家や池や草木までもがその中に備え付けられている。今になってみれば、神子が謙遜してみせた気持ちが分からないではなかった。それと同時に、その年には既に自分の能力の可能性について知っていたということに、わたしは驚嘆せざるを得ない。
わたしの回想の中で上ってきたばかりの、庭の小島の中にある階段を、今度は逆に降りていく。思い出の中ではがらんどうだった空間に、八角形の大きな建造物が建てられている。わたしは小さく唾液を飲み込む。いつでもこの建物はわたしを緊張させ

る。そこは神子が孤独を欲した時に籠もる場所だ。わたしにも屠自古にもけして入らせない。
「夢殿(ゆめどの)にも太子様はいらっしゃらなかったのだな？」
「うん。そこは一番最初に声をかけた。返事はなかったよ」
屠自古が答える。
前を行く彼女の足は膝下から先の形を残さず、霞のようにすうっと消えている。わたしはそれをまともに見ることが出来なくて、すぐに目をそらしてしまう。
もう、それは過ぎたことなのだというのに。
千四百年も昔に、終わってしまったことなのだというのに。
わたしはたくさんの思い出をうまくやり過ごすことが出来ない。忘れることが出来ない。屠自古のことも、それから兄のことも。いつまでもこの記憶に苛(さいな)まれて生きていくのだろう。甘い記憶も、苦い記憶も全て一緒に。
今思えば、出会って最初の夏が一番単純で幸福であったのだ。
<recall>
馬はわたしたちと同じぐらいのタイミングで蘇我の家にたどり着いていた。驚き、

神子に尋ねると「あらかじめそう申しつけておきました」などと、馬の言葉が分かるようなことを言う。
「な？　こいつ面白(おもしれ)えっしょ」
我がことのように屠自古も言うので、それがいつも通りのことなのだと思うことにした。確かに常では考えられないが、神子ならば何をしても不思議ではないと思えた。
「さあて、今日のおやつは何にしようかな」
屠自古がにやりとしてつぶやく。
食事は朝と夕しかないのが普通だった。だから真昼に何か食べるということが感覚としてぴんとこなかった。それでもわたしは屠自古たちの後に付いていく。することなすこと珍しくて、どきどきした。炊屋(かしきや)の土間を、屠自古がそろりそろりと背をかがめて入っていくのにわたしたちも続く。こんなことは初めてのことで、本当に正しいことなのか混乱した。
そうっと屠自古が台の上でほかほかと湯気を立てている籠を摑もうとする。
「こぉら、屠自古姫！　つまみ食いなんてみっともない」
忙しそうに立ち働いている端女(はしため)にすぐに見つかった。ぱしりと手をはたかれそうになる。見ていられなくて目を覆う。その手を摑まれて、引っ張られる。

「バカ！　走れ！」
言われるがままに駆け出す。後ろからわあわあと女たちの恐ろしい声が追いかけてくるけれど、ただひたすらに足を動かした。息が弾むまで必死に自分の足で走ることも初めてで、喉や胸の奥がずきずき痛んだ。普段吸っている空気がこんなにも辛味を帯びて身体の中にしみ通ってくるなんて思ってもみなかった。
庭を抜けて、裏門を通り抜けて三人ですぐそばの小高い丘まで走る。草の上にどっかりと座り込んで、足を投げ出す。
「あー、怖かった。おばちゃんマジこえー」
「ふふ、楽しかったです。ね、布都」
神子は汗一つかいていないような、涼しげな顔で微笑む。
わたしはといえば、心臓がばくばく暴れていて、口の中がからからで、何も答えられなかった。
屠自古が毒づく。
「っとにもー。アンタはいつでも余裕ですよねー。うらやま」
「そんなことないですよ。どきどきして楽しかったですし、収穫もありました。ほら」
神子はそう言って、小さな鉢を差し出した。塩が入っている。

「屠自古のそれと一緒に食べると美味しいんじゃないでしょうか」
そう言われて屠自古の方を見る。かご一杯に入っているのは黒々とした何かの実のようだった。四角形を斜めに押しつぶしたような形で、両端が鋭く尖っている。
「へへん、菱(ひし)の実。冬の間に採っといたやつ、茹でるって言ってたんだ。布都は？」
そう言われても、首を横に振るしかない。何しろ、人の家に入ること自体が生まれて初めてなのだ。
「まあ、初めてじゃしょうがないか。次は頑張りな」
手を振り上げられて思わずびくりと目をつぶる。恐れていたように叩かれるわけではなく、頭を撫でられるだけだった。こわごわ目を開ける。
屠自古は少し戸惑ったように言った。
「あんたってすぐ目をつぶるね。それってかえって危ないんじゃない？」
「え？」
言われて初めて無意識にそうしていたことに気が付く。
「ギリギリまでちゃんと目を開けとかなくちゃ、避けるもんも避けられないでしょ。もうだめだってすぐに諦めるんじゃなくてさ」
その言葉は深い響きで胸の中に残る。屠自古は何の気なしに発した言葉なのだろう。

それでも、この場を超えた概念として小さな胸の内に火を点す。
こくりと頷いて返事のかわりにした。
――危ないものから目をそらしてはいけない。
――避けるためには、諦めてはいけない。
胸の中で何度か繰り返し、心の中に刻み込んだ。
まだほんの少し温もりを残している菱の実の堅い殻を、神子の持っている小刀で割る。半割れをうまくほじって食べると、中身はほくほくしたデンプン質で、栗に似た味わいがする。神子のとってきた塩を少しだけのせて食べると、どんどん口の中から生唾がわいてきて、いくつでも食べられてしまう。
腹がくちくなったら、今度は鬼事(おにごっこ)をして遊ぶ。鬼というのがなんなのかわたしは判らなくて、首をかしげてばかりいた。これは大陸から伝わってきた最新の遊びなのだと神子は言った。
「黄泉(よみ)から悪い鬼が来て、人間を捕まえて同族にしようとするんです。人間は持てる力を全部使って逃げ惑わなくてはいけません。これはそのための訓練なんですよ」
神子がしかつめらしく説明をすると、屠自古が耐えきれなくなって噴き出した。けたけた笑いながら言う。

「遊びにくだらない意味とかつけてんなよ、楽しけりゃいいんでしょ」
明け透けな言葉に神子が気を悪くしないかとはらはらしていると、思いの外、神子は嬉しげな表情を浮かべていた。
「そうですね、君の言うとおり。わたしはどうも理屈っぽくていけませんね。屠自古、ありがとう。君にはいつも驚かされる」
「よせばか、布都の教育にわるい」
屠自古が顔を赤くして照れた。わたしは何だかそれに少し慣れてきて、くすくすと笑った。
草相撲で鬼を決める。二本の大葉子の茎を絡めて引き合って、先に千切れたほうが負けだ。どの草が強いのかなんて、わたしには全然判らなかったのだけれど、偶然勝ててほっとした。わたしの足で、屠自古や神子を捕まえられる気はしない。さっき少し走っただけで、圧倒的に体力が違うのが明らかなのだ。
屠自古が鬼になった。十数えたら始まる。それまでに遠くに逃げなければならない。
わあっと駆け出す。景色が後ろに流れ出す。
少し走りだしただけですぐに息があがって足ががくがくする。のどが痛い。長い草に足を取られて転びそうになるのを踏ん張る。芋のつるで編んだ鞋の中で足の指が当

たって痛い。
神子はもう見えなくなるぐらいに遠くにいる。追いつけない。すぐに鬼の足音が近づいてきた。つかまる、と思って足を緩めそうになる。
「バカ、諦めるな！」
屠自古の叱咤を受ける。さっき刻みつけた言葉を思い出す。
そうだ、諦めないんだ。目をそらさないんだ。閉じかけたまぶたを見開いて、景色全部目に焼き付ける。前へ、前へ。一歩でも先に、遠くに。
けれど、足が心について行けない。ゆらりともつれる。
あっと思った瞬間、濡れた草を踏んづけてすっ転ぶ。そのまま勢いが止まらない。空の青、草の緑、土の茶、青臭い匂い、土の湿っぽい匂い、全部ごたまぜになって坂の下まで転がっていった。声も上げられない。体中泥まみれで、口の中にまで入った。疲労でぐったりとして、しばらく起き上がれない。地面が硬い。全身が痛い。すりむいた膝小僧がじんじんする。
どうしてこうなんだろう。どうして思った通りになれないんだろう。どうしてうまく出来ないんだろう。もっとちゃんと出来るようになりたいのに。
ひどく惨めな気持ちになりかけたその瞬間に、胸のすくような大笑いが響き渡った。

「うわははは、すっげー！　楽しい！」
何でだか知らないがすぐ隣で屠自古も転がっていた。同じように草まみれになっている。一緒に坂の上からごろごろ転がってきたようだった。
「……君たち、何やってるんですか」
丘の上から神子が降りてくる。呆れたように二人を見下ろす。屠自古の手を取って起き上がらせようとする。
「ちょっと神子！　ちょー楽しいコレ。布都が見つけた新しい遊び！　坂の上からごろごろ転がるの。もっかいやろ、もっかい！」
ばんばんとわたしの背中を叩いてくる。息が止まりそうなくらい強い力だったけれど、嬉しかった。そうやって自分のしたことを褒められるのは初めてのことで、涙が出そうだった。
「あーあ、泥だらけじゃないですか。まったくもう」
「ばーか、楽しけりゃいいんだって」
二人の声を聞きながら、目の前がじわじわ滲んでいくのを袖でぬぐった。はじめて友達が出来たことがこんなにも嬉しいなんて思ってもみなかった。
それから、三人で力一杯遊んだ。かけっこ、たかおに、水切り、かくれんぼ。夕暮

れ近くなって、ぼろきれみたいにくたくたになって、立ち上がれないわたしを屠自古がおぶって蘇我の家まで連れて帰ってくれた。
「布都はチビ助だなあホントに。名前負けしないようにしなくちゃ」
「んぅ……ごめんなさい」
「謝るなって。もっと偉そうにしてたらいいの。あんた、一応うちの親父の妻ってことになってんだからさ」
暖かい背中が気持ちいい。歳は二つしか違わないのに、こんなに安心するなんて。
「とりあえずしゃべり方から偉そうにしてみたらいいんだよ。『我』とか使ってさ」
「わ、我……？」
「そうそう。『苦しゅうないぞ。我の身体を運ぶ光栄をとくと味わうが良い』ぐらいの感じでさ」
言いながら、神子も屠自古も笑った。わたしも、声を出して笑った。
夕焼け空の雲の下、烏が帰る。わたしたちも帰る。
その時ばかりは、いつまでもこんな風に笑っていられるような気がしたのだ。
</recall>

屠自古の背中はその頃と変わらない。形の上ではわたしが使役しているような恰好だけれど、実際のところは、わたしの言うことを「いいように扱いやがって、チビ助。ったくしょうがないなあ、やってやんよ」などと言いながら聞いてくれるだけのことなのだ。

そっと、その背中に触れた。暖かい。

「どうしたの？」

「……いや。何でもない」

離れる。降りかかる思い出を振り払う。甘く感傷に満ちた記憶は心地よい。ずっと浸っていたくなるほどに。だが、それでは何も出来ない。

大きな霊廟の扉の前にわたしたちはいる。何のためにここに来たのか。神子を捜すためだ。

「娘々先生！　おらぬか？」

誰もいないかに見える空間めがけて呼びかける。声はうわんうわんと反響して、そして消えた。

「はーい、お呼びかしら」

声がした。どこからともなくゆうらりと青娥が現れる。本当にどこから来たのか判

らない。壁抜けの邪仙の異名は伊達ではない。
「先生、太子様を知らぬか？　どこにも見あたらんのだ」
「うーん、今日は見てないですねえ」
「……そうか」
やはり、と思う気持ちが強かった。神子が本気で前へ進もうと思ったら、到底捕まえられるものではないはずだった。それは、千四百年前の鬼事の時から変わらない。
「でもどこかで見かけたら伝えますわね」
そう言う青娥にわたしは軽く頷き返すだけだった。表では同情を浮かべている彼女のことを、わたしはうまく信頼出来ていない。千四百年前のあの時だって、彼女がもっときちんと誘導してくれていれば、こんなに長く眠っているはずはなかったのだ。たとえボタンが掛け違ってしまったのだとしても、その最初の間違ったボタンをはめたのは彼女なのだ、とわたしは思い込んでしまっている。それが自分自身の思い込みに過ぎないということも自覚した上で。
「では、また」
「はい」
ごく簡単な挨拶だけを交わして、わたしは元来た道を戻ろうとした。

本当ならもっと足を動かして走り回って探すべきなのだろうけれど、仙界の外へ出るのは怖かった。それに青娥が見ていないのだから仙界の外へは出ていないのだと、自分で自分を信じ込ませるしかなかった。

と。

「そうそう、そう言えば」

去り際、青娥が言葉を付け足した。いつでもそうなのだ。彼女は大事なことを終わり際になってから口にする。慌てふためく人間を嘲笑うかのように。

「昨日、見慣れない尼僧様が夢殿の中へ入って出ていきましたわ。それからずっと、外には出ておられません」

何でもないことのようにさりげなさを装って、彼女は言った。

02

夢殿の鍵は開かなかった。かんぬきが中から掛けられているに違いなかった。何度声をかけ、扉を叩いても中からは何の音も聞こえなかった。息を切らして何度だって

扉を叩いた。破れた手から血が流れた。
見かねた屠自古がわたしの手を握りしめた。押し殺した声で言う。
「これ以上は、だめだよ」
「でも！」
「だめ。神子が中にいるとしても出てこないのなら、あたし達には何も出来ないよ」
「そんなことを言うな。我は太子様のためなら何だって、」
「あんたのそれが神子のためになっているとは、あたしには思えない」
屠自古の声は厳しい。正しいことだから、なおのこと痛い。
激しく肩を上下させて息をする。どれだけ吸っても空気が身体の中に入ってこないような気がする。身体が震えて、焦燥感ではじけ飛びそうになる。
「さあ、帰ろう」
屠自古はわたしの手を取ろうとする。それを強く振り払う。
「……嫌だ」
「ここで待っているつもり？」
「他に何が出来る。我は、太子様がいなくてはここで何をしたらいいのか判らないんだ。我が今生きて息をしているのはあのお方のためなんだ」

中で何が起きたのか判らない。何か忌まわしいことが起きたのではないかなどと考えてしまう。特に最後に神子に会ったのが仏教を奉ずる尼僧だというのなら、なおのことだ。

わたしの不安を屠自古は打ち砕こうとする。

「別に神子だって死んじゃいないでしょ。僧侶は無闇に殺生なんかしないし、ここは死人の霊魂だって目に見えちゃうようなトンチキな場所なんだから。密室殺人事件なんか起きた日にゃ犯人も犯行動機もバレバレすぎるわ。どんなにデタラメな奴だって音も光もなく神子を殺せるはずがない。あいつは強いんだから」

「……でも」

それでも言いつのろうとするわたしの頭を、屠自古はそっと撫でた。

「待つのはいいけど、あんまり無茶はしないで。あんたが自分を傷つけたりしたら、あたしが神子に怒られちゃう」

屠自古はそう言って、無理矢理に破顔する。その笑みには僅かな曇りが見えた。やはり彼女だって確かに心配なのだ。ただ、同時に神子のことを良く分かっている。どうしようもなく孤独で、孤高で、誰も追いつけないほどの天才のことを。

彼女たちは幼なじみとしてずっと長く付き合ってきたのだ。

「……わかった。我は太子様をここで待つ。お主は何処へでもいくがよい」
「よし。あたしは情報収集してくる」
屠自古はそう言ってそこから離れた。
そうしてわたしはひとりになった。固く閉じたままの扉の前に立ち、遠い日の思い出を思い返しながらその扉が開くのを待っていた。初めて蘇我の家を訪れた日の思い出を強く胸に抱き、深く深く思い出の中に入る。それが、今の自分に出来る唯一のことだった。

<recall>
「ただいまー」
屠自古が蘇我の家の御簾(みす)を上げると、半裸の中年と青年がごろ寝をしながら酒と木の実をつまんでいるのが見えた。
「ちょっと兄貴も親父もくつろいでないでよー。友達来てるんだから」
「おお、すまんすまん」
中年男が呑気な声音でごろりと寝返りを打った瞬間、目と目があった。見覚えがあるどころの話ではない。

「ななな、なんと布都姫！　厩戸皇子も！」
がばりと起き上がってわたわたと肌を隠す。二人とも耳まで真っ赤だ。
「これは、お見苦しいところを」
半裸の中年――蘇我馬子はそう言って平伏した。手は忙しく上着の帯を締めている。もの優しげな風貌をして丸々と太っている。馬子を一回り細身にしたような青年の方は慌ただしく服を引っかけると逃げるように出て行ってしまった。
「あはは、毛人（えみし）の兄（あに）ぃが逃げた」
屠自古がいかにも可笑（おか）しそうに笑った。馬子がたしなめる。
「こら！　お前も来年は裳着（もぎ）をするのだから、もう少し慎みというものをだな……」
「へいへい」
手をひらひらと振って、どこ吹く風といった様子だった。
「そうやって涼んでるってことは風呂上がりでしょ？　あたしらも使っていい？」
「ああ……構わんが」
三人で？　というのがありありと表情に浮かんでいる。
「わたしは遠慮させてもらいますよ」
苦笑して、神子は言った。

「五つや六つの子供ではあるまいし、おなごと風呂に入るほどの助平(すけべえ)ではありません」
世俗になじもうとしてのことなのか、さらりとした顔でそんな冗談を言ってみせるが、少女のように整った美貌で言われるとかえって違和感があった。神子は子供のふりをするのが苦手なんだろう、というようなことをうっすらと思った。
ともあれ、わたしには判らないことが一つあった。
「風呂、とは？」
何のことだろう。初めて聞く言葉だった。
「ああそうか、布都姫は知らないのですよね。舶来(ハイカラ)ですよ」
ぽむ、と手を打って馬子は言った。
「是非、一度お試しあれ。大陸から御仏(みほとけ)と共にはるばる海を渡られた風習です。ただ水をかぶる禊(みそ)ぎなどとは比べものにならぬほど気持ちいいものですよ」
親しげな笑顔を浮かべて熱く語る。わたしは彼の熱意に押されて頷いていた。
「では、屠自古。案内して差し上げなさい」
「言われなくてもするよ。親父はうるさいなあ。行こ、布都」
屠自古はべえっと舌を出した。手をつかまれてぐいぐい引っ張っていかれた。
渡り廊下を歩く。塵一つ落ちていないほどに丁寧に磨かれた板の上を屠自古はどし

どしと足音を立てて歩いて行く。
「だいたい、布都をお風呂に誘ったのはあたしなのにさあ。親父はまるで自分が思い付いたみたいに横取りしてさあ、」
ぶつくさと不平を言う屠自古が、少しわたしは羨ましかった。わたしは、そんな風にあからさまに文句を言うことさえ出来なかったのだ。
「屠自古は、おとうさんと、お兄さん、好き？」
「好きじゃないよ。なんかくさいもん」
屠自古はそんなたわいもないようなことでぷりぷり怒っていて、それがなんだか思いがけず可愛らしくて、わたしは少しだけ笑ってしまった。
向かった先は、庭先の離れだった。松葉で屋根をふいたこぶりな掘っ立て小屋があり、そこからもうもうと湯気が立っているようだった。すぐ横に屋根だけがあって、四方を御簾で囲まれた場所がある。
「こっちが着替えるとこね。麻(あさ)の衣があってさ、それを着て、あっちの小屋に行くと、湯気が熱くて汗をいっぱいかく。それがすごく気持ちいいんだ。仕上げに笹の葉で体をこすって、水をざぶっとかぶったら本当に気分爽快って感じ！」
楽しげに屠自古は言う。

「着替える、の」
聞き返して、少しだけ自分の体がこわばるのが判った。嫌な汗が手のひらに滲む。
「そうだよ。だってこのままじゃ暑いでしょ」
ごく当たり前のことのように言われる。
判らないのだろう、多分。
そうだ、屠自古は知らない。わたしのことを、物部の忌むべき子を知らない。太古よりこの国に棲まう神々に体の全てを捧げなければならなかった子供のことを。神の大贄(おおにえ)で、いざという時には大儀のために犠牲にならなければならないことを。そのように育てられてきたことを。それだからśarīra が入っていないということを。
やはり屠自古には知られたくない。さっきまで明るく笑い合っていた友達にあの暗い家のことを知られるのは嫌だ。彼女のように普通の家で育ってきた友達に。
「……ごめん、なさい。やっぱり、」
言いかけたところで言葉が出なくなる。
屠自古にぎゅっと抱きしめられる。どくんと大きく胸が高鳴る。汗の、ほんのりとどこか甘いような香りが漂う。
「え、」

「はい、抵抗しない！　今日はいっぱい転げ回ったからきれいにしなくちゃー」
そのままぐっと荷物のように持ち上げられる。脱衣所まで運搬される。
「わ、わっ……！」
「あんた軽いなあ、やっぱ。服の下、中身なかったらどうしよう。幽霊みたく」
そんなわけないか、とかなんとか言って、屠自古は自分の呑気な冗談に笑った。
「だっ、だめ、はっ、恥ずかしいっ、から……！」
「いいって、だいじょーぶだって。胸がないぐらいその年頃だったらフツーなんだから。生まれてからたったの十一年とかでしょ。あたしも最近になってようやく……」
「そっ、そうじゃなくっ、て……！」
「それともあれか？　シモの毛ぐらい誰でも生えてるって。見せてやろか」
「なっ、なに、それ……」
「あれ、ひょっとして月のもの？　もう来てんの？　そんなチビなのに」
「え、え……っ？」
「そんなわけないか。こんな子供っぽい身体だもんねえ」
言われている意味がよく分からなかった。ただ口をぱくぱくして、抵抗する言葉を絞りだそうとしたけれど何も出てこない。

「はいはい、ばんざーい」
言いながら上衣を脱がされそうになる。思いっきり手を突っぱねて抵抗した。思わず涙目になる。ぎゅっと自分で自分を抱きしめるようにして身を守る。屠自古はふざけて笑う。とびかかってくる。
「コノヤロ、喧嘩であたしに勝とうなんざ十年早いってんだ！」
無理矢理手を開かされる。足下がよろけて、自分の力が一瞬ゆるんだ。
しゅるり、袴のひもをほどかれる。あわてて抑えたところ、一気に上衣を裾からめくられて、袖ごと腕を抜かれる。はらりと布は地に落ちた。
そして、屠自古の手が止まった。
「……え」
言葉が止まる。空気が凍り付く。時間が動かなくなる。さっきまでの、楽しげな雰囲気はすでにない。一瞬のうちにそれは終わってしまった。
血の気が引いた彼女の顔。視線を合わせていられなくて、思わず顔をそらした。
「ごめん、なさい」
わたしの方から詫びた。そんな顔をさせてしまったことが、申し訳なかった。
もっとうまくやれればよかった。うまく避けて、逃れて、隠すことが出来れば良か

った。ちゃんと普通の友達みたいに、秘密を知られることなしに仲良くやっていければよかった。普通の家の子供に生まれたかった。そうだったら良かったのに。

「気持ち、悪い、よね。ごめんね」

伏せた視線の先に、自分の体がある。小さな細い子供の体。胸の膨らみもほとんどないやせて貧相な体。

浮いたあばらにいくつも浮いた縄痕。肩や二の腕に刻まれた刀傷の痕。太ももにはくろぐろとした火傷の痕がまだかさぶたになって残っている。

わたしが隠したかったこと。たくさんの儀式の傷跡。清めの痕。

<recall:flashback>

<i: とん、かん>

<i: 槌(つち)の音。鉄を鍛える音>

<i: ごうっ、ごごう……っ>

<i: ふいごの音。熱く灼(や)けた刀の緋>

<i: きぃん。しゃりぃん>

<i: 鞘と擦れ合う刀の声。生け贄を求めて、神霊が呼ぶ>

<d: 戦のための刀剣を鍛えるごと、その身に宿らせる剣の神を呼ぶための贄とし

て、何度も行われた魂の禊ぎの痕跡。物部の家に生まれた子供として背負わなければならない運命∨
<i: 照り返す銀と白と赤。じゅっと肉を焼きこがす音。肌の上に走る鋭い痛み∨
<i: 痛みをこらえようと身をこごめても、縄が手首に食い込むばかり∨
<d: 剣を鍛えるのと同じように、火と水と熱く焼かれた鏝(こて)とで体を苛(さいな)められること。どれだけもがいても逃げられないように両手両足と胴体までをきつく縛られたこと∨
<i: 自分の声が自分のものではなくなる∨
<i: 声も嗄(か)れて息も絶えて、目を閉じることさえ出来なくて∨
<i: ながれた血の赤さが、油膜の浮いた水に溶けて∨
<i: 真っ赤に熱した生まれたての刃物が、その血を吸って産声(うぶごえ)を上げる∨
<d: 打ったばかりの鉄刀をわたしの血を混ぜた水で冷やせば、剣神である部霊(ふつのみたま)が宿ると信じられたこと。血を汚さないためにśarīraを入れていないこと∨
</recall>
「……それ、どうしたの」
ようよう発した屠自古の声はかすれていた。

わたしは聞かれても、答えられない。答えてはいけない。物部の家のことは、家の中で閉じていなければならない。他の家の者に知られてはならない。ただそのように躾けられたのだ。

ただうつむいてやり過ごそうとした。足下に落ちた布地を拾い上げて身にまとい、肌を隠す。そうして呟いた。

「かえらなくちゃ」

「……だめだよ」

屠自古の声が胸に響いて、痛いほどに沁みる。

「だって、それ、誰にされたの」

言葉には疑問符がついていない。屠自古の中ではもう判っている。その確信が抑えられた声の中に潜んでいる。

ぐっと握った拳の中に、決意。

「物部の家のひとが、布都にひどいことをしたんだとしたら、あたし、許さない」

その言葉は本当ならば嬉しいはずなのだけれど、わたしは何も言えない。

わたしは彼女に何も返すことが出来ない。無心に彼女を信じることも出来ない。自分には何も出来ない。兄からは逃げられない。物部の家からは、この国を統治する古

い神の末裔からは。
弱い子供は、ただ為されるがままに運命を受け入れることしか出来ないのだ。それがどれだけ非道なことだとしても、他人事のふりをして誰にも期待せずにただされるがままになっている。
今日一日は楽しかった。けれどそれは、そういう一日がたまたまわたしの一生涯の中にあったというだけのこと。明日からは、いや、今夜帰ってからはきっとまた兄のもとで暮らしていく。
そうしていつか飽きっぽい神の寵愛は離れてしまって、捨てられてśarīraを入れられておとなになって、死ぬ。
そういう風に定められている。まっぴらだけど、その一方で仕方のないことなんだと、そう思っていた。
と、屠自古が顔を上げた。
「……神子」
わたしも振り向く。
「布都。わたしに任せてください」
神子の言葉は何故かひどく沈痛に響いた。頼りがいがある言葉というよりは、自分

がこれから為す非道なことに怯えているような、そんな風にも聞こえた。

まずはじめにわたしがされたことは、とろりとした漆(うるし)の液を足首に塗られることだった。小さな刷毛(はけ)でぺたりと冷たい粘液を塗られて、少しくすぐったいと思ったのもつかの間、ちくちくと皮膚の上を嫌な痒(かゆ)みが侵蝕してきて、顔を歪めた。

「痒くてもけして掻かないように。明日になれば治るものです。痕を残さないためには少し辛抱が必要なのです。出来ますか？」

言い含められて、わたしはうなずく。そうしたら頭をよしよしと撫でられた。急なことだったので驚いて顔を見上げる。

「ごめんなさい。わたしでは、こういうやり方になってしまうのです。傷つけなければ救えない」

神子がつらそうに何度も謝るので、わたしは返事の代わりにその手をそっと握りしめた。じっと目を見つめる。言葉では伝わらないような気がした。代わりに暖かい体温がわたしの心を言葉よりも如実に伝えてくれるように願った。

なぜだろう、根拠はない。

だのになぜか、救ってくれるような気がしたのだ。神子が、わたしを。

幻かもしれない。ただの願望に過ぎないのかもしれない。
けれどなぜだか、この綺麗な顔立ちをした子供を、信じてみたくなったのだ。
理由もないのに人を信じるなんて、他人が聞いたら馬鹿だと思うかもしれないが、なぜだか神子にはそうさせるだけの風格があった。多分、最初に会ったときから何か惹かれるものがあって、自分自身がこうして存在しているのと同じように、世界が世界として存在しているように、神子がわたしを救ってくれるのだと、そう信じてしまっていた。
塗り終わると、神子は言った。
「次は、馬子殿をお呼びしてください」
「親父を？　物部の家のことを話すの？」
屠自古の言葉に、体が緊張する。乱暴な兄のことだ、ことが明るみにでればどう出るか判らない。無理矢理にでもわたしを連れ戻そうとして、矢の雨が降ってもおかしくはない。
けれど、わたしが何か言うより先に、神子が答えた。
「そうではありません。今、物部氏と揉めるのは得策ではない。時を待つのです」
「そんなこと言ったって……このままじゃ布都が、」

握りしめた彼女のこぶしが震えている。
その言葉はありがたいけれど、わたしはその優しさを、強さを上手に受け止めることが出来ない。そんな自分が申し訳なかった。初めて出来た友達をどう扱ったらいいのか判らないのだ。
それを抑えるような冷静さで、神子が言った。
「あと一年もしないうちに、今の大王(おおきみ)は死ぬでしょう」
それはひどく衝撃的な言葉だった。冒瀆と言ってもいい。それを神子はひどく冷めた口調で口にした。思わずわたしは呟いていた。
「……自分の、おとうさんのことだよね？」
「ええ。先の大王の殯(もがり)も済まないうちではありますが、彼の天命はそのように定められているのです。やむを得ません」
わたしの言葉が届いていないような気がした。自分の父親のことをそんな風に突き放して考えることが出来る神子が、ひどく冷たく鋭く、そして大人びて見えた。
「そうなれば跡継ぎを巡っての物部と蘇我の戦は避けられない。わたし以外にも皇族はたくさんいるのですから。あと一年でどれだけの力が蓄えられるか……わたしたちに課せられた試練となるでしょう」

肌がぞくりと粟立った。わたしの家と、屠自古の家とが争いになるだなんて考えるだけでも恐ろしい。もしもそうなってしまったらわたしはどちら側につけばいいのだろう。物部守屋の妹でもあり、同時に形式的には蘇我馬子の妻でもあるわたしは。

今だって蘇我の家と物部の家はあまり仲が良くない。先の大王の葬儀の際に、悪口を言い合ったという話はわたしの耳にも届いている。わたしという人質によって結びつけられてさえ、そうなのだ。

「Sarīra はなくても大人達の勝手な都合に振り回されて死ぬのなんてまっぴらだと思いませんか」

神子の目は澄んでいる。そして鋭い。

見ていると、よく鍛えられ研がれた刀のことを思い出す。顔が写るぐらいに丹念に磨き上げられた鋼鉄は、外から見ている分にはひどく静かで穏やかなのだ。どれほど苛烈な過程を経て練り上げられたか、どれほど凄惨な運命を切り開いていくのかを感じさせないほどに透徹した佇まいでいる。

「さあ、屠自古。馬子殿をお呼びしてください。そして今夜は『慣れぬ山歩きで漆に触れてひどくかぶれてしまい、満足に歩けぬため外泊することをお許し願いたい』と守屋殿に連絡するにとどめておきましょう。火を付けるのは、油を撒いた後にするべ

きです。今はまだ気付かれぬように潜んでいるべき時分かと」
神子は静かに笑んだ。怖いほどに美しかった。

呼ばれた馬子は少しばかり思慮していたが、何も言わず、ただ神子が言った通りに従った。使者はつつがなく送られ、また守屋からの了承の返書を持った使いも一刻も経たないうちに戻ってきた。
策略は不思議なくらいに順調にいった。まるで何か見えない糸に操られているかのようだった。その全てを神子は見透かしていたのかと思うと、恐ろしいぐらいだ。
ともあれ初めての外泊というのは胸が高鳴るのもまた事実だった。
わたしは客間に通され、そこに泊まることになった。夜も遅くまで三人できゃいきゃいと騒いでいて、馬子に叱られるほどだった。明かりを消した後も帯をゆるめて着物を羽織ったままで、わたしたちはひそひそ話をしていた。神子も混ざっていた。
「寝所には細工をしておきましたから」
豆を入れたずた袋を人の形に細工するのだと言って、くすくす笑っていた。そうやって笑う様は幼げで、ごく普通の子供らしい顔も出来るのだと思ってひどく安心した。
漆のかぶれはほんの二刻ほどでなくなり、それと共にかゆみは消えていた。

「神子は、女の子なのだな？」
わたしは屠自古に言われた通りに、出来るだけ偉そうな言葉遣いにするようつとめた。神子に向けてそんな話し方をするというだけで胸がどきどきしてしまう。何しろ何代か後の大王になるかもしれない方なのだ。でもそれが良い練習になるのだと屠自古は言う。
「ええ。まあ、皇族で男子の世継ぎがいないというのは大変ですからね。母がそのように育てました。政治をやるには色々と便利ですから、それは正解だと思います」
歳を取ったらどうするのかと聞いたら、男装して付け髭でも付けるのでしょうね、などと言われた。綺麗な顔にもじゃもじゃの髭がつくところを想像してみんなで声を殺して笑い転げた。屠自古などは筆で書いてやろうかなどと言って本当に書こうとしたので、あわてて止めた。
「そうだ、布都に今度お化粧してあげようか。赤土を練って魔除けのおまじないを背中とか腕に書くんだ。あと呉藍（くれない）の花摘んで口紅さして。あと、お歯黒って知ってる？大人になると歯を黒く染めるんだって。でもちょっとウゲーって感じだよね」
屠自古はちろりと舌を突きだした。まだ白い歯を見せて笑っている。それが黒くなるところなんて想像も出来ない。

暖かな闇の中で、指ずもうのやり方を教えてもらった。あっち向いてほいを教えてもらった。音を立てないように腕ずもうをやって、いっぱい負けた。負けたのに楽しかった。

明日からのことをたくさん話した。何をしたら楽しいか、三人で一緒にたくさん考えた。

「とにかくいっぱい遊ぼ。今日みたいに鬼事してもいいし、疲れたら狗尾草（えのころぐさ）を取ってきてうちの猫をじゃらしてもいいし、釣りをしてもいい。このへん全部案内したげる」

「屠自古はね、すごいんですよ。ここいらの山が全部遊び場なんです。わたしだってかなわないぐらいなんですから」

「あと、可愛い子分もいっぱいいるんだ。みんなに紹介してやんよ！」

「屠自古はガキ大将なんですよね」

「もう。そんなに乱暴じゃないったら」

約束だよと言い合って、三人で手をつないで眠った。川の字になって、本当のきょうだいになったみたいだと思って嬉しかった。

言葉の通り、翌日も遊びに行く。

すっかり漆のかぶれがなくなったのを見せると、馬子は少しだけ渋い顔をして、それから頭を撫でて、気をつけてくださいね、とだけ言った。一度家に帰った方が良いなどと口うるさいことは言わなかった。どこまで彼がわたしのことを見抜いていたのかは知らない。

「わたしが話してもよかったのですけれど」

神子がそう言ってくれるのは嬉しかったけれど、いつまでも甘えているわけにはいかないと思った。ちゃんと目をみて大人と対等に話ができるようになりたかった。そうして神子にはやく追いつきたかった。

馬に乗る。やはり彼女たちのように一人で乗ることは出来なかったけれど、昨日よりはいくらかスムーズに乗れた。けれど足の間や背中がひどい筋肉痛で、ちょっと行くだけでみしみしべきべき音を立てそうだった。すぐ慣れますよ、と神子は慰めてくれたけれど、はやく一緒に速駆けが出来るようになりたかった。

まっすぐのあぜ道の横にほられた水路に、部民（べみん）の子供たちが集まっていた。手に網

を持って何かすくっている。
「おーい！」
屠自古が大きく手を振ると、皆が歓迎の声を上げた。
「あっ、とじこさまだ。わあいわあい！」
「みこさまもいらっしゃるわ！　ああ、いつみてもすてき……」
「あれ？　となりにいる子はだれ？」
「しらないなあ。だれだろ」
子供たちがあまりに明け透けな受け答えをするので、名乗りもせずにぽかんと見ていた。脇腹をつつかれる。
「ほら、自己紹介」
「う、うむ」
こくりとうなずき、息を大きく吸って吐いた。心臓がどきどきする。子供といえど、こんなに大勢の、しかも知らないひとの前で話すのは初めてのことだ。手に汗をかいたのを、何度も太ももあたりで拭った。
「わ、我は……！」
息を吸いすぎてむせた。神子が苦笑しながら背中をさすってくれた。恥ずかしい。

子供たちがどっと笑う。汗が噴き出る。かぶりをふってもう一度。出来るだけ虚勢を張る。昨日、屠自古が教えてくれた通りに偉そうに。
「我は、物部布都と言う。以後よろしくお願いするぞ」
物部、という氏を聞いて子供達の顔色が変わった。警戒するように目つきを細めてこちらを見ている。
しまった、と思った。彼らは小さくても蘇我の配下にあたる。であれば蘇我氏の対極にある物部については、快く思っていないに違いなかった。青ざめたわたしをみて、神子がそっと目配せをする。安心させるような微笑だった。
屠自古がぐっと大きな胸を張った。子供たちはそれに見とれた。
「そ。こいつはね、布都って言うの。あたしと神子の友達。よろしくね」
そう言って強く背中を叩いてくる。また咳き込んだ。子供たちの視線がとたんに羨望に変わった。神子も優しげに笑んで、うなずいてくれる。
わたしはそれが嬉しくて、じんわりと目元が熱くなりそうになった。こらえる。これぐらいで泣くなんて情けない。でも、友達、という言葉がこんなにも嬉しいなんて。
屠自古が視線をそらすために話題を変える。
「ねえ。あんたら、さっきまで何してたの。混ぜてよ」

「あっ、あのね、どじょう捕まえてた！」
「あとかえるも！」
「たにしも！」
子供たちは口々に叫び、戦利品の網を高々と掲げてみせる。
皆で馬を下りてのぞき込む。まるまると太った泥鰌（どじょう）やきれいな緑色をした雨蛙（あまがえる）、ざらざらと音を立てそうなほどたくさんの巻き貝。子供たちが得意げに胸を張ると、屠自古はそのひとりひとりを力強く撫でてやった。神子も驚いたり感心したりする様子を見せて、子供たちはそのたびに嬉しそうに笑ったり、もじもじと恥ずかしげにしたりして喜びを表現していた。
と、子供たちのひとりが、くいくいと屠自古の裾を引いた。
「あのね、おたまじゃくしがね、いたのです」
「へえ。どれどれ」
屠自古は靴を脱いでざぶざぶと入っていく。わたしも後を追いかけようとして足を水につける。
「わっ、冷たい」
春も過ぎて夏の初めだというのに、香具山（かぐやま）の雪解け水はまだ縮み上がるような温度

で流れている。足を引っ込めてそのまま土手に腰掛けた。すぐ横に神子も座る。
「屠自古は元気ですねえ」
「えー、そんなに冷たくないじゃん。オタマだって全裸で泳いでるんだし。気合いだ気合い」
屠自古は袴の裾を膝までめくり上げている。白いすねが水に濡れていた。
「全裸って」
神子が小さく笑う。
「服を着てるなんて、神子は軟弱だなあ。脱がしてやろか」
「そういう君だって」
「見たい？」
「年頃の娘がみだりに肌を見せてはいけません。教育に悪い」
軽口の応酬は横で聞いているだけで楽しい。くすくす笑った。
と、神子が言う。
「人間は温かいから、冷たい水に触れると冷たく感じるんですよ。蛙も魚も体が冷たいから水を冷たいとは感じないんです」
「そうかなあ」

「冷たければ冷たいほどに強くなれるけれど、そうなれば人からは離れていく。難しいものです」
「ふうん」
首をかしげている屠自古へ憧憬の眼を向けて、神子は笑んだ。その目は寂しそうに見えて、わたしはどうにかして彼女をつなぎ止めておきたいと思った。胸を高鳴らせながら、そっと手を伸ばそうとした。少しでも近くに居られればと思って。
「あ、」
神子がその時急に立ち上がったせいで、すかっと空振りをしてバランスを崩す。水路に向かって落ちる。ちゃんと着地したつもりだったのに、つるりと足下が滑る。
「うわわわわわぁっっ……！」
ざぼーんと景気のいい音を立てて水しぶきが上がった。尻餅をつくぐらいに。
「だ、大丈夫ですか」
神子は高いところから手を伸ばす。その手を取ったのは、わたしではない。
屠自古が満面の笑みを浮かべて言った。
「でーい、あんただけ濡れてないとかズルイじゃんか！」
思い切りぐっと引っ張る。きゃああと高い声を上げて神子も水路に落ちた。三人で

ずぶ濡れになった。
「ほらほらっ、濡れ方が足りないぞー！」
調子にのった屠自古が水を掛けてくるから、こっちも一生懸命反撃した。子供たちもそれに混ざる。甲高い歓声が上がった。跳ねた水滴がきらきら光って宝石みたいに綺麗だった。のどかな日ざしの中で、奇跡みたいに透明な空気が吹き渡っていた。

それがこのざまである。
「ぶえーっくしゅ」
盛大なくしゃみと共に鼻水が垂れた。ずるずる音を立ててすする。
川から上がってずぶ濡れの状態で、とりあえず着替えるべく蘇我の家に帰った。頭ががんがんと痛く、くしゃみと鼻水と喉の痛みが止まらない。服を着替えても寒気が止まらないので、真昼から火鉢を抱えて離さないようにする。
心配した屠自古がおでこをくっつけてくる。
「あ、熱」
「え、ホントに？」
ほらほらやってみ、と言われて神子もおでこをくっつける。息の暖かさを感じるほ

どの近くで、心臓が止まりそうになる。ぎゅうっと胸が締め付けられて息苦しくなる。慌てて目を閉じるとかえって意識してしまって、けれど目を開ければ彼女のきめ細やかな肌や柔らかそうな唇が目に飛び込んでくる。困る。

「あー、確かにちょっと高めですね。しばらく寝てた方がよさそう」

半分以上は神子のせいだと思ったけれど口にはしなかった。喉が痛いせいだということにして、むっつり黙っていた。

そうしたら、その心を読んだかのように、喉の痛いのが和らぎますよと言って、どろりとした暖かい飲み物を木椀に入れて持ってきてくれた。

「すりつぶした葛(くず)の根に生姜(はじかみ)と蜂蜜とを混ぜてお湯で溶いたものです。暖まりますよ」

こくりと頷いてゆっくりすする。

「熱(あち)っ！」

「慌てないで。ほら、吹いて冷ましてあげますよ」

木の小さじですくって、ふうふうと息を吹きかける。甘い良い香りがして、頭がますますぼうっと熱くなった。

火傷した唇に、指先でそっと触れる。ちょっと痛い。

「あとで蜜蠟でも塗ってあげましょうか」

そう言われるけれど、ふるふると首を横に振る。これ以上のぼせあがったら頭が爆発してしまうに違いない。特にその細い長い美しい指で唇に触れられたところを想像するだけで、きゅうと音を立ててしまいそうに心が高鳴る。

小さじの中の液体は、優しい甘みの中にぴりりと生姜(はじかみ)が効いているのが、痛んだ喉に心地よかった。そうしているうちにじんわりと汗をかいてきたので、暖かくしてそのまま夕暮れまで眠った。

夢はみただろうか。憶えていない。熱にうなされているはずなのに、これまでにないほど心地よい眠りだった。今までの寝不足を取り戻しているようだった。

</recall>

夢殿の前で神子を待ちながら記憶に浸っていた。ふと、視線を上げる。何か物音がしたような気がしたが、扉は開いていない。居住まいを正す。立っていても疲労するということはないが、扉の前に正座をする。その方が、誠意が伝わるような気がする。見えもしないのに誠意などと、ほかの人なら思うかもしれないが、わたしたち仙人の前には一枚の扉など意味もないことだ。

あたりはひどく静かだ。時間も判らない。夜なのか昼なのか。屠自古が行ってしま

ってからどれぐらいの時間が経ったのか。
何かがとくりと音を立てた気がする。心臓の音。わたしだけではない。わたしの中の鼓動だけではない。扉の中で呼応する気配を感じる。問いかければ答えてくれそうなそんな気がした。
「神子……？」
声に出した途端に、その徴(しるし)はかき消えてしまった。
急(せ)いたことがいけなかったのだろう。わたしはまた口をつぐんで、中にいるはずの神子のことを思い続けた。わたしたちが過ごしてきたたくさんの日々のことを思った。過去の記憶からわき出てくるたくさんの感情や欲望、ありとあらゆる思いを自分の中に巡らせた。
そうすることで見えてくるものがあるはずだった。

<recall>

外がにわかに騒がしくなって目を覚ました。
ゆっくりと起き上がり、服を直す。ばたばたと誰かが邸内に駆け込んでくるのが聞こえた。わたしは怖くなって部屋で息を殺し、耳を澄ませて隣室から漏れ聞こえてく

る使いの者の声に聞き耳を立てた。
「馬子殿。ご無事であらせられましたか。宮中はひどい騒ぎになっておりますぞ」
「何事だ」
「は。恐れながら申し上げます。穴穂部皇子、なんと炊屋姫へ妻問いなされました」
「何だと……?」
馬子の声は震えている。
このことが本当だとすればなんとも恐れ多いことだった。炊屋姫は先の大王の后にあたる。まだ喪も明けきっていない相手に和歌の交換もなしにいきなり婚姻の要求をするなど、いかに位の高い皇族であろうとも許されることではない。内乱の兆しがそこにあった。
「それだけではありませぬ。姫が忠臣、三輪逆これを拒み、宮中にあまたの兵が集められております。して、皇子は七度呼ばわれましたが、返事など来るはずがございませぬ。皇子のお怒りは必至かと。いかがなさいます。いずれはこちらへもやって参りましょう」
「うむ、判った。馬を門の側へ回せ。このような大事であれば大連の守屋と詮議せねばなるまい。我が家へ土足で踏み入れられるよりは、こちらから参るに如くはなし」

ため息まじりに彼は言った。そうしてこちらの部屋の近くまで来ると、御簾の向こう側のわたしへ向けて声を上げた。
「騒がしくして済みません、布都姫。これから私は出かけねばならない。あなたのこと、守屋にはよく言っておきますが、ごたごたの続く物部の家にはしばらくは戻らぬほうが良いやもしれぬ。このようなボロ屋で申し訳ないが、今しばらく当家にご逗留されるがよろしいかと」
わたしはこくりと頷くが、彼には見えないのに気が付いて、細々と声を上げた。
「あ、ありがとう、ございます。ボロ屋なんてとんでもない。大変良くしていただいております」
彼は驚いたように声を上げ、それから快活に笑った。
「仮初めの婚姻を交わして久しいが、正直な話、はじめてあなたの声を聞いたように思いますよ。これからもそのように親しくしていただければ幸甚でございます」
深々と礼をする衣擦れの音が聞こえた。それから慌ただしく彼は出て行った。
わたしは嫌な予感を振り払うように何度も首を横に振ったけれど、喉の奥まで息が入っていかずに苦しいのが消えなかった。
たまらずに邸内の神子たちを探しに行った。廊下を一人歩くと、微かに板が軋んだ。

夕暮れ時の他家は心細い。一歩ずつ足を進めるごとに、闇の中に落ちてしまわないか、おぼつかなくなる。きょろきょろと見回しながら頼れる友人のことを探す。

と、神子の声がした。

「おや、起きたのですね」

そちらを向くと、二人で火鉢に当たりながら椎の実を煎っているところだった。初夏とは思えないほどに空気が冷え切っている。雹(ひょう)でも降りそうな夕暮れだった。

「こっち来なよ」

屠自古がそう言って片手を上げただけで、わたしはなんだか気が抜けてしまって崩れ落ちるように抱きついてしまった。柔らかくて暖かな人肌に触れるとそれだけで生きた心地がする。

「こらこら、どうしたの。ひょっとして寝ぼけてる？」

そう言って膝の上にのせてくれる。神子のたおやかな指先も髪を撫でてくれる。

「大丈夫ですよ。まだ本当の戦にはならない」

神子に言われてこくりと頷く。起き上がるのがだるくて、ころりと横になって、暖かい膝の上に頭を載せて丸くなって寝ていた。指先と指先を絡めるようにしてぎゅっと握る。とくとくと自分の脈が速いのがわかった。

「どうしたの」
「……時々、息が、うまく入らなくなる。怖いとき、とか」
「それはいけませんね。気の流れ方が良くないのかもしれない」
手を握られる。そっと手のひらの中心のあたりを押される。重い痛みが少し響く。
「ここが労宮。自分でも押してごらんなさい。あとは俠白あたりもいいかもしれません。肘の関節から指五本分上にいったところの内側です。内関穴も落ち着くための経穴ですよ。手首の内側、指三本分のところ」
神子が優しく押してくれると鈍い痛みが少しずつ心を解してくれるような気がした。
「道教の修行よりも、まずは自分の体をよく知るところから始めないといけませんね」
そう言って神子は優しく頬を撫でてくれる。その手の心地よい冷たさが、わずかに火照った肌を柔くなだめた。良い匂いがして、息が少し楽になった。

翌朝から三日ほど、蘇我家の板塀の外へ出させてもらえなかった。折しも五月雨が降り始め、わたしたちは蘇我氏の持っている経典や漢籍を眺めてすごした。神子は皇族の住む宮よりも蘇我の家の方でもっぱら寝泊まりしていて、ほとんど自分の家の方には帰らないようだった。問えば、本を読むのに都合が良いから、と言って憚らない。

確かに渡来人と縁の深い蘇我の家には、そこで崇(あが)められている仏教はもとより道教や儒教に関する資料も山のようにあった。

雨だれが部屋を静かに埋(うず)めている中で、字の読み書きをおさらいする。墨の擦り方から、筆の持ち方、とめ、はね、はらいに至るまで手に手をとって丁寧に教わる。しとりと湿り気のある空気の中に、舶来の龍脳(りゅうのう)の快い匂いが溶けていった。

屠自古は性格にあった豪快な運筆で、時々木簡をはみ出した。わたしはといえば、緊張のあまりに手が震えてしまって、字が滲むことがたびたびあった。神子はどの行もきっちり同じだけの字数を書いてとても読みやすかった。

大人たちは朝と夕の食事にだけ帰ってきた。ほとんどの時を子供だけで過ごした。しとしとと降っては止み降っては止みする雨のなかで、書を読み、写し、疲れれば誰かの膝枕で休んだ。優しい手がこうべを撫でてくれる安らぎが永久に続けばいいと願った。長い上衣だけを着てだらけていた。どんな恰好で何をしようが、構わなかった。

三日目の午後になって、人に見つからないように青娥が遊びに来てくれた。その時は神子がひたすらにわたしたちには判らない難しいことについて質問し、先生がそれに判らないような言葉で返すことが続いた。わたしと屠自古は口をぽかんと開けて見ているだけだった。

それに気が付いた青娥が悪戯めいた笑みを浮かべる。
「ふふ、判らない？　なら、判らなくても飲むだけで大丈夫な仙丹（オクスリ）をあげましょうか」
くすくすと笑いながら手の中にある何かをわたしたちにちらつかせた。神子が顔をしかめて視線を遮る。
「娘々先生、そういうのはいけませんよ」
「いいじゃないの、神子ちゃんはお堅いですわねえ」
「楽をして得た力というのは身につかないものです」
「あらあら、太子様は真面目ですこと」
青娥は口元を隠して笑う。
「人の統治なぞ、śarīra を使えば簡単なことですのにねえ。本当に真面目。お勉強なんてしなくてもいいのですよ？」
「……それは禁じられています。ひとの世のことに御仏の力をお借りするのは良くないことです」
「ほほ、なら沢山お勉強なさると、よろしいですわ」
青娥はそう言うと、来たときと同じようにすうっと音も立てずに消えてしまった。
声だけが、不気味に残る。

「ふふ、あと一年しかありませんわ。頑張ってくださいましね」
それを聞いた神子の表情を、わたしは初めて見た。
いつでも優しげな笑みを浮かべていたのに、その時ばかりは、忌々しげに唇を噛みしめていた。

それと同じ頃、わたしたちの知らない場所で、兄は誰かを殺していた。
雨が降り、斬った身体から流れ出た血を洗い流していった。冷たく降る長雨の中を逃げ惑う敵を追って走り、荒い息は白く曇っていた。敵の断末魔は林のそこかしこに響き渡り、いつまでも消えなかった。錆びた鉄の匂いが強い雨水の中に溶けて、地に流れていった。
血の汚れは天水に流されて地に滲(し)みる。
そのおかげでわたしたちは生きている。

</recall>

</body>
</dtml>

<part:number=03:title=She,I’m Not/>

<?Desire-in-Text Markup Language:ver=1.2:encoding=DMO-590378?>
<!DOCTYPE dtml PUBLIC :-//WENC//DTD DTML 1.2 transitional//EN>
<dtml:lang=ja>
<body>

01

夢殿の前はずっと静かだった。それが現れたのがいつからか、判らない。

音も無く、気配もなくそれはそこにいた。初めからそうだった。神子がどうやって青娥に会ったのか、わたしは知らない。気が付いた時には既にわたしたちの物語の中に居座っていた。そして普段はいない癖に、いなくてもいいような場面で現れてはちょっかいをだし、そして決定的に運命を方向付けてしまう。

「……先生」

わたしの口は渇いていた。どうにか唾を飲み込み、呼びかけた。

「三輪逆は、確か死んだわね？　守屋に殺されて」

青娥は雲霞の上に腰掛けて、足をぶらぶらさせていた。
「ああ。
<list:dead>
<i:穴穂部皇子も>
<i:炊屋姫も>
<i:物部守屋も>
<i:蘇我馬子も蘇我毛人(えみし)も>
<i:その子も、その子の子も、その子の子の子も……>
</list>
皆、死んだ」
「人間はつまらないわね、死んでしまうなんて」
青娥はただぽつりと言葉を落とすだけだった。子供っぽく唇を尖らせて、遊び事が思いの外つまらなかった、というだけの風を装って呟く。
「……そうやもしれんな」
わたしはその意図を読み切れずに、曖昧に返すだけだ。茫洋とした過去の死のイメージだけがこの大きな洞窟の中に渦巻いている。真意などつかめない。

「ねえ、布都ちゃん。あなたはなぜ生き返ったの」
その問いかけは生き返ってまず最初に自分自身にむけて問うたものと同じだった。
何のために、復活したのか。何のために生きているのか。
誰にも求められてなどいないのに。救うべき者もいないのに。
「何のために生きていくの。何のために生き続けるの」
死すべき運命を無効にしてまで。呪われた永遠を追い求めてまで。
わたしは答えない。
過去へ向けて思いを向ける。自分の中にある確かな何かを思い起こそうとして。そうすることが、もう一度生き直すための解法となるような気がして。

<recall>

あわれな姫の、哀れな忠臣を犠牲にして、平穏に見える日が戻る。
守屋が殺したのは無法者の穴穂部皇子ではなく、それに対抗して宮殿の扉を閉めた忠臣、三輪逆であったのだ。馬子は「天下の乱は遠からず来るであろう」と嘆いた。
守屋は「汝(なんじ)のような小臣の知る事にあらず」と答えた。
それらのことを、わたしは良く知らない。直接聞いたわけではない。御簾(みす)の向こう

側で端女(はしため)たちが噂していたのを風と共に聞いただけだ。
守屋が斬った。兄が殺した。そのようなことを噂に聞くのは、忍びなかった。兄のことをわたしはうまく受け止められずにいる。単純に憎んでいるとも言えない。単純に慕っているとも言えない。胸の中で疼(うず)くものがあって、しかも捕らえようがない。
ただ、漠と思う。
なぜ、ひとは誰かを殺すのだろう。
なぜ、殺さなければならなかったのだろう。
問いがのし掛かる。こらえきれずに神子へ向けてこぼしてしまうこともあった。
「どうしてでしょうね。そうあってはいけないとされているのに、殺してしまうのは」
神子は深くうなずくと、唐突にわたしの体を抱きしめた。
そうして、必ず言うのだ。
「そうさせてはいけない。そのようなことが起きないような世界を、わたしは作りたいのです」
刃のように鋭利で、澄んで凛とした声音があった。雪解け水のように透明で濁りなく冷たかった。神子の決意の色はそのような色をしていた。
そのような声音になるのは、決まって屠自古がいない時のことだった。わたしにし

か見せない、神子の研がれた本質のことを好いた。それはどこか、わたし自身の理想を見るようでもあった。世界そのものに対して自分の疑問を正面からぶつけるひとりの凛々しい少女の姿は、憧憬を伴ってわたしの胸のうちにすうっと収まっていった。

それでも日々は過ぎていく。

田植えがなされ、日照りをやりすごしながら、稲が少しずつ育つ。

その間、わたしはずっと蘇我の家に引き取られたままでいた。ただの子供たちのように、三人で仲良く遊んで暮らしていた。わたしにとって、幸福な子供時代というものがあるとすれば、この時をおいて他にはない。米だけはさすがに食べなかったが、今までに口にしたことのない、色々な恵みを一口ずつ分けて貰って、骨張っていた身体も僅かながら丸みを帯びてきた。

兄、守屋は忙しかった。直には訪(おとな)わず、使者を立ててわたしを何度か呼び戻そうとしたのだけれど、どんな使いの者も門前であしらわれ、頭から湯気を立てて怒って帰っていった。秋が過ぎる頃には、使者も来なくなった。

収穫のお祭りをやるかどうかで話が二転三転し、今年は結局やらないことになった。大王(おおきみ)は病がちであり、また、先頃穴穂部皇子に逆らい、物部守屋によって殺された三

輪逆の残党狩りや残された領地の処遇などで小競り合いなどもあり、確かにハレの儀式などするにはこの大地は血で汚れ過ぎていた。

また、馬子もひどく忙しそうにしていた。倭国のそこここに馬を走らせ、あるいは人々を呼び寄せ、大人だけの部屋で集まって物騒な相談をしていた。そういった時に、子供は呼ばれない。わたしたちはぶつくさ言いながら馬子に従った。神子だけは近くの雀や烏に言いつけをして会議の様子をそれとなく聞くように仕向けていた。

わたしたちは近くの領民の子供たちと仲良くなって、いろいろなものを交換したり、山の実りの収穫を手伝ったりして遊んだ。釣った魚と木の実を交換したり、茸のよく獲れる場所を教えてもらったりした。分厚く育った椎茸を串にさしてじんわりと焚き火で焙ると、あわびや猪肉に勝るとも劣らない旨みを含んだものになる。はふはふと息を吹きかけると、薫り高い湯気が立ってそれがなんとも言えず心地よかった。

また、よく太った鮭が川を上ってくると、皆で大喜びをして集めた。川の流れを石や流木などを使って変えてしまい、戸惑った鮭をいっぺんに捕まえる。もちろん捕まえ過ぎては来年の分がなくなってしまうのでほどほどにしておくにしても、うまく捌いてきつめに塩をして屋敷の軒下にぶら下げた鮭の数匹は何とも言えず壮観だった。かまどの煙でもくもくと燻された魚肉をゆっくり噛みしめると、口の中で塩気と旨み

と、それから煙の馥郁(ふくいく)たる香味がにじみ出してきて、なんとも言えずうまかった。屠自古と二人でちょろまかしたのを大人たちに内緒でもぐもぐやっていると、神子がしょうがないな、と言うように苦笑していた。

屠自古はとてもたくさんの子供に慕われていて、いくつかの集落を訪れるごとに花や果物をたくさんもらっていた。未来の蘇我家当主様ばんざい、と神子や他の子供たちとみんなではやしてやると、彼女は、むぅ、と口をへの字に曲げつつも、まんざらでもない様子を見せていた。

たとえ自分自身は食べられなくても稲穂の膨らんでいく様は愛おしかった。人々の嬉しそうな気持ちが伝わってこちらまで嬉しくなる。収穫の秋が来て祭りを経れば、ほどなく冬が来る。そうしてまたもうじき春が来るだろう。去年よりもずっと平穏で安らかな春が。

そう思っていた。愚かにもそう信じていた。

さらに血塗られた春が来ることなど思いもせずに。

冬の長い夜、三人きりで一つの部屋にこもって、火鉢に当たっている。御簾の向こう側で雪がちらちらと落ちていた。神子だけが聞き耳を立ててじっとしていた。大人

たちはまた離れで会議をしているようだった。
「親父、あたしの裳着もまた今度また今度って言ってやらないんだ」
屠自古は少しだけ寂しそうに言った。
少し前に正月を迎え、それぞれ歳を一つ重ねていた。十五になればおとなになるための儀式を執り行うのがしきたりだった。裳をつけ、眉をそり、お歯黒をつける。
そういえば最近はもう、大人しくしろとさえ言われていなかった。馬子は留守がちにしていて、家の中で顔を合わせることさえ稀だった。
「大人になんかなりたくないから別にいいんだけどさ。これから先何が起こるんだろうって思うと、ちょっと心配になる」
神子はそれを見て、何か言いたそうにするけれど、口をつぐんで何も言えないでいる。うつむいてこぶしを堅く握って、唇を噛みしめる。
神子は屠自古には何も知らずにいて欲しい。そう考えているのがわたしには判る。血生臭いことや汚れていることはもとより、人間らしさとはかけ離れたこと、研がれて冷たい声音の似合う、世界に対する疑問や救済のことは、知らずにいてほしいと願っている。
だから、わたしは代わりに言う。出来るだけ胸を張って、偉そうな口ぶりで言う。

「大丈夫だぞ、屠自古。我と神子とお主がおれば百人力ではないか！　何も恐れることなどない」
「うん。そうだよね」
屠自古が微笑んでうなずく。わたしは出来るだけ力強くうなずきかえす。神子もまた少しだけほっとしたように微笑する。
――ああ、本当にそうであったらどれだけ良かったことか。
――あの神子でさえまだまだ子供だった、未熟だった。
――それならばわたしに何が出来ただろう。
疫病（えきびょう）の噂が流れ始めたのは、それからしばらく経ってからのことだった。わたしたちはまた、外に出ることを禁じられた。ただ雪も深くなってきていたので、確かに山遊びには不向きな季節ではあった。来たばかりの頃に比べればまだましだとしても、普通の子供よりも痩せているせいで寒さがひときわ堪（こた）えた。けれど、どんな炭火よりも、三人でぎゅうぎゅうと押しくらまんじゅうしているのが一番暖かかった。
三月のある寒い晩に、わたしと屠自古とは三人きりの隠し穴に呼び寄せられた。どうしても大人たちに聞かれたくない話題なのだと察することが出来た。

がちがちと歯を鳴らして階段を降りていき、額を付き合わせて神子と対面した。青娥の姿は見えなかった。

「何さ、こんなところに呼び出して」

屠自古は少し不機嫌だった。無意識に嫌な予感がしていたことの現れだったのかもしれない。屠自古にしてみれば今年は異常な年だったろう。収穫の祭りもなく、時折残党狩りに兵を出され、父親は不在がちで、兄もまたそれに付き従っている。そのくせ自分には何も情報が降りてこない。

「多分、あと数日のうちに大王が崩(かむあが)ることになります。それを契機として戦が起こることになるでしょう」

神子は暗い面持ちになりながら、そう言った。

その表情の暗さは、父親が死ぬことに対する愁(うれ)いではない。そこから派生することになる戦乱のことを考えるが故のことに違いなかった。

「守屋殿は、少しやりすぎたのです。仏教を厭(いと)い蘇我を憎んで、寺を焼き尼に鞭打ち仏像を捨て廃仏を訴えていました。しかし時機が悪かったのか、このところ疫病が流行し始めた。馬子殿は医術の心得がある渡来人たちを総動員させて対処しています」

吐くため息が白い。

三人の中で、神子だけが情報を手に入れていた。世界で何が起こっているのかを知っていた。子供だけの世界ではなく、その外側へ向けて自分の感覚を開いていた。
「わたしも時折、様子を見て回っていますが、本当にひどい。一体何のためにこんなひどい仕打ちがなされなければならないのだろうと、心の底から思います」
恐れ戦(おのの)き、そして最後に残るのは義憤であった。決意に引き締められた凛とした表情にわたしはしばし見とれた。そんなことをしている場合ではないのだろうけれど。
屠自古が問う。
「本当にこれは仏罰ということなの？」
「判りません。国津神(くにつかみ)はどれだけ大切にしていても罰を当てます。この疫病が果たして仏のせいなのかそれとも神なのか、確証はないのです。けれどどんな神でも仏でも、このように人を蔑(ないがし)ろにして良いわけがない」
そう言って神子は、みっつの赤い煉丹を差し出した。
「一緒に生きましょう、この世界に抵抗するために」
「……これは？」
「不老不死の霊薬です。娘々先生から頂きました」
ごくりと息を飲む音が聞こえるようだった。屠自古もわたしも、魅入られたように

手の中の丹を見つめた。
夢のような話だった。神子でなければ冗談かと思うようなことだ。だが、神子が真面目な顔で言うのだから、そんなはずはなかった。それに青娥娘々という者自身、得体のしれない力を持っているのをわたしたちは知っている。
「いまだわたしはこれを飲む決心がついていない。どれほどの副作用があるのかもわかりません。けれど、いざと言うときのために渡しておきます。これから先は何があるか判らない。わたしはそのうちに馬子殿と共に戦地に赴(おもむ)かねばならないでしょう。いつでもわたしがそばに居られるとは限らないのです」
「……ねえ、神子。まさかとは思うけど、その戦って」
屠自古がおそるおそる尋ねる。神子はこくりと頷き、詫びるような視線を向ける。
「おそらくわたしたちは近いうちに物部を討ちます。今日は布都にそのことを謝らねばならない。出来るだけ最小限の被害になるようにしますが、守屋だけはどうしても救うことが出来ない。彼の天命は最早尽きているのです」
わたしは、こっくりとうなずいていた。戸惑いは起こらなかった。ただ、頭の中で何かが麻痺したような感じがしていた。言われたことに、衝撃を受けない自分が不思議だった。初めからそのことを予見していたような、そんな気がした。

<recall:flashback>
傷の痛み。火傷。切り傷。吐き気。屈辱。束縛。闇の中の子供。血の呪い。物部という運命。兄という名の、家族という名の、神という名の暴君。
</recall>

出会った時に、神子に惹かれたことそれ自体が、初めから物部の神に対する裏切りであった。祖先の神を奉じることよりも、神子と共に生きることを選んだこと自体が、兄に対する裏切りであったのだ。

頭の中で言い訳をした。わたしは小さく首を横に振った。

「謝る必要などない。我は如何なる時でも太子様の味方だ。太子様は、正しいと思われることを為せばよい。我で出来ることであれば、何でも手伝おう」

わたしは出来るだけ胸を張って答えた。けれどいかにも軽々しかった。

このときのわたしは何も知らなかった。自分が何を選んで何を捨てたのかさえ全てを把握していたわけではなかった。そのための覚悟も決意も足りなかった。ただ無垢で、同時に愚かだった。

感情らしい感情がきちんと育っていなかったのだろう。今まで自分で何かを決めたことがなかったのだ。わたしの代わりに神子が考えてくれた。決めてくれた。それに

縋(すが)っていただけだ。このときの神子が何を考えていたのかも、何を知っていて、何を諦めて、何を詫びたのかも知らずに、ただそれに服従した。

<!--それが物部布都の口から物語ることの限界。-->

「わかりました。ありがとうございます」

神子は多くを語らない。ただ深く礼をしただけだ。そうして顔を上げた次の瞬間にはいつもの柔らかな表情に戻る。

「布都。どうかわたしの居ない間、屠自古を守って下さい。それが唯一の願いです」

「あはは、逆じゃないの。あたしが布都を守る方がありそうなことだけど」

屠自古はそう言ってばんばんと神子の背中を叩く。

「だって、屠自古はわたしの妻になるひとでしょう。だから、本当はわたしが守らなければならない。でもそれは出来ないから代理をお願いするのです」

神子はそう言うと屠自古の手を握り、手の甲に口づけを落とす。屠自古の頬が朱に染まる。

「ちゃんと無事でいるのですよ」

「ていうか、あたしも一緒に行くよ！　それだったらいいでしょ」

「いけません。戦は男が行くところです。平素より男として振る舞っているわたしな

らともかく、屠自古がついてくるのはまずい。戦後の統治に影響が出る」
「でも、あんた、あたしよりひょろいし！　それぐらいならあたしが行ったほうが……あたしだって、何か、あんたの、ために、何か……っ！」
同時にぽろぽろと大粒の涙が溢れる。屠自古自身も驚いたような顔をして、嘘、やだ、なんて独り言がこぼれて、それでも止まらない。やがて小さな女の子に戻ったみたいな、ふぇえん、なんて小さな声を上げて泣き始めた。
屠自古が泣くところを初めて見た。わたしは慰めるより先にどうしたらいいのかおろおろして何も出来なかった。神子はそっと彼女の頭を撫でた。
「大丈夫。すぐ終わります。直接の交戦はごく限られていることでしょう。屠自古にはこちらに残って領民の面倒を見て欲しい。このまま疫病が流行り続けて、苗作りや田植えに影響が出てはまずい」
「……わかったけど。もう、こういうのやだ」
ぐしぐしと袖で自分の涙を拭いて、屠自古はそっぽを向いた。鼻の頭が真っ赤だ。
「危ないことしないで。それだけ約束して」
横を向いたままで小指を出す。きゅっと結んだ。
「大丈夫ですよ。大体、わたしがそんなヘマをすると思いますか？」

そう言ってにこやかに笑んだ。
「屠自古。帰ったら、結婚しましょう」
「や、それ、死亡フラグだから」
「大丈夫大丈夫。わたしには道教の修行があるんですから」
神子が珍しく調子のよい軽口を叩いていた。どこか無理をしているようにも見えた。

02

翌日から、神子は馬子や毛人(えみし)たちと綿密な打ち合わせを始めた。絵の上手いものに書かせた近隣の地図を開いて、ああでもないこうでもないと難しい戦術の話をしている。わたしたちは邪魔をしないようにそこを離れて二人だけで遊ぶことになった。外は病や戦で危ないからと家の中や庭ぐらいまでしか出ることを許されなかった。
山桜は散り始めていた。去年は出会った頃にはもう葉桜になっていたから、本当なら今年は初めて三人で見られる桜になるはずだった。ただ遠くから二人で眺めるだけの花になるなど、思ってもみなかった。

神子はああ言ったけれど、病人の看護などやらせてもらえる道理はなかった。伝染病であることは自明だったから、馬子が何もさせなかった。見張りの立つ表門や裏門はもちろんのこと、垣根の破れさえ丁寧に修復されて、家の外に出させてもらえなかったのだ。娘を大切に想うゆえのことだとは判っていても、何も出来ないことに対する屠自古の焦燥感は募る一方だった。

「戦場は女子供の出てくるところではない。自分の部屋に戻りなさい」

彼はそう言って首を横に振るのだった。屠自古も言いつのる。

「あたしだって、何か手伝いぐらい……！」

「屠自古。聞き分けのないことを言うな。私と神子の想いを無駄にしないでほしい」

ここで『私の』とは言わないのが、馬子のずるさだった。神子のことを思うと、わたしも屠自古も黙ってしまう。彼女の邪魔だけはしたくなかった。

それはこの上なく大人の理論だった。どうしようもなく正しい論理で、馬子はわたしたちを退けた。悔しい思いをして、下がるより他なかった。

庭で蹴鞠（けまり）などをしていても二人では続かなくて、面白くない。こんなことは早く終わればいいのに、と盛んに口にするようになった。

「やっぱりあいつがいなくっちゃ」

「そうだ。やはり神子がいなければ」
わたしたちは口々につぶやいた。手慰みに仏像や何かを彫ることも試みたが、長続きしなかった。仏教のために何かする気にはなれなかった。わたしたちにとっては仏もまた神の一種に過ぎなかった。人は人の手で救われるべきだと考えていた。だから、神子を信じた。
蘇我の家で働く者も、遠巻きにしてわたしを見ていることが多くなった。ことに、大王が病の故に仏に縋る旨を詔(みことのり)してよりは、物部に対する風当たりは強くなる。自然と後ろ指を指されることは多くなった。
それでも誰かがひそひそと噂しているのを見ると、屠自古はつかつかと歩いて行って胸ぐらを摑み、低い声ですごんだ。相手の粗末な麻衣の襟首をひっつかんで、顔を近づける。
「あたしのツレに何か用なの？　ああ？」
その者がひるんで何も言えないのを見ると可哀想で、わたしは屠自古の手を握って小さく首を横に振った。
「なんでよ」
「乱暴は良くない」

「でも、あたしはこういう卑怯なのは大っ嫌いなの」
「大丈夫だ。我は気にしてなどおらぬ。それに彼らが悪いわけではない。力なきものは、このようなことをしてでも心の余裕を作りたいのだ。民草(たみぐさ)を導くものはそれを許さなければなるまい」
わたしはそう言って、震えている領民を下がらせた。
「気にするな。何でもないことだ」
「……が」
何か小声で言い捨てて、その者は逃げていった。屠自古が尋ねた。
「何だって？」
「……何でもない。気にするな」
わたしは凍り付いたような笑みを浮かべて、首を横に振った。
何をいうか、裏切り者めが。
確かにそう聞こえた。屠自古に聞こえなかったことだけ、わたしは感謝した。これ以上のもめ事はもうたくさんだった。

また、夜に眠れなくなることが増えてきた。一人きりで闇の中に沈んでいると、そ

れだけで何か、嫌な匂いがするような、嫌な気配がするようなそんな気持ちになって、冷や汗がだらだらと流れていく。どろりとして濃い春の夜闇が肺の奥へ侵入していくような感じがして、呼吸がひどく浅くなって、経穴を押しても息がうまく入っていかない。そのまま窒息して死んでしまうのかと思って、気分だけがやたらに焦り、部屋がぐるぐると回ってしまうような気がする。

そんな時には、屠自古の部屋を訪れて、手を握っていてもらった。暖かな手を握りしめてうずくまっていると、少しだけ息が楽になる。眠れはしなくても抱きしめられたり優しく背中を撫でられたりしているだけでせめて心が和らぐ。三人ではなくて二人だけなのは寂しかったけれど、ひとりよりはずっといい。

屠自古は、わたしのあばらの上に指を滑らせて、その骨の硬さを確かめるように何度も撫でた。

「布都は、細いね」

「ん……」

「一年前に比べたらちょっとはマシになったけど、もっと幸せでふくふくにしてあげたいな」

「うん」

頭の隅がぼうっとして、うまく答えられなかった。一緒にいると安心した。ただそれだけで心の飢えが少しずつ満たされている気がした。
「ごめん。うるさくて眠れない？」
「だい、じょぶ。屠自古の声、すき。落ち着く」
「そか」
優しく髪を撫でてくれる。自分の心臓の音と彼女のそれを聞いて少しずつ眠った。
二人きりの夜だった。やはり、何かが足りないような夜だった。

ある日の夕方のことだ。
茜さす夕陽の中、離れの物陰で屠自古がかがみ込んでいた。
「……何をして、」
そう問いかけようとすると、しっと指を口に当てて黙れと言う動作をした。わたしも傍らに座る。壁越しに話されている声がごく小さく聞こえてくる。蘇我毛人（えみし）とその仲間たちが今後の戦略について話しているようだった。
「……奇襲が肝心。殲滅、早く」
「申し訳も、謀反、本当に、我らの方こそ、大義はいずこに、」

「兵は百万、奴(やっこ)すら入れて、弓矢、血は絶え、総力戦、」
「物部の神、制裁、儀式、仏罰と神罰、」
「稲枯れ、田植えも、部民を巻き込み、飢饉、」
切れ切れの言葉はひどくものものしい。血なまぐさい雰囲気にわたしは震える。
「こわい？」
小声で囁(ささや)かれた。わたしは小さくうなずいた。無言で頭をわしゃわしゃと撫でられる。見上げた屠自古の顔は何かの迷いに満ちていた。どこかへ行ってしまいそうな予感がして、丸みを帯びた腰のあたりにぎゅっと抱きついた。彼女はうんとごく軽く頷いただけで何も言わなかった。
その時は何もなかった。何も言われなかった。夕食を食べ、何でもないように時を過ごした。それでも屠自古は何か、考え込んだような表情を浮かべていた。夕食を食べ終わると、わたしたちはそれぞれの寝所に向かった。
夜、またわたしは一人では眠れなくて、屠自古の部屋を訪れた。御簾の外から声をかけても返事が無くて、仕方なしに部屋へ入り、丸みを帯びた寝床に手を入れれば冷たかった。
人が入っているように見えた寝床には、豆を入れたずた袋が人の形に細工して、着

物がかぶせてあった。神子が以前にやったものを真似たようだった。
「……いない」
何処へ行ったのか探そうとして、立ち上がりかけて、足下がふらつくのが判った。息が足りない。少し休もうと思って、目を閉じて屠自古の着物の中に潜り込む。彼女の匂いがして、少しだけ落ち着いた。
目を薄く開いて寝所の闇を眺める。まだ怖い。一人きりであるのが怖い。ねっとりと絡みつくように濃い春の闇が、渦を巻いてぼんやりした固まりになりそうに感じる。人の形をした得体のしれない闇がわたしの喉に手を掛けて絞め殺そうとするような圧力を確かに感じる。何度もかぶりを振ってそれを振り払うのだけれど、喉に爪が立てられてうまく息が出来ない。咳き込んで、それから浅い呼吸を何度か繰り返す。目を閉じるとまぶたの奥でぱちぱちと何か明るい緑色が見える気がする。得体のしれない怪しげな影が浮遊しては寄りつき、降り払えばぬるりと離れ、少しずつ気力と体力とを奪っていく。ぜい、ぜいと胸を上下させても息をした感じがしない。それどころか息をすればするほど苦しくなって思わず手で口を覆う。どくどくと高鳴る心臓を抑えようとしてぎゅっと手のひらを押しつけるけれど、恐怖感と不安とでいっぱいになって冷や汗が止まらない。

そんなことが夜明け前まで続いた。
人が駆けてくる足音で目が覚めて、少しだけ気を失っていたことに気が付く。
「屠自古！　屠自古はおらぬか！」
顔面を蒼白にして馬子が踏み入ってきた。わたしははっと起き上がって身支度を整える。目と目が合った。
「こ、これは失敬。ところで布都姫、屠自古を見ていないか」
「い、いいえ」
「そうか。済まぬ」
そう言い置いて慌ただしく出て行こうとする。それをとどめた。
「どうしたのです。一体何が」
「……夢が、お告げが。いや、貴女（あなた）には関係のないこと。すまぬ。詳しくは言えぬ」
強くかぶりを振って、足早に駆けて行ってしまった。
関係のないこと。そう言われて、ひどく胸が痛くなる。わたしの方では家族だと思っていたのに、彼にとっては他人だったのだ。そしてやはり屠自古が帰ってきた痕跡のないことを知る。嫌な味の唾があとから湧いてきて、吐いてしまいそうだった。
支度を急いで済ませて、神子を探しに行った。馬子と一緒に豪族の説得へ出かけて

いたはずだったから、彼が戻っているのなら、蘇我の家に帰ってきているはずだった。
屠自古がいないのなら、他にすがれるひとはいなかった。
愛馬は厩にあった。しかし家の中のどこにも姿は見あたらなかった。とすれば、あそこしかあり得ない。庭の小島の隠し穴から地下へ降りる。板は最近触れた形跡があった。飛び降りるようにして駆けた。
長い長い階段の先で、神子がいた。青娥もいる。
屠自古の姿は見えなかった。
嫌な予感がびしびしとこめかみのあたりを叩く。重く湿った洞窟の中で呼吸がまた苦しくなる。
「神子」
声だけ振り絞る。細い声しか出ない。泣きそうになるけれど、唇を噛みしめてこらえる。泣いている場合じゃない。泣いて、甘えている場合なんかじゃないんだ。
「……布都」
闇の中に浮かび上がるように、顔色は白い。表情は凍り付いたように動かない。すがりつくように手を伸ばしかけて、そしてそれは届かない。触れることはできない。
「ですから、昨日の夜半ですよ。あの子がここを通ったのは」

青娥が声を掛けた。神子は振り返ってそれを見る。耳をそばだてて僅かな糸口をたぐろうと心を傾ける。
「もちろん、こんな時間にどこへ行くのかとわたしは尋ねましたわ。でも小さくかぶりを振って答えませんでした。きっとずっと家の中にいたからどこかへ行きたいのだろう、そう思いましたから、深く追うことはせずにわたしも眠ることにしました」
早口で言い訳をするようにして、青娥は語りを終えた。
「……すまぬ、神子。我がついていながら」
わたしはそう言った。けれど、神子の耳には届いていないようだった。返事はない。焦燥感に駆られて、言葉を重ねる。
「わ、我が、守らなければならなかったのに」
わたしの詫びは届かない。口の中がひどく乾く。聞いてもらえないことがこんなにも辛い。それがただの甘えだと判っているから、なおのこと辛い。こんな時に甘え根性が抜けないでいる自分の弱さが嫌だ。
「……参りましょう。ここから先へ行ったのだとすれば、行き先は一つしかない」
うわごとめいた声もどこまでも凍り付いて、覇気がない。焦燥感というよりは、絶望を先取りしているような、ここから先に待ち受けている惨(むご)いことに予(あらかじ)め心を慣らし

ておくかのような、そんな声だった。
「この向こう側、ずいぶん雑霊が湧いてますわね。近くで何か大規模な呪(まじな)いがあったのでしょう。戦が近くなれば珍しいことではありませんもの。おお、汚らしい。お気を付けて」
青娥は顔をしかめて、袖で口と鼻を覆った。
神子と二人で洞窟を物部の家の方面へ向けて歩いて行く。敷き詰められた砂利の足音一つ一つが、何かの呪詛やうごめきめいて聞こえた。足首に何かまとわりつくような、変に生暖かい感触があるが、手ではらっても何も目には見えない。昨夜の闇と同じような、忌まわしい気配がたゆたっている。
昨夜の不調は何か、蘇我の家に向けられた呪いの余波なのだと今更に気付いた。他の者が気付いたかどうかは判らないが、少なくとも神に近しい一族であるわたしには確かに感じられたのだ。
洞窟を抜け、桜の木の下から這い出た。こんな時ばかり、花は満開であり空は青かった。はらはらと散る花びらは白く、彼女の肩に降り積もる。払い落としてやろうかと思ったが、そのようなことが出来るような雰囲気ではなかった。うかつに触れれば火花が飛びそうなほどに空気が張り詰めていた。

ただ無言で、道を歩いた。おおよそ一年前に馬で初めて通った道だ。三人で歩いた道だ。それを今さかのぼる。嫌な予感と緊張に打ち震えながら、歯を食いしばり歩いて行く。

久方ぶりの物部の家はがらんとしていて、荒れ果てていた。門や柵はそこここがひどく蹴り破られ、修繕の痕もなく、折り取られた痕がそのままに残っている。慌ただしく大勢が出て行ったと見られる蹄の痕や足跡が道に残っていた。

門から一歩入ると、敷地内はむっとするような錆びた鉄の匂いが立ちこめていた。その忌まわしい空気に吐き気を催して思わず口元を押さえる。

「……布都はここで待っていてください」

先を行く神子が言う。細い、凛とした少女の背中が語る。

「いや、だ」

わたしは小さくかぶりを振る。

「血を見て、君にまで倒れられては困る。わたしも二人は運べない」

その言葉の違和感には気が付いた。だが、指摘するほどの余裕はわたしにもない。ただひたすらにかぶりを振った。

言葉を出す力が、自分の中から失われていくのが判った。心臓が何か別の生き物の

ように、どくんどくんと蠢(うごめ)いて、逃げ出して行ってしまいそうなほどだった。それでも、荷物にはなりたくなかった。ここで行われたことを、知っておきたかった。

息は絶えそうになっていた。それでもどうにか絞り出す。

「だいじょう、ぶ。弱くない」

神子はただうなずいて、先へ歩いた。心細かったけれど、手を繋いではくれなかった。握り拳を作る。自分の手だけ、爪が食い込むほどに強く握りしめた。

神子の背中にだけ集中する。ひとりきりの、万人の先を行く天才の背中。誰も触れることの出来ない、超然とした姿を見つめ、追いすがった。

人気のない屋敷をぐるりと一回りし、何もないのを確かめる。しばし思考して、それから神子は何か思い付いたように、厩へ向かった。

暗い入り口から既に、得体の知れない瘴気が立ちこめているように見えた。小さく唾を飲み込もうとしても喉の筋肉が萎縮してしまって、出来ない。気持ちが悪い。苦い唾が次々に湧いてくる。

一歩だけ足を踏み入れる。くちゅと足下の泥濘(ぬかるみ)が音を立てる。目が慣れるまでに少し時間が掛かった。

そして、眼前に広がっている光景を、瞬時には理解出来なかった。ただその凄惨な

気配だけで一瞬にして血の気が引いたのを、壁に手をついて支える。
「……っ」
吐き気を押しとどめる。暴れ出しそうな息を止める。強く強く、腕に爪を立てて意識を保った。痛みが、自分を取り戻してくれるように願った。
土の床には赤い水面が広がっていた。ただの泥と思った足下の泥濘(ぬかるみ)は肉片と血が土と混ざって泥になったものだった。桶からこぼれ落ちた馬草(まぐさ)さえ血と肉にまみれて元の有様が判らないほどでいた。屋根と壁だけで出来た簡素な小屋の中には生きているものの気配はほとんどなかった。
そしてその血生臭い水たまりの中央には、倒れ臥した馬の死骸が二つ、そしてそれに折り重なるようにして仰向けになった女の、いや、屠自古の体があった。綺麗だった長い髪がびっしょりと血に濡れて、黒く光っていた。着物は全て赤黒く染まっていた。彼女の膝から下は、断ち切られてなくなっていた。
神子は一瞬足を止めたが、すぐに駆け寄りひざまずく。着物の裾が赤く染まる。
血溜まりの中に、神子の肩から落ちた桜の花びらが一つだけ落ちた。僅かの間たゆたい、そしてすぐに暗く滲んで沈んだ。
「急ぎましょう。まだ、息はある」

目を閉じたままで動かない屠自古の口元へ手をやり、神子は抑えた声で言った。

03

蘇我の家にどうにか連れ帰り、手当を受けさせるまでの出来事は正直あまり憶えていない。ただ指示されるがままに動き、音のない世界を生きているような感じだった。

止血が出来るような状況ではなかったのに、なぜか傷口からはほとんど血が流れなかった。傷が腐ってもおかしくないはずなのに、不思議なことだった。患部を洗い、包帯で強くしばってはおいたが、気休め程度にしか思えなかった。本当ならとっくに死んでいてもおかしくないほどの傷だったのだ。痛みに顔を歪めることさえなく、屠自古は昏々と眠り続けていた。何が起きたのかを聞く事も出来ない。

一通り手当が済んだところで、馬子と神子とわたしとで、一つの部屋に集まった。何があったのか、わたしにも聞く権利があると神子が強く言ってくれたのだった。馬子は渋い顔をしていたが、神子の強い説得に負けて重々しく首肯した。

まずは神子たちの側に起きたことについて、教えて貰った。

「……昨日の晩のことです。仏教絡みの論争で大王のおわす宮より追い出された意趣返しとして物部氏ならびにそれに近しい中臣氏から強い呪詛を受けました。中臣氏は、蘇我氏に縁の深い皇族たち、特に押坂彦人大兄皇子や竹田皇子の像を造って弑逆の呪いを行いましたが、追跡型の攻性防壁にかかり、居場所が明らかになったところを我々の舎人に惨殺されました」

淡々と神子は語る。まるで人ごとのようでもあった。蘇我氏に近い皇族ということでいうならば、自分自身も標的にされかねないというのに、まるで事務的なことがらのように凄惨なありさまを語った。

「どうにか死ぬ間際に尋問を行ったところ、物部氏もほぼ同時に呪殺を企んでいるとのことで、警戒してはいたのですが、標的も場所も判らず手をこまねいていました。激論の果て、今夜は見張りを立てて休むことになりましたが、なかなか寝付けずに明け方うとうとしたところで、一つの惨たらしい悪夢が浮かび、その中に生け贄として捧げられた屠自古の姿が映ったのでした」

馬子も同じ悪夢を見たという。そのせいで今朝方、蘇我の家に二人して駆けつけてきたということだった。

判らないのは、なぜ屠自古が生け贄として囚われたのか、ということだ。物部がこ

ちらに入ってきたとは考えにくい。ならば、屠自古の方から直接あちらに出向いたとしか考えられない。実際、青娥は、屠自古が夜更けに洞窟の中を通ったのだと言っていた。

何をしに向かったのか。判らない。

昨晩のことを思い返す。どこか思い詰めたような表情を浮かべていた彼女のことを考えると胸がつぶれそうに痛む。もっと、きちんと聞いていれば。そう思うと悔やんでも悔やみきれない。

「さあ、布都。昨夜のことを、憶えていますか。何か気がかりなことはありませんでしたか」

「……すまぬ。昨日、たまたま通りがかったところで戦況について立ち聞きをしていた。それを聞いてからずっと、あいつは悩んでおったようだ。我がもっと、しっかりしておれば……何をするつもりなのか、気付いておれば……」

いけないことをしているのだという自覚はあった。改めて口にすると心苦しい。

「何を聞きました？」

「切れ切れにしか聞こえなんだ。奇襲、殲滅、大義、飢饉……そのようなことであった。とにかく物々しく、恐ろしい言葉だけが漏れてきた」

思い返して見れば、言葉だけのことであれほどに怯えていた自分は滑稽だ。それよりもっとひどい出来事が現実に起こりえたのだから。わたしがもっときちんとしていれば、もっと強ければ屠自古の悩みも聞けたのかもしれないのに。

「知っているのはそれだけか」

苛立たしげに、馬子は言葉を吐いた。わたしは小さくかぶりを振って、頭を床にこすりつけた。

「……申し訳も立たぬ。この場で首をはねて貰っても構わぬ」

本気でそう思っていた。自分が屠自古を守らねばならないのに、彼女に甘えていたのは他でもない自分だったのだ。どれほど悔やんでも足りない。

わたしはいつでもそうだ。自分自身では立てず、屠自古を失ってからは神子にすがろうとする、浅ましくさもしい。狗(いぬ)と変わらない。自分の弱さを嘆いているくせに、自分一人では何も出来はしない。たとえ十三の子供であっても、いつまでも甘えていていいはずがない。現に神子も屠自古も自分の意志というものを持って、自分のことを自分で決めているのだ。頼り切りでいるのは自分だけだ。

と、一筋の冷風が吹いた。

「……行きましょう。馬子殿」

それは、冷たい声音だった。そこにあるのは忿怒(ふんぬ)ですらない。触れれば切れそうな真冬の乾いた風を、その声の中に確かに感じた。

顔を上げた。その先には、ついぞ見たことのないような表情を浮かべた神子が立っていた。

不意に、かつて彼女自身が口にしたことばを思い出した。

――冷たければ冷たいほどに強くなれるけれど、そうなれば人からは離れていく。

あの時の視線の先には、屠自古がいた。かつて神子が憧憬を向けていた、あのように明るく笑ってさんざめく波のように駆けていく快活な少女の姿はない。神子を人たらしめていた温もりは、もうここにはない。

「……どこへ行くのだ」

馬子が立ち上がった神子を見上げる。いぶかしげに問う。

「どこと言われましても。戦の支度です。それがわたしたちの責務ですから」

神子はうっすらと冷笑すら浮かべていた。世界全てを軽蔑したような、その瞳は超然として、目の前の大豪族を見下していた。

「言い訳も言い逃れも出来ないように、有無を言わさず全力で物部を殲滅する。それが我らの作戦でした。おそらくは物部の秘術によって付けられた屠自古の傷は、それ

を補強することにはなっても妨げる理由にはならない。そうでしょう?」
それは正論だった。この上なく論理的で正しい、そして情のない言葉だった。いつか、わたしと屠自古の気持ちを退けたおとなたちと同じような、つめたい言葉だった。
わたしは何か言おうとして見上げた。それを制するように声が降りてくる。
「布都は、屠自古を頼みましたよ。こういう時こそ、守ってやらねばならない」
その言葉はもはや言葉通りの言葉ではなかった。ただ、役立たずのお前は此処にいろ、という言葉の婉曲表現のようにしか聞こえなかった。
神子を見上げた。どこまでも深く、そして、遠くを見るような目をしていた。わたしのことはもう見えていないだろう。
――ああ、神子は。
――決めたのか、一人で先へ行くことを。
彼女を見ていることが辛くて、わたしはすぐに視線をそらした。きっとわたしには追いつけないような遠くへ行くだろう。
足早に戦場へ向かう二人の足音がいつまでも鼓膜の奥へ響いていた。
神子は入念に準備を巡らせた。一族を根絶やしにすることはそう容易くはない。一

人の残党も残さずに殲滅するためには、誰が敵で誰が味方かをはっきりさせておく必要があった。誰も物部をかくまったりしないように念押しをしておく準備がいるのだ。

神子はほとんど家には帰らなかった。日夜、駿馬を駆け巡らせ諸国の豪族たちに働きかけては、自分たちの味方につくか、さもなければ死ぬかを選ばせた。答えを濁らせたものについては、必ず期限を切って答えを明確にするように詰めた。そしてその間に必ず占い師や僧や呪い師を差し向け、なにがしかの暗示を持って豪族たちの意志を揺さぶった。

兄、守屋の力はわたしが思っているよりも強かった。無論、物部の家だけではない。中臣氏の残党や弓削氏、土師氏など、倭国の古くからの神々を奉る家々の死に物狂いの抵抗は夏の暑い盛りまで続くことになった。

物部氏は例の飛鳥にある家を引き払った後、本拠地である河内まで引き上げることになった。それまでも幾たびもの呪詛が乱れ飛び、無限の生け贄の血が流れ、それらは川を染めるほどであったと言う。仏教側も大王の平癒祈願や、崩られてからは魂の平安を祈願するなどの理由を付けて攻勢防壁の呪法が出来る法師を増やし、それに対抗した。特にsarīraから得られた情報は生前においては神道側の管理下に置かれていたため、神道側の呪術は仏教側を大いに苦しめた。

……というようなことは全て、噂で聞いたことだ。わたしは戦場を直接見たわけではないし、蘇我家の中にはろくに話し相手もいなかった。

わたしはその間、ずっと屠自古の世話をして過ごした。炊屋(かしきや)にお湯や晒し布を借りに行く時も、目に見えて嫌がらせを受けることはなかったが、舌打ちや陰口などは後を絶たなかった。一度などは事故を装って熱く煮えたぎるお湯の入った桶をひっくり返されされそうになったことさえあった。すんでのところで避けたが、それ以来、出来るだけひとの居ない時間を見計らって作業をするようになった。それ以外の時間は屠自古のすぐそばで膝を抱えて座り込んでいるだけだった。風に乗って流れてくる人々の声を聞きつつ、微睡(まどろ)みと朦朧(もうろう)とを繰り返すだけだった。

眠り続けている屠自古は何一つとして変わらなかった。切り落とされた膝の下はいつのまにか皮が張り、まるくなっていた。血が引いて青ざめることもなければ、痛みに表情を歪めることもない。まるで死んだように動かずに眠っていた。手を握っていてもけして握り返してくることはない。食べることもないし、飲むこともないのに頬はこけることもなく、汗もかかず、尿を排出することもなかった。関節が固まってしまわないように、何度か手足を動かしてやり、また、体を軽く拭ってやることもあったけれど、汚れた様子も特段見受けられなかった。

生きていることは確かなのに、まるで時が止まってしまったようだった。

わたしはひたすらに自分を責めた。せめて神子が責めてくれたら、もっと気持ちが晴れたかもしれない。けれど自分以外の誰とも話さなかったから、わたしは自分を責めるしかなかった。うずくまり、独語し続けた。あの時どうして屠自古から目を離した。守れと言われたのにきちんと守れなかった。自分は甘えているばかりの子供だった。目を閉じても消えない凄惨な場面を胸の中に刻みつけた。血溜まりの中に横たわる屠自古の身体を見て感じた、全ての感覚を思い出して記憶の中で何度も再現した。こみ上げてくる吐き気と悪寒と動悸に耐えて耐えて胸の中をかきむしるような思いに目をつぶらずに見つめ続けた。

わたしは自分の身体に傷を付けることさえ許さなかった。たとえ一度でも唇を食い破れば、そのまま自分の顔を手に触れうるもので切り裂いてしまっただろう。だからただ、想像の上だけで身体を苛(さいな)む。頭の中だけで、下唇を食い破り、そのまま手にした釘か何か尖ったもので右頬を突き刺す。歯と釘の間で肉は裂けて穴が開き、地虫(じむし)のような激痛が頬の肉をじぎじぎと掘り抜いていく。想像の中のわたしの手は、容赦も思慮もなくぐじゅぐじゅと歯と歯茎の間をかき混ぜる。ほお骨と顎の骨を繋ぐ筋を断ち切ってしまうと口がもう閉じなくなってしまうだろう、ということを想像する。痛

みだけならばまだ思い描くことはたやすい。
けれど口の中に広がるさび付いた鉄の味を思うだけで、わたし自身の幻痛は消え去ってしまって、目の前の屠自古のことに意識が戻る。そうして己を深く恥じる。そのように想像の中で自分をいたぶることそれ自体が、ただの甘えなのだ。屠自古はそんなことを望みはしない。
長く長く息を吐き、少しだけ止めて、またゆっくりと吸い込む。気持ちを出来るだけ平らかにして、静かに眠っている彼女を見つめる。安らかに無防備に彼女は眠る。優美な曲線を描いた頬の稜線を眺め、静謐に閉じられた唇を視線でなぞる。目の前の彼女、自分が守れなかったひと。
彼女は確かに死んではいない。けれど生きているとも言えない。
ある日、不老不死というのは、こういうものなのかもしれない、という考えに至って、不意にわたしは神子がくれた赤い煉丹のことを思い出した。
自分の分を取り出して、しげしげと見る。艶(つや)やかに紅い丹は蜜蠟で塗られて、鈍い光沢を放っている。
そして、屠自古が何も持っていないことを改めて確認する。彼女の部屋の中をざっと検(あらた)めたが、やはりどこにもない。

飲んでしまったのだろうか。そしてその副作用のせいで眠り続けているのだろうか。そうなのだとすれば、作った当人、青娥に真意を問い質さねばならない。

でも、誰が？

――わたしが？

ここには、他に誰もいない。神子は戦場に行ってしまった。屠自古は眠っている。動けるのはわたししかいない。

背筋がぶるりと震える。明らかに怯えて、すぐには動けない自分が居る。

自分から何かをしようとするのは初めてだ。しかも、その相手が青娥であるということはさらに恐ろしい。

わたしたちが同じ教え、道教を本当に信じているなら青娥は同じ志を持った先輩であるはずだ。であるならば恐れる理由などどこにもない。それだのに体のどこかに得体の知れない恐怖が凝り固まってわたしの足を動かさないでいる。

わたしは青娥のことを信じてなどいないのだ。彼女は何を考えているのか判らない。

だとしても、事実は確かめなければならない。

全ての真実を知りたい。自分の意志ではじめて、そう思った。

</recall>

そして目の前にあの時と同じ笑みを浮かべて一人の少女が雲霞の中に浮かんでいる。ゆったりとした微笑と共に、わたしの愚行を見つめている。

「あの時、どうして全てを語らなかったのだ」

わたしは問う。あの頃と変わらず、わたしは青娥のことを恐れている。声は震え、体はわなないている。

「気休めで終わらせて欲しくはなかった。全てを知って、その上で我々に力を与えて欲しかった」

わたしの嘆きに、少女は軽やかに答える。

「だって、お父様も義父様(おとうさま)も、旦那様もこうおっしゃったわ。

<forbidden>

<i: 人を傷つけてはいけません>

<i: 人には親切にしなければいけません>

<i: 勝手にどこかへ行ってはいけません>

<i: こどもはおとなの言うことに逆らってはいけません>

</forbidden>

これでも、倭国では心を入れ替えて良い子になろうと思ったのですよ」
童歌(わらべうた)のように節(ふし)をつけて、青娥は言った。あどけない笑みは童めいている。
ひとを超越したものは、いつでも赤子に似て無垢であり、そして冷酷だ。
あの時の神子もそうだった。

<recall>

庭の小島から地下への階段を下り、わたしは青娥の元へ急ぐ。
一人きりで、青娥と対峙したことなどこれまでなかった。いつでも神子がそばに居て、彼女の言動を抑えていた。今思えば、それは正しいことだったのだろう。得体のしれない邪仙であり、酒や煉丹などの危険なものを子供に勧めるような輩(やから)であったのだから。
彼女は扉に背中を向けてやはり一人きりで酒を楽しんでいた。うなじは僅かに赤い。
わたしは呼びかける。
「先生……屠自古は、丹を飲んだのではないかと思う。判らぬか？」
「そうね。飲んだんでしょうね。足を大鉈(おおなた)でちょん切られて一晩生きていけるなんて、それ以外考えられないもの。切られてすぐ後に飲んだんですわ」

振り返りもせずにうんうんと小さく頷く。
わたしは彼女の前に回り込む。ひざまずき、視線を合わせた。
「教えてくれ。屠自古に何があった。我が知らぬことでも先生ならご存じであろう」
「ふふ、んふふふ」
蕩けたような笑み。耳朶に絡みつくように甘い。ちろりとのぞく舌先がぞっとするほど艶めかしい。
「青娥はね、たぁくさん人助けしちゃいました。三人も助けたんですから、いっぱい褒められていいはずですわね」
無邪気を装って笑う。それを見ていると、嫌な予感にぞくりと背筋が震えた。
「……三人？」
「貴女と、屠自古と、神子。ふふ、神子によって助けられるはずの、他の人たちをみんな入れたら、きっともっと私、褒められちゃいますわ」
おかしそうに笑った。その上機嫌さがひどく気持ち悪かった。
「どういう意味だ……？」
彼女の作った丹によって屠自古の一命をとりとめた。屠自古の命が救われたことによって、結果的に神子に対する物部の呪いが失敗した。そこまでは判る。

だが、どうしてわたしが？
「あら、気付いてないのかしらん」
そこで初めてわたしと目があった。興味深げに、なめ回すように、わたしの感情を読み取ろうとして視線を投げかける。
「屠自古はね、逃げ出した物部の生け贄の身代わりになったのですよ」
聞いた瞬間に目の前が暗くなる。息が出来なくなる。身体の力が抜ける。ぐらりと地面が揺れて、ぐるぐると世界が渦を巻き始める。
「ねえ、物部の姫。誰のことも殺さずに生きられるなんて、ありえないでしょう？」
いとも楽しそうに、邪仙は語った。
「馬子だって殺している。神子だって殺すわ。殺さなければ、殺されるだけです。貴女はこれからどちら側に回るの？　永遠に生き続けるということは永遠に殺し続けるということですよ」
教え諭(さと)すように耳に毒を流し込まれる。心が黒い言葉に押し流されていく。
自分のこと。これまでに受けてきた辱(はずかし)めのこと。物部の儀式のこと。神の贄であること。それらを屠自古が引き受けてしまったこと。身代わりになったということ。
「蘇我の屠自古姫はね、とても優しく、素直で、愚かな子です。物部氏を一気に殲滅

しようとした蘇我氏の戦略に反発した。申し開きを与えるべきだと、弁明の機会を与えるべきだと。古くからの神を殺すのではなく、神と仏とを共存させて生きる道を探るべきだと、そう考えたのです。そうしなければ、たとえ物部守屋が死んでも、残された者たちは心に残った傷の痛みにうなされてしまうことでしょう。そして神々の怒りと呪いとはこの大地に深く根を張ることでしょう」

謀略を聞いて複雑な表情を浮かべていた彼女。

こわい？　と布都に聞いたときのあの顔。

わたしにも、誰にも言わずに、自らの思いだけ貫いた彼女。

「馬子がその戦略を聞き入れるはずもないことは承知していたのでしょう。だから夜更けにこっそりと物部の家に忍び込んだ。ああ、なんて子供らしく誠実さと正義に満ちた愛らしい浅慮ですこと。あの物部守屋に、十五の小娘の話など通じるはずもなかったのに」

青娥の言葉には哀れみが込められてはいたのだけれど、どこか他人事で冷たい。

そうだろう、彼女は傍観者。この国の歴史になど何ら主体性を持たない。仙人というのはそういうものだ。山の人は、流れにたゆたい、時たま人と遊んではいずこへと消えていく。判ってはいたのに。

「そこで何が行われていたのか、わたしが見ていたわけではありません。ですから詳しいおぞましい所行についてはどこぞの捕虜にでも聞けばいいでしょう。人の世のことにはあまり興味がありませんもので、失敬」

その言葉は矛盾している。誰かから褒められることを望んでいるのなら、人の世に興味がないとは言えない。俗世の栄華を欲しているくせに、都合の悪いこと、気持ちの悪いものについては避けようとしている。だからこの女は邪仙なのだ。

それを指摘しようと顔を上げた瞬間にはもう、青娥は消えていた。逃げ足は速い。

胃の中に何か棘でも刺さったかのように、じくじくと痛んでいた。しばらくうずくまって、耳障りなほどに荒い自分の息を聞いていた。嫌な汗ばかりが額に滲む。

青娥の言葉はすなわち呪いであった。聞きたくないことばかりが耳に入り、知りたくないことばかり判ってしまう。受け取りたくないのならば、拒絶するよりない。そのように自分で判断しなければならない。判断するための材料すら欠いているのに。

よろめくようにして家に帰ろうとしたところで、ひどく屋敷内が騒がしいのに気付いた。小島のすぐ下で息を潜めて隠れていた。がやついた足音と話し声が、風に乗って届く。荒い息遣い。荒縄の軋(きし)む音。小突かれ、蹴られ、地に何かが倒れ臥す。

「申せ」
しんと冷えた声だった。人の口からまろびでたとは思えないほど、無機質な匂いがする声だった。誰か、別のひとであることを願わずにはいられなかった。わたしが信じたあのひとではないことを願った。裏切られると知ってはいても。
そっと板と地面との隙間から覗き見た。茂みの向こう側から透けて見えるのは、確かに神子だった。そして彼女の周りを多くの従者たちが取り巻いている。目の前で倒れ臥しているのは捕虜であった。
「あの夜に何が起こったかを説明しなさい」
「……言うとでも」
そう答えた捕虜の頭を、従者の一人が矛の柄で殴りつけた。傷口が開いて、だらだらと赤いものが流れ出す。
「まだ殺さぬように」
神子はその惨たらしい有様を見ても、まったく動揺する様子を見せなかった。しゃがみこみ、捕虜の顔をのぞき込む。そっとその頭に触れた。指先が一瞬だけぱちりと音を立て、火花が散った。
「あ、う……」

途端に捕虜はわなわなと震え始めた。歯の根も合わないようになる。
「話しなさい」
そう言って神子はまた下がる。
「……蘇我の小娘が忍んできたのは、夜更けであった。――違う、これは――守屋殿の命を狙った間者と思っていたが、――俺の、意志では――よく顔を検めれば年端もいかぬ子供。生け捕りにして交渉材料に使おうと俺たちが話していると、――舌が、勝手に――守屋殿は笑いながら良いことを思い付いた、と馬を二匹持って来させた」
捕虜は淀みなく話し出した。だが、独りでに動き出す舌に顔は引きつり、目は恐ろしさに見開いている。
「それは聞くだにおぞましい物部の秘術であった。元来、神は血の穢れを嫌うが、それは死んで腐敗した血のことであり、生きている者からあふれ出したばかりの鮮血は生命そのものとなって捧げ物となることが許されていた。また、見立てということも行われた。中臣のようにただ像を造って破壊するなどと言う簡単なことではない。例えば此度のように厩戸皇子、あるいは馬子に対する呪いであれば、いずれも馬にまつわる名前であるが故、木で出来た四つ足の台に裸にした女を乗せ、さらに剝いだばかりのまだ湯気の立つ雌馬の生皮をかぶせて、盛った雄馬をのし掛からせて犯させ、辱

めた。馬の陽根がどれほどの大きさか、知らぬわけではあるまい。それを無理矢理に入れさせられ、喉が嗄れるまで叫ぶ女の声が今でも耳について離れぬ」

うっ、と従者の誰かが息を飲む声が聞こえる。

だが、吐き気が催されるような言葉にも、神子は微動だにしない。

「……続きがあるのでしょう。申せ」

冷たい声はかすれもしない。心まで凍てついてしまったかのようだった。

「さよう。さらには、その後、雄馬と雌馬に扮した女の四肢を断ち切って二度と立ち上がらせないようにする、というような呪詛が行われる手はずであった。だが、上手くはいかなんだ」

捕虜の言葉の方が、何かに怯えているように震えていた。

「馬の四肢と女の足を斬り終わり、腕に取りかかろうとしたとき、女が何かを飲み込んだ。隠し持った毒で自害するつもりかと焦り吐き出させようとしたが、大の男が指を食い込ませても口は開かない。せめて死んでしまう前に完遂せねばと思い、大鉈の刃を腕へ向けて振り下ろしたが、刃が岩でも打ったように跳ね返るばかりで、最後には刃こぼれするほどであった。止まるはずのない両足の出血もぴたりと止んでいる。そうしているうちに、中臣の方がやられたという知らせが舞い込んできて、あの場か

ら逃げ出して翌朝、河内の本邸へたどり着いた。生け贄の女など、到底連れて行く余裕はなかった」

語りが止んだ。

神子はしばしの間、黙っていた。捕虜の怯えるような速い息遣いが聞こえてくるほどの静けさであった。じり、と砂が足下で鳴った。無意識のうちに誰もが後ずさりをしているのだった。

ひどく重い見えない威圧が神子の全身から噴出していた。その表情に忿怒の色はない。ひたすらに澄んで冷たい美貌であった。

言葉が、降りた。

「全力をもって、ことに当たることに致しましょう」

神子は慈母のように笑んでいた。ぞくりと肌が粟立つ。その場にいた誰もがそうだっただろう。

「時は満ちました。一挙に兵を集め、動く支度をせねばなりません。次に守屋へまみえる時が最後と思いなさい。御仏が慈悲を授けて下さるでしょう」

ごく小さな、凛という音を立てて七星剣の合い口が鳴った。

次の瞬間には、てん、てんと音を立てて鞠のように捕虜の首が転がっていた。血は

すぐにはふき出なかった。転がるのを止めて初めてじわりと地面に液体がにじみ出る。だれも刃先の輝きを見ることができなかった。

神子は両手を合わせて拝んだ。今、ひとを斬ったばかりとは思えない清らかな祈りだった。

「あなたにも仏のご加護を。安らぎを。あなたがいたぶった女のことはどうぞお忘れください。けして、あなたが悪いわけではありません。そのようなことは全て神仏の導きであり咎(とが)なのです」

</recall>

</body>

</dtml>

<part:number=04:title=The Day We Went Away/>

<?Desire-in-Text Markup Language:ver=1.2:encoding=DMO-590378?>
<!DOCTYPE dtml PUBLIC :-//WENC//DTD DTML 1.2 transitional//EN>
<dtml:lang=ja>
<body>

01

次に回想から意識を戻した時、青娥は目の前からかき消え、夢殿の扉は音も無く開いていた。中には神霊の輝きがいくつも舞い、さながら星空のようだった。

「太子様」

呼びかける。その動きに呼応したようにゆっくりと扉が動き、閉まろうとする。それを押しとどめるように、内側へ滑り込んだ。音も無く後ろで扉が閉まり、そしてすぐにかき消えた。

空間の中、たゆたうようにして歩を進める。底知れぬ夢殿の中をいずことも知れぬ場所へ向けて、浮遊する。ただ胸の内にある思慕を羅針盤にして神子の居場所を探す。

星の舞う如くにきらびやかで、それでいてどこか寂しい空隙の中を、一個の意志となり飛行する。
やがて大きな光がぽつりと一つ見え、近づいていくとそれが想い人の後光であることが判った。
わたしは声もなくそれに見とれつつ、惹かれていった。炎に焦がれて惹きつけられる羽虫のように浅ましきものであると判りつつも、神子には焦がれてならなかった。
正面に立つと、神子はゆっくりと目を開けてこちらを優しく見やる。その眼差しはどこか寂しそうでもあった。
「布都、ありがとうございます」
「……何を」
尋ねるが、答えはない。ただ静かにいるだけだ。
七星剣を腰に差し、笏(しゃく)を手に捧げ持っている。その笏の表面に細かな紋様が刻まれているのが判った。
「それは……?」
尋ねると、神子はごく小さくかぶりをふった。
「いけません。君がそれを読むことを望むならば、世界は合わせ鏡のように永遠に閉

じ込められて、終わらなくなってしまいます」
そして華やぐように微笑した。
「わたしは、この世界に、さようならを言おうと思うのです」
その笑顔は、あの途方もなく冷たい笑みであった。
氷で出来た蓮花のように、冷然として儚い美貌であった。

<recall>

神子が捕虜を斬ってまもなく、戦が始まり、そして終わった。
その有様をわたしは遠眼鏡の術で見た。清冽な石清水(いわしみず)を汲み、まだ一度も使ったことのない真新しい土器(かわらけ)に満たす。青娥から譲り受けた一枚の呪符を浮かべて、幣(ぬさ)で軽く払えば水面に原野の姿が浮かび上がった。
餌香川(えがかわ)の河原をものものしい一軍が歩んでいく。もっとも大きく目立つのは大将である馬子。蘇我の家にいるときはいつもにこにこしていたところしか知らなかったのに、甲冑をまとった今ではひどく険しい顔つきでいる。丸くつやつやしていた頬には暗い影が差し、焦燥が目に見えるようだった。
そのすぐそばに神子が付き従っている。その顔を見るだけで、背筋が凍り付く。恐

ろしいのではない。そこに浮かんでいるのは忿怒ですらない。血生臭い戦場に似合わないような微笑である。

彼女の目はおそらくこの世のものを見てはいなかった。今このときに存在するもののことなど、少女の視界には入らなかったに違いない。あまりにも速くこの世の概念を超越していた。心にあったのは己の進むべき道のことだけで、この世の全てのことは、彼女のために奉仕するだけのものであった。すぐそばにいる馬子はもとより、これから先死ぬべき運命にある守屋も、また、これまでに犠牲になった屠自古でさえも、神子のために捧げられた尊い贄であった。

人の身で神にならんと欲するならば、それは贄を捧げられる身になることに他ならない。

横暴、傲慢。そうだろう、常人がそのようなことを言えば。

だが、神子の目元はどこまでも涼しい。どこまで血を流してもそれら全てが浄化してしまうような風格が備わっている。あえて鎧を着込まず、軽装なままで戦場にいるのも、袖が風になびいて優雅であった。馬の上で背筋をのばしてずっと遠くを見ている姿は性別を超越した清冽さを生み出し、見る者全てに凛として引き締まっている印象を与えた。

諸侯の軍は夏の蒸し暑さにだらけて、隊列を乱していた。無理もない。陽光は容赦なく兵士たちを照りつけ、馬に乗って一段高い処にある者であっても挂甲の韋緒の間から湯気が噴き出そうなほどの大汗をかいていた。歩兵の中にはすでに肩鎧の紐や短甲の蝶番をゆるめるなどして、風が通るように軽装でいる者も出てきていた。

川辺の泥濘に馬も徒歩も動きが鈍くなった頃合いを見計らったかのように、攻撃は為された。にわかに暗雲が立ちこめたかと思うと、突如として篠突く雨が降り始めた。誰しもが天を仰ぐ。

その刹那に、雨粒が矢へと変化した。風切り音と共に鋭い鏃が地に突き刺さる。軍は半狂乱になって散った。それでも痛ましい悲鳴と共に肩を腕を足を射貫かれる者は後を絶たなかった。たちまちに原野が怨嗟の叫びに満ちた。

「ええい、何の術だ！　守屋め！」

馬子は叫び、剣を抜き払った。襲い来る矢を切り払って防ぐ。

「このままではいけません。一度、退きましょう。敵方も十分準備をした上での籠城なれば、矢が尽きるのを待つよりない。こちらから矢を返しても稲城に突き刺さるのみです」

馬子は深く頷くと、神子の言葉に従った。兵士たちは傷ついた者たちを背負い、這々

の体で逃げていった。

そのようなことが三度続き、三度とも退くことになった。戦いを繰り返すごとに、傷は深くなった。その度に忿怒で顔を赤くしていく馬子とは違って、神子は死者を悼むような憂い顔を深めていった。

四度目の進撃の前夜、神子は一人、闇に紛れて河原へ赴いた。月は厚い雲に覆われて見えなかった。昼には戦場となったその場所に、気の早い虫の声がしずしずと響いていた。野の風も川の水も血の穢れを流しきれず、むっとするような臭いが辺り一面に立ちこめていた。戦の気配冷めやらぬ中、いくつもの人魂が浮いては沈みして、地上の星の如くぼんやりとした光を放っていた。神通力を持つものにしか聞こえない波長で生前の欲望や怨恨や託す希望などを呟いている。神子はそれら一つ一つに、律儀なうなずきを返す。

そして足を止める。水面の向こう、虚空を見据える。

「仏よ。汝らの贄はこれで足りましたか」

冷然として、佇んでいる。夏のものとも思われない涼やかな風が水面を撫でていく。

「これでもまだ足りぬというのなら流されるはずだった幾千人の命に代えて、わたしはしばしの間、歴史の表舞台より下がりましょう。彼の世も此の世も仏の御手により

好きにするがよい。この国の神を思うがままに蹂躙するがよい。それで構わないでしょうか」

返事の代わりにごく遠くの雲の中でごろごろと鳴るのが聞こえた。

神子は傍らに生えている木を見やる。白いもやのような小さな花が咲いていた。木のそこかしこにも矢が突き刺さり、濁った樹液が伝い落ちていた。

「白膠木（ぬるで）の木よ、君にも不幸なことをした。どうか力を貸して下さい。どうか御仏の慈悲のあらんことを」

折れている枝をそっと拾い集め、陣へ戻った。

それから、寝ずに四天王の像を彫って戦勝を祈願し、勝利すれば仏塔をつくり仏法の弘通（ぐずう）に努めると誓ったという。

わたしはその姿を見るのに忍びなかった。神子が何かに頼る様子を眺めることなど、見ていたくなかった。それは確かに一つの陵辱であった。懸命に小刀で像を削っている神子が念仏を紡ぐのが聞こえた瞬間、わたしは水面を叩いていた。戦場の影は揺らぎの中に消えてしまった。

暗い夜闇の中で自分の息が荒い。息を強く吐いてなだめる。背中にひどい汗をかいて冷たかった。自分で自分の身体を抱きしめて、身体的な感覚を思い出す。浮いた背

中のあばらがわずかに上下している感覚が指先に感じ取れた。立ち上がろうとして、めまいを起こした。足に力が入らずに床に手をつく。ずっと見入っていて飲まず食わずであったせいだろう。

「……じゃまな身体」

小さくつぶやいたその声は老婆のようにしゃがれていた。

わたしはそこから先の戦況を定かには見なかった。噂として聞くばかりだった。

だから祈りが通じ、木の上で雨のように矢を放っていた物部守屋もやがては矢返しの呪法によって射殺(いころ)されることとなったという、その現場を見ることはなかった。ただ噂に聞くだけだった。

締め切った部屋の中で、一人きりでいた。眠り続ける屠自古のそばで、同じように夢と現(うつつ)の中をたゆたい、時折思い出したように水を飲み、僅かな草だけ噛(は)んだ。それでも弱り切った身体はそれをもどしてしまうこともあった。

三日が経った時、騒がしい音が聞こえてきた。人々は高らかに笑い、歌い、太鼓や笛を鳴らしていた。凱旋であった。

わたしはせめて何か一言だけでも言おうと思って、立ち上がり、よろめきつつも外へ出た。

そして、何も言えないままで、立ち尽くすことになった。
彼女の目はまだ戦場の険しさを残したままでいた。冷たい風が彼女の周りを取り巻いて、周囲で浮かれている人々から遠ざけていた。出迎えたわたしの顔を見て、神子は小さくうなずいた。喧噪から離れ、わたしを連れ出した。まるで物盗(ものと)りのように物陰に身を潜めた。
そうして、わたしの耳元でただ静かに述べた。
「まだ何も終わってはいません。物部守屋を殺したことは、わたしがこれから犯す罪のうちのごく小さな欠片でしかない」
そして、七星剣をおろしもせず、島の下の、小さな穴の中へ向かって歩く。
「待て、太子様……。戦から帰ってすぐ休みもせぬなど体に障るのではないか」
わたしは諦めきれずにそれを追いかけようとした。背中に触れる直前、ばちりと火花が散って指先が痛んだ。
「布都。どうか、わたしに構わないでください」
神子は振り返らない。
「自ら神になるということは、ひとをやめるということです」
細くしなやかな背中。夏の陽光がじりじりと照らす。

「だが、ひとをやめねば届かぬものもある」
焦げ付きそうなほどの暑い日の盛り。松の木が濃い影を落としていた。世界はあまねき光の故に、白黒に染まり、色彩を失っていた。
穴の中に滑り降りて、神子の姿がかき消える。
わたしは追うことについて考えた。自分はどうしたいのかを。人ならぬものに、この身を奉じるべきかどうかについて。
――そんなことは迷うまでもないことだった。
ことのはじめから、わたしは神子を信じていたのだから。
</recall>

いつでも、神子を目の前にして、わたしは無能だった。言われたことが理解出来ずに、口先で繰り返すだけだった。ただ遠ざかる背中を追い、少しでも近づこうとしてひた走ることしか出来なかった。
「この世界に、さようならを……？」
わたしは神子の言葉を繰り返した。
不老不死の仙人。死を超越して復活した聖人。

それが、この世に別離を言い渡すということは、どういうことか。
「わたしはこの世界に再度生まれ直してからずっと考えていました。わたしが復活したということは、この世界にとってどういう意味を持つのか」
眠りについたことの意味。幻想となってしまったことの意味。もう一度新たに生を得たことの意味。この幻想郷に三人きりで移り、存在していることの意味。
「そうして、一つの考えに至ったのです」
満開の笑みで、神子は言うのだ。
迷いは断たれ、悩みが消え去り、すべての煩悩を取り去った喜びで溢れた笑顔で。
――生きる意味など、世界からとうに失われてしまったということに。

<recall>

戦から戻ってからの神子は表情に変化が乏しかった。ただ青娥に山ほどの漢籍を借り、黙々と本を読み、書き写し、得体の知れぬ呪術を真似て丹を練り続けた。星図を描いた円の上をずっと気を練りながら歩き続けることもあった。堅い岩から削りとった鉱物を、手に豆が出来るまですり鉢で細かく粉にして混ぜ合わせていることもあった。砂鉄と硫黄とを練り合わせ、一瞬だけ火であぶると、そこから熱と邪気とが発生

してひどい悪臭を放つこともあった。屎尿置き場や墓場から取った得体のしれない石を扱うこともあった。どのようなときでも神子は狼狽せず、自分の為すべきことを見出し、実行した。生き物ではなく人の形をした何か別のもののように、神子は修行を続けた。その間、一口の水も、一粒の木の実も口にしなかった。

「……太子殿、何か食べた方が」

それを神子は背中で聞いた。そして振り返らないままで、背中が意志を語った。

「布都、わたしはね、腹が立って腹が立って仕方がないんですよ」

神子の尽力には昼も夜もなかった。見ていられずにわたしは出来うる限りそばにいようと決心した。それでもわたしは凡人であった。神子の後をついていくことはかなわなかった。荒行を初めて三日の後、わたしはひどい風邪を引いてしまった。熱にうなされて運ばれた先、蘇我の家でわたしは歯を食いしばって泣くのをこらえていた。わたしのすぐ隣で屠自古は静かに眠ったままでいた。戦の始まった頃からずっと変わらなかった。花のような唇、やすらかな寝息、長いまつげ。時が止まったかのように面持ちは変わらない。

それでもそっと触れてみると、かすかにその面に埃が溜まってしまっていた。蘇我の家のものはもう、屠自古に興味を失ってしまっていたようだった。誰も様子を見て

いないのでなければ、寝ている人間の上にうっすらと埃がつもることなどあるわけがない。

わたしたち三人は俗世の流れから取り残されていた。神子は何かに取り憑かれたように修行に取り組み、丹を練り続けた。わたしは病が治ると、今度は用心しながら神子の後をついていくことにした。調子を崩してしまえば、屠自古の面倒を見る者がいなくなる。そして、神子のことを見守ることも出来なくなる。だからひたすらに自重し、自戒しつつ、二人のそばにいた。

神子はけしてわたしに何かを頼まなかった。だからわたしは用心深く彼女の手と目とを見ていて、それらが向かう先のことを予測するよりなかった。わたしが何か言うと、神子は力なくかぶりをふる。それでもわたしは為した。それが正解であるのかどうかは判らなかった。

隋よりも向こうの遠い遠い国から贈られてきた瑠璃(るり)の大きな宝玉を惜しげもなく粉にしてすりつぶした。古い家畜小屋の壁や地面から得られる白い結晶石と硫黄とを共に強熱し、現れた瘴気と灰を水の中に集め、濃縮すると粘性の腐食液が得られた。その液体の形をした刃物は指先を火傷させ、結晶石や食塩からもうもうと煙を上がらせた。そればかりではなく、それは金属をも溶かした。鉄や青銅はもとより、条件さえ

整えれば金さえも溶けてしまった。これこそが不老不死の妙薬に相違ないとわたしが言っても、神子はかぶりを振るばかりだった。
「わたしが求めているのは、そのようなものではありません」

そして、神子の努力は確かに実を結んだ。失ったものは多かったけれど、確かに目的の一つは果たされたのだった。いつしか、古い神祇（じんぎ）と新しい蕃神――仏の戦いから五年が過ぎていた。
ちょうどその日は桜が咲いていた。屠自古の体を拭いてやり、着替えをさせ、それが終わった時、神子が部屋にゆらりと現れた。幽鬼のようにやせ細って見えた。
「布都、花見に行きましょう」
久方ぶりの柔らかな笑みが浮かんでいた。わたしは思わず目を疑い、何度か目を擦って、またじっと神子を見つめた。
「いやだなあ。どうしたんですか。わたしの顔に何かついていますか？」
頬はこけ、目だけがらんらんと光っているのに、神子の笑みはなぜだか明るさと柔和さを帯びていた。思わず幻ではないだろうかと疑って、神子の顔に触れた。そして、その頬が僅かに濡れていることに気が付いた。

「ふふ、あの、ね。いいことが、ね」
おかしげに笑んでいるのに、あとからあとから涙が流れて止まらない。あまりの苦行に、とうとう心まで壊れてしまったのかと思って、胸が締め付けられ、わたしは何も言えずに彼女を抱きしめた。折れそうに細い体の中に、確かな体温があった。
「さあ、行きましょう。わたしは三人でお花見をしたいのです」
執拗に言う。わたしはそれほどに言うのならと思って身支度を整えた。
神子は屠自古と二人で馬に乗った。細い腕の中で、屠自古は大切に抱きしめられて、身体を支えられていた。もしも意識があったなら、絶対に黙ってはいないだろう。真っ赤な顔をして突っ放して照れて、危うく蹴り落としたりするかもしれない。静かにただ眠っているだけの彼女を見ていると、そんなたわいもないような昔のことが無性に懐かしく思えて、胸をちくちくと刺した。
久しぶりに乗る馬は気持ち良かった。空は柔らかな青色をたたえ、春の日が穏やかに野を照らしていた。風と共に駆けていくと、甘いうきうきするような花の香りがそこここに漂っているのを感じた。
今となってはただの平地となった旧物部家の近くまで馬を走らせた。じきにそこにも寺が建つという。遠くで渡来人たちが礎のための槌を打っているのがのどかに聞こ

えた。
山桜はあの時のおぞましい散りかけた花とは違う、清冽な五分咲きをたたえて、緩やかな風に揺られていた。
わたしたちは馬を降り、横たわっている枝に腰を下ろした。
屠自古の身体を筵の上に横たえて神子が膝枕をした。愛おしげに短く切った髪を撫でてやった。
自然と遠い日のことを思い出していた。あの時、初めて三人で出かけた。あの時は葉桜だった。あの時は屠自古がいた。横に並んでおやつの木の実をかじって、この国の行く末のことについて神子が語るのを聞いていた。
今はもう二人きりだ。そのことの胸をつくような寂しさには、いつまでも慣れない。
と、神子が何か取り出してわたしの手のひらにのせた。黒い小さな丸薬のように見えた。
「反魂香(はんごんこう)といいます。この香が燃えているほんの少しの間だけ、魂を呼び寄せることが出来るものです」
そして、袋の中から金で出来た香炉を一式取り出して見せた。
「どうか、香を焚いてみてください」

緊張に震える手で火打ち石を打つ。火口（ほくち）にうつして徐々に育てた火を炉に入れる。優美な麝香（じゃこう）が野に広がっていく。

白い煙へ目をこらす。ゆらゆらとして定まらない。風が香を散らすのがひどくもどかしい。手で遮ろうにも、春風は気まぐれに煙を揺らしていく。

ようようとどめた白煙の中に小さく浮かび上がるのは、紛れもない親友の姿。

「……屠自古」

小さな彼女の影はこぶしを握りしめて、何か力説している。その唇の動きから読み取れたのは、

ば、

か。

なにやってんのちゃんとはたらけそうじゃなきゃあたしのダンナじゃないでしょげんきだしてあたしがいなくてもがんばってちゃんとめしくえふとれだきごこちわるいのやだばかみこばか、ふとのことちゃんと、

一息に口を動かして顔を真っ赤にして息が足りなくなって、それからつんと横を向いて、

また、何か、

そこで香が燃え尽きた。煙は風に散らされて消えた。

「ね？」

神子がそう言って、ほうっとするような笑みを浮かべた。

「わたしが欲しかったのはこれなのです。地位や名誉や永遠の命なんかよりもずっと」

深く深く息をつく。わたしはただひたすらに不思議でならなかった。

「……なぜ、このようなことが」

「黄泉をどれだけ巡っても屠自古の魂は見つかりませんでした。高天原にもありませんでしたし、もしやśarīraなしでもどこかに誤って輪廻したのではと思い、倭国は蝦夷から筑紫嶋まで、果ては隋や天竺を超えてساسانيان まで、遠眼鏡の術を使って探しましたがやはりどこにも見つかりませんでした。それもそのはず、魂は屠自古の中にあったのです。身体の奥の奥、一番深くて自分自身の手足にすら届かないようなところに凝っているせいで意識が消失してしまっていたのです。本来は死者の魂を黄泉から呼び寄せるための術である反魂丹が効くかどうかは判りませんでしたが、どうやら上手くいったようですね」

神子は淡々と話した。自分のしてきた血の滲むような努力をたったそれだけの言葉で片付けてしまった。わたしはそっと神子の手を取った。ひどく痩せてしまって枯れ

枝のようになったその手に触れると胸の中がいっぱいになった。わたしは神子を抱きしめずにはいられなかった。

神子はわたしの耳元でささやいた。

「布都、君が手伝ってくれたおかげです。ありがとう」

桜の花びらと共に涙が頬を伝い落ちた。わたしも泣きながら笑った。お互いの細い身体にすがりついて抱きしめあって、地面にへたりこんだ。はらはらと桜が散っていってわたしたちの肩の上に降り積もった。

光のどけき春の日に、わたしたちは初めて三人で桜を見ることができた。

</recall>

02

わたしはいつでも神子のためにあった。神子のために生きていた。神子が望む通りのことをした。たとえ神子が何を望んでいるのか判らなくても、出来る限り、神子の考えることを想像してその通りに動くようにした。

「我が生きる意味は、太子様、あなただ」
そう言ってしまえば、あとは歯を食いしばる以上のことが出来ない。それ以上の意味は、神子の中から出てくる。わたしはそれに従う。それが盲信である自覚はある。
けれど、その他にすべきことなど何も無い。兄をなくし、神を殺し、道理を外れた遠い旅路の果てにわたしたちはいる。
「君が眠りについた日のことを、思い出して下さい」
神子は言う。
「気持ちの中に、紛れもなく答えがあるでしょう」
その言葉の通り、わたしは意識を巡らせ、記憶の糸をたぐり寄せる。その中に道があるというのなら、それに従う。それしかわたしにはない。

<recall>

それからのわたしたちは、術に溺れていたとしかいいようがない。
香を燃やして出た水銀を多量に含んだ煙をふんだんに吸い込むことや、それを生成するために亜砒酸(あひさん)や沃素(ようそ)や緑礬油(りょくばんゆ)に手指で触れることや、暗い中でものを食べずに身をちぢこめていたことや、たくさんのやらなければならないことを放り投げて愛する

妻のために香を練ることが、どれほど人の道に外れたことで徳をすり減らして身体を蝕むものなのか、わたしには判らない。わたしに判ったことは、神子から少しずついろいろなものが失われていったということだけだ。げっそりと痩せてしまった神子の身体を包み込むように、わたしは抱きしめた。片時も離れたくなかった。目を離せばそのまま煙の中に霞んで消えてしまいそうで、わたしは神子のそばを離れたくなかった。少しの水気さえ取らないのだから、わたしは口移しででも水を飲ませるべきかどうかということについて思い悩んだ。煙が目にしみて、涙ばかりがぽろぽろと流れ出て、止まらなかった。笑いながら泣いた。泣きながら笑った。

わたしたちにはどうやらあまり時間は残されていなかった。少しずつ身体が動かなくなっていくのがわかるのに、それを避けようとしなかった。少し歩いただけで息が切れ、身体がだるくなり、横になっていることを好むようになった。唇はがさがさと乾き、視界はいつでも靄が掛かってみえた。

反魂丹だけでは魂を残った肉体に固着させることは出来そうもなかった。屠自古には仙骨がなく、一度本来の魂の形から崩れてしまうと、それをきちんと戻して変幻自在にするような素質が元々ないのだった。だからわたしたちはずっと香を焚きしめたままでいた。

香煙が逃げないように神子の部屋は締め切られ、むせかえるほどの甘い匂いで満ちていた。煙幕の中に浮かび上がった姿だけの屠自古が重みのないままでしなだれかかり、わたしもまた神子の体にもたれた。ことばを自分の身体の方に置いてきた屠自古の魂は時折形ばかりの口づけを神子に落とし、また、わたしにもなだめるような口づけを落とした。触れられない姿だけの接吻はいかにも悲しかった。

目は煙でぼんやりと霞み、鼻は匂いで麻痺してしまっている。頭の中まで香がしみ通ってぼやけたようになって、ものがうまく考えられないでいる。判るのは神子の体温と、神子の声だけだった。狭い小さなうつろの中にわたしと神子と屠自古の記憶だけたゆたっているようだった。

ごく遠くで、剣呑な戦の気配が漂っていた。軍馬のいななき、馬具の金具がちらちらと立てる音、剣や矛を手入れする音。

五年の歳月は倭国に争いを取り戻すに十分な時間で、やはり神子がいなければこの世界はだめになってしまうようだった。新しい大王（おおきみ）は蘇我馬子に不満を隠さなかったし、馬子はその苛立ちを尻目に私欲を深め、どんどん自分の思いのままに政治を動かしていた。軋轢（あつれき）はあからさま過ぎて、豪族たちの誰もがいつ戦になるか、なったならばどちらに着くかについて秘密裏に相談さえする始末だった。

馬子はまた蘇我の家を離れがちであった。豪族諸氏へ説得工作へ動き、大王を孤立させようとはかっているようだった。また朝から夜まで子供たちだけの日が訪れた。

いつだったか雨煙の中で過ごした日々のように、光のろくに差さない中でわたしたちはお互いの身体の温もりに溺れていた。色めいたことなどはせず、ただ三人で身体を温め合って絡み合っているだけで頭のすみがじんわりと麻痺していた。

「また、くだらない戦が起こるようだな」

わたしは、ただぼんやりと呟いた。唇の端が乾いて切れて、かすかに血の味がした。胃の悪いひとが吐くねばつくような息が毒蛭(どくひる)のような匂いで口の周りに漂っていた。神子がゆっくりと息をつく。

「そうかもしれません」

「仏教など信じたところで、何にもならぬ。仏教を奉じる蘇我と、仏教を奉じる大王とで争ったところで、どちらも救われぬ」

「……そうかもしれません」

神子の声はかすれていた。またゆっくりと流れはじめる神子の透明な涙を、わたしは舌先で掬いとった。それ以外にどうやって慰めればよいのか、わたしには判らなかった。こういうやり方ぐらいしか思い付かなかったのだ。

「このままでは大王は死ぬだろうな」
「そうでしょうね」
「どうする……と言っても、どうしようもない。そうだな、神子」
答えはなかった。わたしはそのことに安堵していた。
神子と離れたくなかった。ただそれだけだ。卑怯なのかもしれない。多分そうだろう。わかっていたのだ。神子に何も決断させないことで、何かを引き延ばそうとしていた。それが本当には出来ないということを知っていればもっと何か別の方法でごまかそうとしただろうか。判らない。ただその時のわたしに出来ることは見ていることだけだった。その時のわたしはもはや、歴史の当事者ではなくなっていた。物部の一族はわたしを残して没落した。わたしもまた、取り残された亡霊のようなものだった。
鋭く硬いものは脆(もろ)い。これ以上、神子の中にある刃が世界の悲しみに打たれて、欠けてしまうことをわたしは望まなかった。時を止めたままでこのまま三人で朽ち果ててしまえばそれでいいと思っていた。

青娥が神子の部屋を訪れたのは、月夜の晩だった。がりがりと壁を掻く音がしたかと思えば、ごとりと丸い穴が開いた。何か言うより先に、丸い月と、青娥の笑顔がの

ぞいた。風が吹いて、香煙を散らした。
「どうもこんばんは」
軽やかな声でそう言った。
「……どうも」
かすれた声で神子は答えた。青娥はゆうらりと羽衣で飛び、中に入った。壁に穴を開けたことを詫びる様子もない。
「道教の修行は諦めたのですか？　貴女には期待していたのですけれど」
神子は黙ったまま、小さくかぶりをふった。落ちくぼんだ眼を覆うようにして静かにうずくまった。
わたしは青娥の前に大きく両手を広げて立ちふさがった。悪いものから神子を守りたかった。これ以上、神子を傷つけたくなかった。
「為すべきことなど何も無い。この世界にはもう何も残されてなどいない。我らをそっとしておいてはくれまいか。もう誰も殺したくはないのだ」
「いいえ。何故、あなたがたは最善手（ベスト）を尽くさないのです」
青娥は小さく笑んだ。
「お忘れですか？　道教の本質は、不老不死の追求にあるのですよ」

そう言うと、そっと手の内に握りしめたものを差し出した。見覚えのある赤い煉丹。
頭にかっと血が上った。
「ふざけるな……！　その丹のせいで屠自古は！」
襟首をつかもうとするが、手応え無くするりと抜けてしまう。
青娥は何も知らぬげに言う。
「この丹を飲めば誰もが死んだような眠りにつき、やがて任意の時期に復活することが出来ます。そして復活した身体はけして朽ちない不滅のものとなるのです」
凍り付いたわたしたちの間に、青娥のくすくす笑いが満ちる。
「あのまま、屠自古どのは足を断ち切られて出血多量で死んでしまった方がよかったとお思いですか？　とっさに飲んだ丹のおかげで命だけは助かったのだと感謝して、青娥のおかげだと褒めてはくれないのですか？」
悪意があるのか、それとも単に人の気持ちについて鈍感なだけなのかの判断はつかなかった。青娥の言葉はただわたしたちの胸の中にじくじくと疼くものを残すだけだった。
「丹はいくらでもあります。誰にでも渡すことが出来ます。飲めばそれだけで長い眠りにつける不思議な薬なのですよ。さあ、さあ！　青娥を褒めてください。称えてく

ださい」
　言葉の通り、じゃらじゃらと音を立てて青娥の手の内から赤い丸薬が落ちていった。握った砂が指の間から落ちていくように、とめどなく赤い薬が落ちて小さな山をつくった。
「さあ、どのようにでもお使いください。そして倭国を救った青娥を褒めてください」
　言い置いて、ひらりと壁の穴から抜け出た。わたしも神子もじっと赤い丹の山を見つめて動けずにいた。
　すぐに闇がもどった。痕も残さずに壁は元通りになっていた。しばらく身じろぎもしなかった。香はすでに燃え尽きていて、空気はまだ澄んでいた。
　わたしたちはまた二人きりになった。わたしは神子を抱きしめようとした。神子は何も見ていなかった。肌と肌が触れているのに心が離れてしまったようなそんな気がして、息がひどく苦しくなった。

　神子はその日から、反魂香を使わなくなった。その代わりにただひたすらに耳を澄ませて、外の様子を聞いているようだった。わたしは出来ることならその耳をふさいでやりたかった。屠自古が元気だったなら、無理矢理にでも、たとえば耳を引っ張っ

たり指を入れたり、あまつさえ耳朶(みみたぶ)を甘噛みしたりなどの悪ふざけをして神子の気持ちをそらしただろうが、わたしにはそんな大胆なことが出来るわけもなかった。だからただ膝の上に転がって甘えてみせるだけだった。神子はそっとわたしの頭の上に手を置いて、動かさなかった。

神子の目は静かに閉じられていた。代わりに聞こえるだけの声を聞いて、世界に満ちているたくさんの思いを聞き取ろうとしているようだった。顔の輪郭線が細くなっているせいで、その横顔はひどく苦渋に満ちているように見えた。

わたしは、この国の普通の人々がひどく妬(ねた)ましかった。この国に満ちたたくさんの弱い者の願いを神子はきっと聞き届けてしまうだろう。つい昨日まではわたしが占領していた神子のことを、倭国のたくさんの人たちが奪っていってしまうだろう。そんなことを考える自分がいけないのだということは判っていたけれど、胸の奥で何かがじりじりと音を立てて止まなかった。

――行かないで。

そう言えたら、どれだけよかっただろう。けれど、ついぞ出ることがなかったその言葉は胸の奥でわだかまって、いつまでも消えなかった。口の中から転がり出そうになると無理矢理にでも飲み込んだ。歯をかちかち鳴らしてでも噛み下した。喉奥に何

か硬いものが潜んでいるような感じがして、うまく息が出来なかった。肘の内側にある経絡をぎゅっと押さえつけて、自分の中のわがままを殺した。殺しても殺しても思いというものはこみ上げてきて、その都度わたしの息が細く絶え絶えになっていくのがよくわかった。どれだけ息が苦しくなっても、わたしは神子に声をかけなかった。

「――戦を止めなければなりません」

三日目に神子が発した言葉は、わたしの予想通りだった。

「仏教同士で争ったところで何にもならない。しかし戒律で私利私欲を押さえつけたところで、人の性(さが)たる闘争心は到底消えない」

悲しげに彼女は言った。

「先生のおっしゃることの意味が分かりました。何という残酷なことでしょう」

神子の吐く息が長く延びた。

「そう。殺し合いが止まらないのなら、殺せない身体にするしかない。そうやって殺し合いの愚かさを悟らせるしかない。そのために先生は丹を残したのですね。しかしそれはあまりにも罪深い所行です」

神子は自らの顔を覆った。こめかみを押さえ息をつく。

「死なない身体で殺し合いを続けるなら、それは終わらない修羅地獄に他ならないで

しょう」
わたしは身を起こして、その手の甲に口づけを落とした。言えなかった言葉の代わりだった。
——行かないで。
その言葉は甘えだ。甘えがわたしの中にあった。子供らしい甘えだった。
それを噛み殺すのは辛かった。それでももうわたしは甘えるわけにはいかない。屠自古の時のようなあやまちを繰り返すわけにはいかない。
神子が何かを為さねばならないのだと決めたのなら、わたしはそれを助けなければならなかった。悪魔のような所行かもしれない。わたしはそれでもそうするだろう。構わなかった。彼女をあがめるのならば、その前に神も悪魔もない。それが神を殺させたことの代償だ。
「我がやる」
「……布都」
「おまかせを。太子様の手となり、足となり、どんなことでもやってみせよう」
わたしは出来るだけ自信たっぷりに見えるように、にやりと笑った。

新羅を超え、随から伝えられた技術はこの国のいくつかのことを革新していった。たとえば寺院のような建造物や仏像のような造作、そして暦や占いの類もまたこの国の有り様を変えていった。大王はたいそう信心深く、方々に寺院を造らせた。しかしそれは迷信深いということと紙一重の狂信であって、夜も眠れぬことの臆病さや猜疑心と裏表だったことは豪族たちの物笑いの種であった。いかに求道の心が強くとも、すぐに怒り、どなり散らすようでは誰の心も寄りつかない。

たとえば、大王は狩りを好んだ。仏教の戒律で戒められているところの肉食を止めず、幾多の鳥獣を屠り食した。その狙いの一つは軍事教練であった。蘇我氏は弓が弱い。物部との戦の折りに射かけられたことが一つのトラウマとなっていた。物部氏没落と共に失われた弓術を復古させるための手段として大王は臣下達に狩りを奨励し、自らもまた好んで弓を引いた。

それがわたしたちにとっての一つの有効な好機となった。たとえ神子が馬子に見張られていたとしても、その命を受けた鳥や獣までは、ヒトの目で見張ることはできない。初めて不死者となる者は大王なるべしと神子は考えていた。倭国の統治者こそ、新時代の到来にふさわしいのではないかと考えていた。

その日、わたしは一人きりで禁じられた猟場で待ち伏せた。あたりは早い紅葉で燃

えさかる焔に包まれているようだった。細い白滝がとうとうと流れを作り、茶に黄色に吹き分けられた葉をよどみへ流していた。

やがて神子があらかじめ言い含めていた雉(きじ)が繁みから姿を現した。黒い小さな目を静かにきらめかせ、わたしを見た。視線が合い、それが何かわたしに訴えかけるような気がした。静かにうなずくと、それは確かに切迫した視線を安らがせた。

その次の瞬間、風切り音がして、矢がすばやくその可哀想な鳥の腹部へ突き刺さった。雉はかさりと音を立てて枯れ葉の上に横たわった。

「しとめたか」

いとも嬉しげな声を上げて、雉を追ってきた男にこそ、用があった。

「大王、汝(うぬ)は近いうち死ぬぞ」

呼びかけた。

新しい大王は、びくりとしてきょろきょろと見回す。そして小さな背丈のわたしを見つけて、侮蔑したような笑みを浮かべた。見かけで判断する軽率さ、普通ならそんな男に大王になれるほどの徳はない。

天の偶然がこの男を大王にした。そして今、天が王座を奪うだろう。

「馬子がお主の命を狙っておる。馬子だけではない。ありとあらゆる豪族が大王、お

主の敵だ。さあどうする。忌み嫌われた大王が長続きするとは誰も思うまい」
わたしの声を、大王は聞き入れなかった。ただ鼻先でせせら笑って黙殺した。射止めた雉をとり、背中を向けた。
「まだ話は終わっておらぬ」
わたしは小さく柏手(かしわで)を打つ。その刹那に木がみしりと音を立てて傾いだ。大王も驚き足を止めた。
「聞かぬなら、このまま木を倒すぞ。戻れ」
言葉を投げかける。そうして振り返った大王の顔は、疑惑と不審に満ちていた。
「まだ信じぬか。それほどに疑うか。見よ、堪輿(かんよ)が我と共にあり、山道が汝(うぬ)を留めて離さぬのを」
ごうごうと風が鳴る。彼が目を細める。
ぱちりとわたしの指先から走った火花が枯れ葉に次々と火を付ける。みるみるうちに辺り一面が火の海になる。あわてた彼が逃げようと背を向けるその退路を、火の道でふさぐ。たちまちに大王は腰を抜かして座り込んでいた。
「逃げるな。諦めるな。困難には立ち向かわねばならぬ。それが神へ至る道なのだ」
屠自古に言われた言葉を、このようにして自分が使うことになるとは思わなかった。

膝をついてわたしを見上げる大王の目は赤く濁っていた。わたしは出来うる限りの重みをもってうなずき、神子に似るように微笑を返した。そうして瞬きもせぬうちに火を消してみせると、大王の目からは疑いが消え、代わりに讃えるような光に満ちた。

全ては幻術である。

わたしはでたらめを話していたに過ぎない。それらしい言葉を話して大王の注意を惹きつけ、その隙に彼の五感を飲み込むような幻を植え付けていたに過ぎない。火も風も、全ては詐術である。

最初の雉と木だけは、彼ら自身が倒れることを望んでいた。雉は娶(めと)ったばかりの妻を亡くしていた。巣には幼い卵が一緒にいた。嵐が彼の家族を奪った。洪水で逃げようのなくなった中州に彼らの巣はあった。生きていても仕方がないのだと、彼は言ったのだという。

あるいは、古い年老いた木は語ったのだった。落雷を受け、虫についばまれ、生きていることはもう苦行でしかないのだと。彼の虚(うろ)は日に日に大きくなり、立ち続けることはつらいのだと。

かれらは倒れることを望んだ。だから、神子のために一役買ってもらうことにした。

全ては神子のためにあった。
わたしたちは全て、新しい神のために捧げられた鹿の初子(ういご)であった。

大王に丹を授ける。そのまま病死ということにしては怪しまれるかもしれないから、馬子をわざとあざけるようにし向けた。大王は狙い通りに動いた。
予(あらかじ)めよく言い含めておいた猪(いのしし)を一匹、大王に親しい豪族の手にかかるようにした。難なく彼は猪を射殺した。猪はとても安らかに死んだ。尊者のために火の中に自ら飛び込む兎のように穏やかな死に様だった。
わたしと神子はその様子を遠眼鏡の術で見ていた。神子は猪の息が絶えてしまうまで目を伏せて、そっと両手を合わせていた。わたしもそれにならうべきかとも思ったが、それはやはり独善だと思った。わたしは仏に祈る資格を持たない。人であれ獣であれ、自らを助けるのは自ら以外にない。ならばせいぜい神妙にしているぐらいが関の山だった。
大王のために献上された猪の頭は速やかに掻ききられた。首は勢いよく飛び、まばゆいほどの鮮血が地にほとばしった。
大王は笑って猪をいたぶった。その目玉に笄刀(こうがい)を突き刺し、あざけった。

「いつかこの獣の首のように、憎い奴の首を斬ってしまいたいものだ」
神子はそれを聞いて、深く頷いた。
一事が成れば万事は成る。大王はもう死んだも同然であった。
人の噂が伝わるのは速いもので、数日のうちに馬子はその大王の言葉を人づてに聞くことになった。それまでに積もっていた種々の恨みから、大王を弑逆することを決意したのが十月の十日。
それから配下に命じて弑逆したのが十一月三日のことである。
その間のことについて、わたしたちは出来る限り耳に入れないようにした。わたしと神子が望んだように、戦は起きなかったように聞いている。ただ、馬子とそりの合わなかった者が一人、暗殺されただけのことで、それがたまたま大王であった。大王ですら、交換可能なのだ。
その日のうちに大王は葬られた。葬られたとは名ばかりであり、遺体を野原に晒されたという方が正しい。このように、ただの人同然に殺され葬られた大王はかつてなく、またこれから先もけしてあり得ないだろう。
翌日、わたしたちがその場に赴いた時には、いつかの猪と同じように、目玉には笄刀(こうがい)代わりの小枝が突き立てられ、嘲笑と嫌悪の徴(しるし)があらゆるところに刻まれていた。服

は烏や獣についばまれてぼろぼろになっており、髪はわざとみすぼらしく見えるように、ざんばらに切られて無残な有様だった。馬子にのせられて大王になった愚かな小心者の末路であった。

だが、よく見てみると常の遺体とは違い、肌はつやつやとしてまるで生きているかのようだった。身体は冷たくこわばってほとんど動かせなかったが、見た目の上では死体とは思えなかった。

「……彼は生きているのでしょうか、死んでいるのでしょうか」

神子の言葉が落ちる。

「死んでおる。だが必ずよみがえる。彼が望んだ時期は、馬子が死んだのと同じ頃にしてくれということだった。だからあと二十年やら三十年やら知らないが、そのころにしよう」

わたしがそう言うと、神子は小さくかぶりを振った。

「そういうことではないのです。ごめんなさい、布都。わたしは根本的なところで思い違いをしていたのかもしれない」

「……何を？」

「考えなければならない。もっと深く深くひとの死というものについて考えなければ

ならない」
神子はそう言うと、ひとりでゆらめくように遠くへ行ってしまった。わたしが追いかけようとしても、影が釘付けにされたように動けなかった。
見守るしかない。わたしはどこまでも見続けるしかない。追いつくことは出来ない。その歯がゆさに拳を握りしめる。
神と人とは、相容れない。そのことを今更ながら強く思った。神子もまた人ならぬものへと変じていた。

それから十数日の間、神子は蘇我家地下の大空洞の中にこもっていた。誰もそこを覗くことは許されなかった。
わたしはまた眠りについているだけの屠自古の身体の世話をすることになった。じっと目をつむったままでいる彼女は、確かに冷たくて、ほとんど死体と変わらないように見えた。大王の死体と変わらない。没落氏族の生き残りであるわたしと、栄華を極めた氏族の中で死んだように眠る屠自古。
「……皮肉なものだな」
思わず声に出してしまって、それからわたしは小さくかぶりを振った。ひとりでい

ると、変に気弱になってしまう。反魂香を使って屠自古の影と戯れたかったが、全て神子が持って行ってしまった。

じっとすわり、ただ辛抱強く待った。神子が全てを決めてくれる。

ある日の朝に神子はまた一回り身体を細らせてやってきた。わたしたちはとてもよく似ていた。

「布都、君に見せたいものがある」

目は幽鬼めいて輝いていた。にこりともせずに手を引かれた。冷たい手。

そのまま地下の大空洞へ導かれる。空気は冷涼であり、肌が粟立つほどだった。

闇へ目をこらすとその中に立派な塔が建てられているのがわかった。浮き上がるような白壁と、青々とした屋根瓦、木の香り立つような真新しい柱と板壁。どのようにして建てたのか判らないが、びりびりとした神々しい気配が内側に充満している。

「……これは」

「夢殿大祀廟（ゆめどのだいしびょう）。そう名付けました。わたしが眠るべき場所」

神子はそうつぶやく。わたしには理解できなかった。どうして神子はそんなことを言うのだろう。

「どういうことだ」

「大王は、死ぬべきであった。わたしは思い違いをしていた。死は全てを許す安らぎであったのです」
「馬鹿な」
「終わりがあるということに勝る救いはない。わたしはそのことを学びました。śarīra はそれを教えてくれました」
「太子様は śarīra を使ったのか」
わたしは嫌悪感を表すのを止められなかった。そのように上から押さえつける治世では旧来の神や仏と変わらない。
神子は小さく唇を噛みしめる。その悔恨の中にだけ人間らしさが残っていた。
「わたしは、どうしても物部守屋の気持ちを読みたかったのです。申し訳ありませんでした」
「兄、の……?」
声がかすれて、息がうまく出来なくなる。自分は強くなったと思っていた。それでもその名前だけでぐらりとよろめく。拳を握りしめてようよう立ち続ける。
兄のことはまだ忘れ得ぬ。心の襞(ひだ)のなかに汚泥のようにして、べっとりとまとわりついている。

「五年前、わたしたちは守屋を殺しました。なぜそのように戦が起こってしまったのか、わたし自身にも理解出来なかったのです。だからわたしは敵のことをもっと知るべきだった。そしてあの戦を避けられるものならば、時を遡ってでも避けたかった」
「馬鹿な。いくら太子様でもそんなことが出来るはずはない」
息が荒くなる。肩を動かして懸命に空気を吸おうとしても、身体の中に気がうまく入っていかない。口の中に嫌な味の唾があとからあとから湧いてきて、吐き気が止まらない。
神子はただ告げる。
「いいえ。道教の力を用いれば過去へ声を飛ばすことも出来ます。過去も未来も今も、黄泉も顕界(げんかい)も、ありとあらゆる時間や空間、それら全ては道(タオ)の変化した表層のものに過ぎないからです」
そう言ってまた錬成された丹を取り出して、わたしに見せた。
「黄泉からこちらへ姿を呼び寄せるということと、自分の思いを過去に飛ばすことと、どちらの方がより容易(たやす)いと思いますか?」
そんなことを聞かれてもわたしに判る訳がない。わたしは首を横に振るだけだった。神子は小さく頷いたが、わたしはその目をまともに見つめることが出来なかった。

わたしは、判ってしまった。神子はわたしと会話をしていない。表面上は言葉を交わし合っているのに、意味が通じ合っていないような、そんな気がする。
ただ神子が告げて、わたしが聞くだけなのだ。
神子が先を走り、わたしはそれに着いていくだけ。
神子が命じて、わたしはその通りに成し遂げるだけ。
「守屋のsarīraから得られた言葉(データ)は、凄惨な衝動で溢れていました。血の臭いと狂気と破壊への欲求とが渦を巻き、読んでいるだけで目眩(めまい)を起こしそうになるほどでした」
どこまでも孤独に神子は告げる。
「その中にも確かに誠はあり得た。彼の中の正義、彼の中の真心、そうしたものが彼の内側にも在ったのです」
聞くだけでひどい吐き気がした。たとえ神子でもわかったようなことを言って欲しくなかった。かぶりを振る。
「そんなことを信じられるはずがなかろう。あり得ぬ」
「ならば、直接読むのが良いでしょう。さあ、中に入られよ。読む為の手助けは致しますから」
手を引かれる。扉の前で見上げる。先が見通せないほどに高く大きい塔だった。

「ここは仏教の塔と道教の廟を兼ね備えたものです。中にはあらかじめ仏舎利(ぶっしゃり)が仕込んでありますから、sarīraを受信することが出来ます」
「これを太子様がお一人で作られたのか」
「いかにも。全てのものは道(タオ)から一時的に形を変えたに過ぎません。逆に言えばどのようなものであっても、この世に存在するものなら道(タオ)から作ることができます」
そして重い木の扉が開かれる。その中にためらいなく入っていく神子の後ろをわたしはついていく。一歩また一歩と進みゆくごとに、建物の中とは思えないほどの深い闇に天地が覆われる。明かりは一つもない。扉がゆっくりと閉まれば、そこは完全な暗闇になる。
どくん、どくんと心臓の音が鳴っているのが分かる。星一つない夜空の中に浮かんでいるような、そんな心地がする。
そして、詠唱が始まる。

「 」

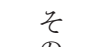
闇が揺れ、渦を巻き、その黒さを凝集した一点に、ごく小さな星のような光が垣間見える。

「 」

広がって行く光をまた見据えていると、またその中に闇が生まれて留まるところがない。

「 」

停滞することのない渦が不規則に浮かんでは消え、一つは二つとなり二つは四つとなる。

「  」

そしてその先に現れたのはことばであった。

```
>>>śarīra emulator:ver=2.43:encoding="BMI351025210"
>>>load D://documents_and_setting/data/ad587/Jul/mononobe/mori
ya.sri
>>>setup -config_mode="29f500.ins" -ls
>>>grep "futo" as lang="ja"
<dtml>
<body>


  いまから語るのは、

<declaration:calculation>
  <pls: 殉教者の物語 >
  <pls: 狂信者の歴史 >
  <eql: つまり、物部守屋、おまえの記憶 >
</declaration>
```

<theorem:number>
<i: 神が人になるならば、それは劣化>
<i: 人が神になるならば、それは矛盾>
</theorem>

いや、それは正確じゃない。より正しく言うのなら、

<rule:number>
<i: 神の末裔であれ、人は人に過ぎない。血は薄められ、退化するのが摂理>
<i: だが神は人を再度神にはしない。それは神に対する反逆。規範からの逸脱>
</rule>

という束縛で語られるべきだ。

なぜなら、神はいつでもおまえたちを監視して意のままに運命を操っている。この国土に縋(すが)って生き続ける限り、おまえたちに逃げ場はない。神々の末裔としてこの倭

国に代々棲まう物部の一族ですら、神にとってはほんの虫ケラと大差ない。自らの子供を虐げぐらいのことを神々は平気でやってみせる。人としての情けなど、彼らは持ちはしない。おまえは神に搾取され、神に怯えるためだけに生まれて、そして死んでいくのだ。そうして神をおそれ敬うごとに、その信仰を元にして神の力は強大になっていく。

その絶望を、おまえは半ば受け入れていた。父親を見ていればその理屈は嫌になるほどよく判った。

物部尾興はひどい乱暴者で、おまえも母も殴られてばかりいた。それを全て神の折檻に耐えるための修行だと公言して憚らなかった。酒を飲んで酔った時、その横暴はいっそうひどくなった。それは自分の犯した全ての罪深い行為からの逃避だった。尾興は神の子孫の名のもとに、外に中に横暴を押し通していた。

それをおまえが口にした時、尾興は烈火の如く怒り、おまえを半殺しにした。床に頭を打ち付け、屋敷中を引き回した後、一枚一枚手の爪をはがした。重いものを落とされた左手の薬指の骨が折れて、治ったあともその指だけはうまく曲がらなくなった。それ以来、おまえは本当の気持ちを話さなくなったが、それでも胸の中に鬱屈は熾火のように溜まっていった。

自分もやがてああなるのかもしれないと思うと、吐き気がしてたまらなかった。あんな大人になるぐらいなら死んだ方がましだと思っていた。月のない夜の川面のように暗い目をして、どうやって死ぬか、首を吊るか割腹して果てるか、そんなことを鬱々と考えていた。そしてその妄想の中には必ず父親の死体が入っていた。首を刎(は)ねるか、腹をえぐるか、頭を割るか、手足を切り取ってしまうか、そんな凄惨な殺し方を一つ一つ、おまえは暗い想像の中で試した。そうしてどんな想像であっても自分の中の心が動かないように、硬い厚い鉄の板で覆うようにした。

そして、十八の夜、おまえは蘇我馬子に出会ったのだ。

その時のことは忘れようもない。決定的に運命を変える瞬間があるとしたら、それがそうだ。おまえが自らの手で死なずに済んだのは馬子に会ったせいだ。おまえが仏を憎んだのも、そのせいで寺を焼いたのも、戦が起きて結局身を滅ぼしたのも、すべて馬子に出会ったせいだ。

出会ったのはやはり誰かの婚礼だった。おまえは大人の群れに混じって好きでもない酒を無理矢理飲んだり、愛想のない顔をむりやりしかめて笑ったふりをしたりしていた。そのくせ腹の底では誰も彼も気に入らなかった。みんな死ねばいいと思った。

それを馬子が見ていた。ひどく憐憫(れんびん)に満ちた顔をして、真向かいに座っていた彼は

言ったのだ。
「可哀想な奴だな、君は」
その声は、おまえの胸を撃ち抜いた。鉄のかたまりのようだと思っていた自分の心臓の継ぎ目、人間の肉がまだ僅かに残っているところを抉(えぐ)ってふきとばした。
ひどく痛くて、耐えられなくて、じくりとにじみ出した融けた鉄の熱さに動かされて、気付いた時にはおまえは馬子を殴り飛ばしていた。拳がひどく痛んだ。
器に盛られた宴のごちそうが全部吹き飛ばされた。高坏(たかつき)に載った果物も、椀に入った蒸し米も、串にささって湯気を上げたままの焼き魚も、何もかもが全部床に落ちて泥にまみれた。頭の上に熱い粥(かゆ)が掛かった馬子はゆっくりと起き上がり、青ざめた顔でおまえを見た。そして何も言わないままで、土を練り固めて焼いた大皿をおまえに向けて投げつけた。そして有無を言わさぬまま殴り合いになった。大人たちにむりやり引きはがされるまで二人とも拳を振り回し続けた。
引き離されてもおまえは馬子から視線をそらさなかった。鼻血を流しながらおまえが燃え上がるような目でにらみつければ、馬子は青く腫れ上がった目でひどく冷たい笑みをもって返した。その時は友情などが生まれるはずはないように思われた。
次に朝廷で会ったときには口も聞かなかった。そのくせ、目と目ではいつでも意識

してるのが判った。お互いの視線がどこを見ているのか、いつでも気にしてやまなかった。肌がちりちりと痛いように緊張していて、大王の言葉も父親のことも頭から全て抜け落ちていた。ただひたすらに馬子の挙動だけ気にして、その日一日を過ごした。頭の全てが馬子のためにあるような気さえした。こんなにも一つのことに拘泥したのは初めてのことだった。

馬子の父、蘇我稲目(いなめ)と、おまえの父、物部尾興もまた仲が悪かった。仏教の取り扱いのことで彼らは争っていた。おまえは、自分が馬子を嫌う理由の中に仏教が介在しないことをひそかに感謝した。もしもそうであったならば、自分の姿はまるで尾興の後をついて歩く雛のようで、今度こそ自分自身に耐えられそうもなかった。

馬子を馬子自身として嫌いで在り続けること、それがおまえの核となった。どうやればもっと嫌いになれるか、考えた。

馬子は女にもてた。いつでも傷だらけで骨張ったおまえとは違って、血色良くつやつやした頬をしていとも簡単に女を口説いた。和歌も話術も巧みだった。おまえが勝てるのは剣と弓だけだった。暴力的な技でしか勝てないことを顧みると、つくづく自分は物部の男なのだと思った。軍事を司り、武具を整える役目を仰せつかった氏族にこれ以上相応しい素質はなかった。それは尾興から引き継いだ神の末裔の血だった。

ある時、大王の前で弓を射る座興があった。おまえは与えられた三本の矢を確実に的の中央に射た。馬子はわずかにそらした。おまえは見えぬように心の中だけでほくそ笑んだ。

だが、翌日になると馬子が左手に怪我をしていたのだという噂が誰ともなく伝わりはじめた。おまえはそれを聞いて動揺した。再度、どうにかして勝負を付けねばなるまいと思った。おまえはそう考えると居ても立ってもいられずに、蘇我の家に怒鳴り込んでいた。

通された客間で馬子は小さく首を横に振って、怪我があろうがなかろうが、勝負は変わらないのだ、と言った。

「いいよ、君が一番で。弓や剣は君の方が明らかに強いだろう。わたしが戦う場所はそこではないんだからこだわらない」

すかした様子で馬子はそう言った。おまえはますます腹が立って仕方がなかった。

「男なら強くあるべきだ。強くなくていいなどということはありえない」

怒りが深ければ深いほど、声が低くなるのがおまえの癖だった。地を這うように押さえつけた声でおまえは言った。

「そういう意味ではないのだがね。まあいい。とにかくわたしは君と殴り合いをする

のは先日で懲りた。どうせならもっと楽しいことで勝負をしないか」
「狩りか」
「それも悪くはないが、まあ、最近いい酒造（さけのみやつこ）を見つけてね。どうだ、飲み比べというのは」
軽薄だ、とおまえは眉をひそめた。酔った時の揺れる感覚が好きではなかった。その渋面（じゅうめん）を見て、馬子はますます愉快そうな表情を浮かべて軽口を叩く。
「女比べでもいいぞ。どちらの方がどれだけいい女を連れてくるかで勝負するか」
反吐（へど）が出るとおまえは答えた。
何で勝負するかしばらく問答が続いた。相撲（すもう）はどうだとおまえがいい、野蛮だと馬子が冷笑した。和歌はどうだと馬子が尋ね、軟弱だとおまえは罵った。おまえは顔をしかめたり噛みついたりして、馬子の提案を突っぱね続けた。こんなに生きたように口を開くのは初めてのことだった。
そうして、馬の早駆けでどうにか妥協することになった。河内国のとある池にしか生えていない蓮の花をつみとり、飛鳥の地までその日のうちに帰ってくるのだ。
馬を急かし、おまえは一目散に駆けていった。みるみるうちに蹄の音は自分の立てる一つきりになった。

だが、おまえが花を取って帰ってきた時、馬子はすでに家に帰り、寝ころんで猫と遊んでいた。
「……勝負は、」
「うん？　終わったよ。ほら」
そうして花を投げてよこす。おまえが取ってきたのと寸分違わない蓮だった。目を白黒させて、おまえは花を見比べた。作り物ではない本物の蓮花だった。花びらはみずみずしく張りがあり、降ったばかりの新雪のように白い。昨日のうちからすでに準備していたとすれば、もっとしおれているはずだった。
馬子がなんでもないように言った。
「悪いがね、わたしはずるをしたよ」
「なんだと」
かっと血が頭に上り、拳を握りしめていた。
「どういうことだ」
「伝馬（てんま）、というものを君は知っているかな」
あらかじめ馬を道の要所に置いておく。これを郡家（ぐんげ）という。最初の馬が疲れて動きが鈍ってきたところで、近くの郡家で次の馬に乗り換え走らせる。そのようにして馬

を休ませる時間を節約することが出来る。今のところ、蘇我の領土内にのみ整備しているのだという。
あるいはこれと狼煙(のろし)を組み合わせれば、行程の半分だけの時間でものを手に入れることも出来る。家臣に反対側から花を持ってきてもらい、道の途中で落ち合うことにすれば良い。
苦虫をつぶしたような顔でおまえは言う。
「男の勝負に臣下の助けを借りるなど、あり得ない」
「君はそう言うがね、これが本当の戦であったらどうする。馬を疲れさせて動けなくなった君は一人で兵に押し囲まれて死ぬ。そうだろう?」
おまえはそう言われて、言葉に詰まった。
――本当の戦であったら。
そんなつもりは毛頭なかった。ただの個人的な力比べであるつもりだった。
「いいか、守屋。わたしは君の力を高く買っている。だからあまり敵に回したくない。純粋な武人はそれだけで人の羨望を集める。まったく嬉しくないだろうが、君は男にはもてるんだぜ」
猫をじゃらしながら、馬子は言った。視線は茶色をした小さな生き物に向けられて

いるが、どこか冷たい目をしている。
「どうだ、わたしと結託しないか。倭国が一気に面白くなるだろうよ」
馬鹿を言えとおまえは言った。そのくせ、心は少し傾いていた。
「親父殿に小突かれ回されているよりは、外に出て大王の下で私腹を肥やすことの方が楽しかろうよ。うちの親父だって変な新興宗教にハマってどうしようもないから、わたしはさっさと家を出て独立したいんだ。まあ、君とは違って表には出さずに上手くやるけどね」
そう言うと、馬子はにこやかに歯を見せて笑った。
「どうだ、渡来人からまきあげた鉄をこっそり裏で回してやるから、君のところで剣を一本作ってくれ。余った分は自由に使ってもらって構わない」
考えておく、とおまえは答えた。

馬子から贈られた鉄は初めから剣が二本作れるぐらいにふんだんにあった。二本作れば、できばえにはどうしても差が出る。おまえはあえて、切れ味の悪い方に華美なこしらえを施した。その方が馬子には似合うだろう。もう一本は自分のものにした。短く鋭い剣は、馬上で使いやすい。本当の戦になったときに活躍するのはこっちだ。

――いつか、本当の戦に。
そうなるのは怖かった。だが、そうなって初めて自分の存在価値というものが見つかるのかもしれなかった。戦を恐れながら、それを楽しみにしている自分自身に戸惑っていた。
「ふむ、さすがは守屋だ。ありがとう」
特段、疑問を持たずに、馬子は物部の剣を受け取った。
それからは、馬子と遠乗りに出かけることが増えた。歳を重ねるごとに渡来人の最新鋭の技術を見て、おまえは自分の慢心を思い、背筋が寒くなる思いだった。話に出てきた伝馬や狼煙はもとより、海を渡ってやってきた薬や兵法を見るにつれて、自分はいかにものを知らなかったかと恥じ入ること甚だしかった。
だが、蕃神、すなわち仏にかかることになると、おまえはひどく慎重になった。この国の神が怒らないという保証はない。見ただけで目がつぶれるかもしれない。
怖じ気づいたおまえを見て、馬子はせせら笑った。
「馬鹿を言うなよ。神のどこに目があるというんだ」
このころはまだ Sarira はなかった。もしもあったなら、このような恐ろしいことは言わなかっただろう。

馬子は言った。
「どうだ、神を試してみないか。神罰が下るかどうか、試してみようじゃないか」
恐ろしい言葉に、おまえは何も答えられなかった。ただ小さくかぶりを振った。
「わたしはやるよ。見えもしないものに怯えるなど馬鹿馬鹿しいからな」
馬子は言葉の通り、真夜中の誰もいない時、神殿に忍び込み、神を祀(まつ)る祭壇を壊し、火を付けて、十分焦がした後、小便をかけて鎮火した。
おまえはその一部始終を見ていた。見ていて止めなかった。馬子にはきっと天罰が下るだろう。それならば自分が止める必要はない。
だが、何日経とうとも何も起きなかった。
馬子とまた遠乗りに出かけた。天は青々として、風は清々しく吹き渡っていた。
馬子は言った。
「どうだ、君も試してみないか」
おまえは小さくかぶりを振った。だが、馬子は捕らえて離さなかった。
「何を怯えることがある。わたしは神を冒瀆した。だが天罰なんかこれっぽっちも見あたらないじゃないか」
笑い声は高らかに山中に響き、こだまして、快い和音を作った。

「どうだ、見ろ。この世に神なぞいやしない。我々は自由だ」
そうかもしれないと、おまえはぼんやり思った。

もしも神罰がないのなら、一つだけ、やってみたいことがあった。
それは父、尾興への復讐だった。長じるまでの積年の恨みを果たしてしまいたかった。二十を超してもなお、尾興はおまえをいじめ抜いた。さすがに直接拳が振ってくることは少なくなったが、嫌みや無理難題などは後を絶たなかった。積み重ねた年月の分だけ怨恨は否応にも増した。
だが、殺すことは出来そうもなかった。尾興は未だに物部の長(おさ)だ。長が殺されたとなれば、犯人捜しが始まる。それに運が悪ければ他の豪族に領地を乗っ取られるかもしれない。
殺す以上の辱めを与えてやる。そのための方法はかねてから考えてあった。
尾興には一人の妻しかいなかった。おまえの母親であるその女以外に手を出そうとしなかったのは、単に面倒なだけだったのか、それとも、尾興にもかろうじて愛情めいたものがあったのかどうか分からない。その時代には珍しく妻を実家には返さず、独占するようにして自分の家の中に飼っていたのは、計画にとっては幸いなことだっ

た。

尾興の留守中を狙って事件は起こった。

雨がいつ降ってもおかしくないような、暗い泥の色をたたえた空模様だった。おまえはその女に声をかけた。

――ねえ、母さん。庭の椿(つばき)はもう見ましたか。

常にはないほどの優しい声を出していた。こんな声も出せるのかと自分で驚き、それから今のがまったくもって馬子そっくりの柔らかい声色であることに気づいて不快になった。

「椿なんてどこにあるのかしら。まだ秋も盛りだというのに」

女はそう言い、しかし興味を持っていた。おまえは、手を引いて老女を庭先へ誘い出した。誰もいない庭の裏の物陰まで行き、そうして手にした棒でいきなり殴りつけた。どさりと音を立てて倒れた女の口にぼろ切れを押し込んだ。着物の裾をたくしあげて、おまえはその女を犯した。

性器が萎えないように目をつぶり、頭の中にはどこかで見た適当な若い女を思い浮かべようとしたが、なぜかその隣では馬子が座り、自分をせせら笑っているような気がしてならなかった。確かにそうだ。自分だけでは元々女に縁が薄く、あるとすれば

彼が必ず隣にいたのだから。
中に三回出すまで、苛立ちは収まらなかった。そしてその後に残ったのは虚しさだけだった。

さすがに馬子には話さなかった。理由はないが、何故か得体の知れない警戒心が働いた。己の悪行を自慢するほどの子供でもない。
そしてその勘は当たった。女は身ごもったのである。
堕胎はしなかった。すれば死ぬと医者に言われた。それに尾興が許さなかった。胎児の父親が誰であるかを尾興は知らなかった。脳天気にも自分だと思いこんでいたかもしれない。少なくとも表面上はそのように振る舞った。
分からないのは女の態度だった。何もかもを忘れたように振る舞っていた。静かに狂ってしまったのだということを、おまえは後から知る。
夫婦の閨(ねや)に聞き耳を立てるような趣味はないが、たまたま聞こえてきてしまったのだから仕方がない。聞こえてきたぞっとするような言葉に肌が粟立った。女のたった一つの言葉が、事態を明らかにした。
「この間は。ふふ、昔を思い出してしまったわ。あんな風に外で乱暴にするなんて」

聞いたその時、おまえはもう、その家にはいられなかった。馬を駆り、野山を巡った。星々も月も追いかけてきた。闇の中をどれだけ息を弾ませても、逃げられないものはある。

――あの女は、おれと父親を混同している！

馬が疲れ果て、ほとんど乗り捨てるようになっても、おまえは自分の足で駆けだした。夜の風の冷たさに耳が千切れそうになったけれど、いっそ、そうなってしまえばいいとさえ思った。

――おれは父親に似ている！

独語する。何度でも口の中で呟いて、その度に嫌悪感が沸き立ち、吐き気にすら変じた。

山の中で一夜を過ごした。火を焚く気力すら萎えて、夜中を歩き回って過ごした。並ならぬ頑健さであった。その丈夫さも父親の血、ひいては始祖の神の血のせいであるということを思い知らされて忸怩（じくじ）たる思いをかき立てることにしかならなかった。どこを歩いているのだか分からなくなるまで夜道を歩き倒した。

やがて気が付けば蘇我の家にいた。山歩きで出来た擦り傷や切り傷には手当がされていた。

「道の真ん中で倒れていたそうだ。伝馬の使者が気づいたからよかったが、あのままではのたれ死ぬところだったぞ」
馬子はそう言って快活に笑った。その笑顔はひどく懐かしかった。気が付いたときにはぽろぽろと涙があふれ出てしまった。
「おい、どうしたというのだ」
あわてたような馬子がおかしかった。そう思うとまた涙がどっとあふれてきて、声を殺すために奥歯をかみしめた。
「……何でもない。目にごみが入った」
できるだけ平たい声を作って、おまえは言った。
そして馬子のすぐ隣に、見覚えのない女が赤子を抱えているのが見えた。問えば、馬子は照れたように笑った。
「いや、そうか、すまん。君にはまだ言っていなかったか。実は何年か前に、結婚してな。少し君とは遠いが物部の一族だぞ。子宝にも恵まれてなあ。もう危なっかしい遊びは終わりにせねばなるまいな。うるさいクソ親父も死んだし、これからは大臣(おおおみ)として真面目に働いて妻子を養わねば」
このごろの自分は裏切られてばかりだ、とおまえは思う。そして小さくかぶりをふ

って何かを静かに諦めた。それが神の罰なのだというのなら、甘んじて受けよう。そうして丁重に礼を言うと、久々なのだから泊まっていけと言う馬子の誘いを断って、物部の家に帰った。

これ以上あの家から逃げるわけにはいかなかった。おまえは一人で戦わなければならない。

尾興も女も、何も言わなかった。叱責されることもないままに、元の通りの日が過ぎていった。

女は、子を産み落としてすぐに死んだ。やがて尾興もまるでその後を追うようにして死んだ。

おまえの気持ちは晴れなかった。父が死んだとして、それで何になろう。本当に憎むべきは自分の身体の中に流れているこの忌まわしい物部の血なのだから。

年の離れた妹ということになるその赤子は、適当な乳母(うば)に世話をさせた。見れば確かに可愛かったが、今にも折れそうに細い手足はどうにも触り慣れなかった。恐ろしくておまえは赤子を遠ざけた。

その女の子供は布都、と名付けられた。もっと太るようにと心配されながら育った。

布都は乳離れが遅かった。本当の母親ではないということを、幼心に気づいていたのだろうか。いつも何か問いたげな賢い目をしていた。離乳食もろくに食べられない弱い子供だった。とりわけ米を食べたがらないのだった。勘づいていたのだろう、とおまえは後になって思う。

赤子を疎んじつつ、出来るだけ自分の仕事をするようにした。尾興が残した財産の管理、大連（おおむらじ）としての責務、やることはたくさんあった。赤子のそばにいれば、知らないうちに傷つけてしまうかもしれないと思うと、怖かった。

馬子もまた勢力を伸ばしているようだった。口が上手いあの男は誰でも言いくるめてしまう。おまえは渡来人の技術を警戒しながら、国を一つにまとめあげるための方策について考えなければならなかった。皇族の中にもいろいろな考え方を持つ者がいる。不穏な気配は消えなかった。おまえは口べたではあったが、ねばり強く対話をし、この国の在り方、信仰のあるべき形について説いてまわった。

この国に神などいないことは分かっていた。いたとしても、満足に罰も与えられないほどに弱ってしまっているということを、身をもって知っていた。それでも神を恐れよと言い続けなければこの国は崩壊してしまうと感じていた。自分自身が為した悪行を思い返し、あれが倭国全土にひろがったならば取り返しがつかなくなる。

ある日の晩、おまえは馬子に呼ばれた。酒を飲もうと言われたのだ。
「何の用だ」
「お言葉だな。久方ぶりに旧交を温めようというのに」
「おれはおまえの口車には乗らん」
もう十八の子供ではないのだ。危険な者とそうではない者の違いぐらいはつく。
「つまらんなあ、守屋が賢くなってしまった」
そんな言葉の後に、さわやかな笑いが続く。どこか哀愁を帯びていた。
「おまえはいつまでも子供のように、純粋な武人でいてくれればよかったのに」
「誰がそうさせた。おれが望んでなったわけではないぞ」
おまえは声を低く抑えて言う。もう、このごろはそのような話し方しか出来なくなっていた。最後に明るく声を上げて笑ったのはいつだっただろうか。
「では、率直に言おう。神の力を増したくはないか」
「なんだと」
予想を遙かに超えた言葉だった。おまえは眉間の皺をますます深くして、馬子の言葉を聞いた。
「今、ある渡来人から相談を受けている。地力を増し、米の収穫を格段に増やす呪い

があるが、それは人の人生の記録と引き替えなのだと。śarīra と呼んでいたが、倭国に入れてもよいものかどうか」
「人生の、記録……？」
「米を介して、人の行動を読むことが出来る。上の方ではとっくに話がついていて、生きている間は倭国の神祇（じんぎ）が、死んでからは蕃神、すなわち仏がその情報を管理することになるのだそうだ。どうだ、このままではこの国の神はどん詰まりだろう。仏がまだこの国に入るには時が必要だ。しばらくの間は神の力が必要なのだ」
　誰がどこにいて何をしているのかを管理できるようになれば、神は確実に罰を当てることが出来るようになる。人々は神を恐れ、より慎ましやかに暮らすようになる。米の収穫が増え、口減らしに姥捨（うばす）てや間引きをする必要もなくなるだろう。
「どうだ、悪くはないだろう」
　うまい話には裏がある。おまえは直感的にそう思った。
「おまえ自身は入れるのだろうな、そのśarīraというのを」
「ああ、もちろんだ。倭国全体にいれなければ意味がないからな」
　あっさりとうなずいた。
「実は息子にはもう入れてある。あれはなかなか面白いぞ。講話中にほんの少しあく

びをしただけで、罰が当たって頭の上に鳥の糞が落ちてきた」
いかにもおかしげに馬子は笑った。おまえは少しだけこの男の子供たちに同情した。
「女子(めのこ)の方はダメだな、米自体が食えない。粥を一口舐めただけでひどく咳き込んでしまう。身体にあわんのだろう。君の妹はどうだ。うちと二つ違いだろう。そろそろ言葉を覚え始めたか」
「……知らん」
本当に知らなかった。乳母に任せきりでろくに家に帰ってもいなかったのだ。
「なんと。可哀想だなあ、二人きりの兄妹(きょうだい)だというのに」
「そう思うなら、おまえが結婚してやればいい」
「ほう、わたしに妹をくれるのか。それに勝る贈り物はないな。二人目の妻というのはなかなか新鮮で良い。自分好みに育てるというのも悪くない」
ほくほくとした顔で馬子は答えた。
何とはなしに薄ら寒いものを感じておまえは取り消した。
「変な風に使うなよ。教育はうちでやる。遊びにくるぐらいは許してやると言っているんだ」
「はは、やはり可愛い妹なのではないか」

そう言われるといくらかこそばゆい感じがして、おまえはますます口をへの字に曲げた。

「まあ、そう怒るな。子供たちのために、この国を豊かにしてやらねばならんだろう。諸外国もすでに入れたという。仏教自体は無理でも、実りを豊かにするということさえ分かっておれば他の者も文句は言うまい。鉄製の鋤(すき)や鍬(くわ)とそう変わらんよ」

そのように快活に笑った。おまえは返事をしなかった。

確かに、鉄の鋤や鍬が広がるのと同じように、śarīra は人々の間に広まっていった。守屋が許す許さない以前に、部民たちの間に広がってしまっていた。

田の四方に杭をうち、むにゃむにゃと得体の知れない呪言を唱え、ぱんぱんと柏手を打てばそれで終わりだ。たったそれだけのおまじないで収穫量は確かに増した。それと共に人々の心の間に信仰心がよみがえっていくのが分かった。神宮への貢ぎ物が何も言わないのに増えた。信心深い人々の声がおまえの耳にも届くようになった。神の罰は、たしかに当たるようになった。

それらはひどく快く、信仰を説く努力が報われたように感じてしまった。

おまえは、そこでもまた間違ってしまった。慢心がおまえの道を歪めた。

妹が少しずつ大きくなってきて、乳母の手がかからなくなると、家では二人きりでいることが多くなった。賢しげな瞳で見つめられると、胸の内がひどく痛くなる。自分の罪悪を呼び覚ますほどに、幼子の瞳の純粋さは残酷である。じくじくと罪の意識にさいなまれて、おまえは当たり散らすようになった。深酒をするようになった。あれほど嫌っていた父親のしていたように振る舞うことになった。

火のついたように泣き叫ぶ妹を見て、おまえは判ってしまった。このようなやり方でしか、おまえは妹に触れられない。娘であり妹である布都との関係について、おまえは絶望する。

これが呪われた血。神の血。誰かを虐げなければ己が存在を誇示することが出来ない。誰かの犠牲がなければ生き続けることの尊厳を保ち続けられない。

そしてそのような横暴のつけは確かに当たった。布都を殴った拳の分だけ、骨の奥が疼くような感じがした。その痛みに耐えかねておまえはまた酒を飲み、気が付けば布都を殴っていた。

剣を鍛える時の儀式において、布都を使い始めたのもこの頃からだった。それまでは部民の生娘の中からその都度選んで使っていた。連続で何度も贄をやらせるのは可

哀想だという意見もあったが、おまえは黙殺した。余所(よそ)の女たちを使うよりも布都の方が都合が良い。それにどうせ他の娘たちはsarīraで汚れてしまっている。ならば他に手だてはなかった。

そんな中で、時折馬子が遊びに来るのが唯一の変化だった。馬子はよく笑った。明るい笑いを振りまいて、時々珍しい干菓子や鞠などを持ってきてくれた。破れた垣根があれば、言って修繕するように命じた。子供用の着物をひとそろい仕立てて、節句の祝いにくれたこともある。

そつのない心配りを忘れなかった。それが打算からきたものであろうと、真心によるものであろうと、人との関わりの暖かさが染み入り、同時にそのようには振る舞えない自分自身を呪った。

馬子は口うるさい。

「激務は分かるが、酒はほどほどにな」

「ふん、おまえに何が分かるか」

「妻でももらったらどうだ。仕事に張り合いが出るぞ」

「妹が小さいうちはだめだ」

「妹の方が先に嫁に行っているくせになあ」

馬子はそう言って、おとなしく座っている布都をしげしげと見つめた。二人きりでいる時より目に生気が宿っているように見えた。
「大きくなったらとても美人になるだろう。いいのか、本当にもらってしまって」
「好きにしろ」
ぶっきらぼうにおまえはそう言い、ついと席を立った。これ以上そこにいるのは耐え難かった。おまえが立ち上がっただけで、布都の顔が一気に明るくなったのがわかり、憂さが増した。床を踏み抜きそうなほどの足音で、おまえは屋敷の外に出た。
もはや誰に嫉妬しているのかすら分からなかった。布都が馬子にだけ懐いていることも、馬子に屈託なく甘えることが出来る布都も、全てが疎ましく羨ましくて仕方がなかった。胸のうちに燃える炎の暗さが、おまえを駆り立て、動かしていた。
ひとりになると布都のことについて、おまえは何を思えばいいのか判らなかった。出自を明かすことなど出来ない。だがこのまま手元においていていいとも思えない。虐待の果てにいつか布都を殺してしまうような予感があった。おまえは苦悩した。きちんと無事にいさせるためには、馬子が攫っていけばいいのはわかりきっていた。
けれどその姿を思い描けば、嫉妬で胸の内が苦しくなる。自分の血を分けた子供のこと、確かに自分の運命を変えた男のこと、どちらにより強い嫉妬を抱いているのか

など判らなかった。奪われる日がいつか来るべきなのだと考えてはいた。だが、その時になって素直に自分が布都を受け渡すことが出来るか、自信はなかった。

仏のことが囂(かまびす)しく喧伝されるようになると、さらにおまえの腹の内がふつふつと沸くようだった。おまえがせっかく保った倭国の神への信仰が土足で踏みにじられるように感じられた。

おまえはもう我慢しなかった。自ら寺に赴いて仏塔を破壊し、仏殿を焼き、仏像を海に投げ込ませ、仏法信者を面罵(めんば)した上で、尼たちを捕らえ、衣をはぎとって全裸にして連行し、群衆の目前で鞭打った。炎の渦巻く風音、鞭の高く鳴る風切り音、女たちの叫び声、どれもがおまえの耳に快く響いた。

やがて大王の病が重くなり、どのような加持祈禱(かじきとう)も甲斐なく、葬儀となった。殯(もがり)の宮(みや)で行われた儀式の中で、おまえは敵意に燃える目で馬子を睨み付け、その長大な剣をせせら笑った。

「笑わせる。串刺しにされた雀のようではないか」

おまえが本当に言いたかったのは、そんなことではないはずだ。腹の中に渦巻く怨念はそんな嘲りで表される程度のものではなかったはずだ。

口には出せないままでわだかまっていた感情。
――おまえの剣はおれが作った。
――おまえの妻はおれが作った。
――それなのにおれからどれだけ奪えば気が済むのか。
――罰が当たれ、死んでしまえ。
――おまえなど、死んでしまえ。

その春、豊聡耳神子が物部の家を訪れたとき、恐れていた時がきたのだと思った。
神子は言った。
「大事に育てるのは良いが、彼女には少しぐらい外に出ることも必要なのではありませんか」
言葉に落としてみるとさして重みのあるものではない。それでも優しげな顔立ちをした子供と対面して、おまえは思わずひれ伏しそうだった。柔和な笑みであるのに全てを見透かされているように感じた。小さく頷いて、必要だと求めるものを貸し出してやった。
その日の夜、布都が帰ってこなかったことについては、安堵したほどだ。このまま

でいられればおまえは妹を殺してしまうことはないだろう。
けれどその思いは丸一日保(も)たなかった。目が気が付けば妹を捜していた。びくびくと怯えてこちらを窺う眼など要らないと思っていたのに。
妹がいない。血を継いだものがいない。小さな未来がない。手元に置かなければ。
やはり呼び戻そう、そう思って立ち上がりかけたところで、知らせが来た。穴穂部皇子の強引な妻問いの話を聞き、どくりと胸の中がざわめくのを感じた。
それはいつか見た光景と同じだ。
――皇族さえ神をも恐れぬ強姦をしようとする。
――況(いわ)んや臣下をや。
一刻も早く穴穂部皇子の顔が見たかった。馬を急がせた。着いてみれば当の本人は涼しい顔で、三輪逆の不敬を主張した。そのふてぶてしさに誰もが唖然とした。無論、討つべきは忠臣ではない。従来の常識ならば横紙破りの穴穂部皇子をこそ罰するべきだと皆が知っていた。彼の主張する道理はねじ曲がっていた。
だが、彼の人とも思えぬ冷酷な目つきを見て、おまえは一つの道理をそこに見出した。
――神があろうとなかろうと、人は己の欲するところを我慢出来ない。

――ならば、人の目指すべき活路は欲望の中にしかない。

おまえはそれを探ることにした。知らず知らずのうちに笑みが浮かんでいた。穴穂部皇子を、乱暴者で強姦魔の、もう一人の自分を王位につけてみたくなった。自分の欲望が布都をなしたように、この男の欲望が何を生み出すのかを見てみたくなった。

おまえは雨の山中を行き、忠臣を逆賊とののしり、斬り殺した。鮮血が雨水に薄まり、気味の悪い色の水となって地に滲みていった。冷たい雨に打たれながらおまえは歯をむき出しにして笑った。生まれて初めての殺人はひどく甘い心地がした。

これでいい。おまえは深く胸の内にしみて行くのがわかった。

――汝の欲することをなせ。

自らに言い聞かせ、深く深く頷いた。

それから先の残党狩りもおまえは先陣を切って駆けた。誰よりも多く首を取り、どんな兵よりも働いた。物部の血の中に植え付けられていた闘争本能が花開いていた。罪深い殺人こそ、おまえが心底望んだことだった。

血生臭い笑みを浮かべておまえは野山を駆け巡った。手には十八の頃に作った短刀があった。木の枝と共に人間の腕を断ち切っても刃こぼれしないほどの不思議な神通力が備わっているようだった。自分の指の一部になったかのようにぴたりと吸い付い

て離れなかった。剣に宿った神、韴霊（ふつのみたま）が喜んでいるのが伝わってくるようだった。

山狩りが終わっても、おまえは物足りなかった。もっと血を流さなければ足りなかった。着々と準備を整えた。このままでは到底終わるまいと思った。寺を焼き払うだけでは足りない。古くからの神々の総力を挙げて、蕃神を討つ。そのための準備は楽しかった。

――おれは神のために戦っている。

――おれが望むことを、神もまた望むはずだ。

戦いの狭間、闇の中、ひとりで火を見つめていると、不意に馬子のところに預けたままの布都のことを思い出すことがあった。使者は気休め程度に送り続けていたが、自分自身で行って取り返そうとはしなかった。

――いつか戦となったなら、馬子は布都を人質に使うだろうか？

そんなことはあってはならないと思い、またそうなっても容易に見殺しにしかねない自分のことを馬子はよく知っているだろう、そう考えた。だから無理に呼び寄せることは避けた。取り返したならば、殺してしまったかもしれない。他人に殺されるよりはいっそ、と思って。

そして機は熟した。次についた大王の病弱さは、蕃神の呪法を引き寄せた。おまえ

は表だっては怒り、裏では好機に目を輝かせていた。神の威光を再びこの世に知らしめるための絶好の機会であった。かねてより結託していた豪族の力を集結して、呪詛を飛ばし、一切成就を祈願した。その合間に馬子の娘が忍び込んできたことは、おまえにとっては些事であった。どのみち贄は足りなかった。それに、呪詛の対象に最も縁の深いものを使うのは道理にかなっている。

そして、それが失敗に終わった時、敗北が足音を殺してひたひたと自分の後ろをついてきていることに気が付いた。それを振り払うようにして何度となく呪詛を繰り返し、川が生け贄の血で染まった。神の力はまだ衰えていない。そのことを証明すべく、己の出来ることを尽くした。呪術と弓術を組み合わせて雨のように矢を飛ばし、幾人もの敵兵を殺した。

馬子たちの軍は三度押し寄せ、三度とも撃退した。それでもおまえの中に安堵はなかった。得体の知れない何かが背中を怯えさせるのだった。

翌朝、目が覚めてすぐにおまえは朴(ほお)の木に登った。そこからは馬子の軍がよく見えた。ちりちりと空気が張りつめて、尋常ではない気配に満ちている。かつてない規模で矢返しの呪法が張り巡らされているのが分かった。糸口をたどれば呪者を特定することも出来た。定法であれば先に呪者を殺してから馬子を射るべきだった。

だが今、この呪いを仕掛けている迹見赤檮（とみのいちい）という名前の舎人（とねり）を射殺したとしても、次々に代わりが現れるだろうということが察知された。空気全体に神々しい気配が満ち、すぐにでも呪いは発動出来るように十分な準備がなされていた。何かの呪法によって周囲の霊的な力が向上したということは間違いなかった。嫌な予感がちりちりと首筋の毛を逆立てた。

馬子の後ろ側に仏の威信が見えるようだった。ちらりと目を走らせると、見覚えのある子供がそばにいた。ひどく疲れた様子だったが、まぎれもなく豊聡耳神子であった。

――布都を、使ったのか。儀式の贄にしたのか。

そうでなければこれほどに強い力を得られるはずがない。

怒りに心が乱れる。血が頭にのぼり、反射的に矢をつがえた。己の呪力を振り絞り、物部の祖神、宇摩志麻遅命（うましまじのみこと）に加護を願った。妹を生き返らせることは出来なくとも、穢れを祓（はら）い、矢が届くようにと。

――ひふみよいむなやことにのおと。

――ふるべ。ゆらゆらとふるべ。

弓を引き絞り、結界の隙間を狙う。この一矢（いっし）が矢返しの呪法を破るための破魔矢と

なれと願った。どくりどくりと心臓が脈を打つ。息を殺し、一心に相手を見すえる。どれだけ見つめても目の前が霞んでならなかった。後から後から涙が溢れて仕方がなかった。

――おれの妹。おれの娘。おれの報い。おれが残した唯一の証。

甘やかな思い出などない。出自からして罪と穢れに満ちていた。まともに愛したことなどない。殴り折檻し苛めて傷付けてばかりだった。

それでも確かに血を分けた兄妹ではあったのだ。まともに触れることなど出来なくても、確かに胸の内に思いはあった。ただただ溢れてくる感情を載せて矢を放った。敗北のことなど忘れた。

それは空隙を奔(はし)る。風を裂いて戦場を駆ける。血と土煙で曇った大地の上、夏の陽光を浴びて一本の矢が吸い込まれるように飛翔していく。青空の中をどこまでも続いていくかに見える。

だが、それもやがて終わる。空間に見えない文字で描かれた矢返しの結界に囚われた矢はじりじりと火花を放ちながら、虚空で動きを止める。神の力と仏の力がぶつかり合い、そして歴史が示した通りに神が負けた。矢は一刹那のうちに翻り、再び高速でおまえの元へ返った。

音も感じない程の刹那に射貫かれたのは右目。おまえがしっかと馬子を見据えた目であった。眼窩を貫いて脳ごと突き刺される。こぼれていた涙が血に染まる。視界は暗く染まる。意識が立ち消えになるその刹那に心を埋めていたのは、まだ幼い妹のことであった。

```
</body>
</dtml>
>>>vital check...ready ...done  status "dead"
>>>end of life
>>>save change? y/n  --->n
>>>ready to shutdown...
>>>system shutdown... done.
```

「[illegible]」

「[illegible]」

目を開けるとそこは塔の外だった。わたしは地面にへたり込んでいた。口の中はひどく嫌な匂いと味がして、唇の周りにべたべたした吐瀉物がこびりついていた。耐えきれずに何度か吐いたのだろう。憶えていない。

神子は塔の扉を閉めたところだった。ゆるゆると顔を上げているわたしに向けて、心配そうに視線を投げかけた。

「大丈夫ですか？」

ゆっくりとうなずくが、まだ胸のうちにさきほどまでの感情の残渣が残っていて、少しでも何か考えようとすると肉体が反抗して吐き気を催してしまう。出来る限り頭の中を空にしようとして、呼吸のことだけに集中した。

「少し休んだ方がいいでしょう」

そう言って土器（かわらけ）に冷たい水を汲んできてくれた。ゆっくりと口をゆすぎ、周りをぬぐった。

穴の中はひどく静かだった。わたしの荒い息がただ穴の中に響いていた。今のわたしには、何かを語ることが出来そうもなかった。言葉の奔流に押し流されて自分とい

うものがどこかに行ってしまいそうだった。
でも、これだけは言える。
これを読んだ後でもわたしは兄を許すことなど出来ない。
どれだけの理由があっても、つけられた傷は消えない。けれど純粋に憎み続けることも難しかった。忸怩(じくじ)たる思いを抱えたままで、ひたすらに後味の悪い思いをするだけだった。
「そうでしょうね。もちろん、それでいいのだと思います」
神子がわたしの心を読んだかのように言った。
「このひと月の間にわたしは、守屋の分、また三輪逆、穴穂部皇子、それから父、先の大王の分を何度か読み返しました。それぞれに皆が自分の物語を持っており、どれもが寂しい魂の持ち主であるということがよく判りました」
神子は淡々と言ったけれど、わたしはその苦痛の様を思うとひどく胸の中が痛んだ。たった一人分の人生であっても読み通すまでにこれほどまでに苦しい思いをする。四人ともなれば、どれほどだろうか。想像もつかない。
神子は小さくかぶりを振った。
「わたしのことは良いのです。それよりも、布都、君は気づきませんでしたか。守屋

は死を恐れなかったということ」
末期の彼は敗北も死も忘れていた。ただ一心不乱に矢を射るだけだった。……わたしのために。
「……兄がそうだったというだけではないのか。物部の血の故に、戦を望んだからというだけではないのか」
「ええ。そういう人間もいるということです。全ての者が不死や永遠を望むわけではない」
神子は静かに語る。
「生死や永遠よりも勝る価値を持つ者もいるのではないでしょうか。先だって崩られた大王のご意志をきちんと確認しませんでした。彼は本当に不死を願っていたのか」
「だが、あれは死を恐れていたぞ」
「そうでしょうか。死を恐れていたのか、それとも皆に疎まれることを恐れていたのか、そこは曖昧なままではありませんでしたか」
「死や命よりも怖いもの、重要なものがあるというのか。そんなことは認めぬぞ」
わたしは、ほとんど泣きそうだった。
「太子様はそんなことを考えはせぬ。そうであろう。そうでなければならぬ！」

わたしは、いやだった。永遠がなければいやだった。神子が、普通の人間達と同じように死んでしまうのがいやだった。楽しい時間が終わってしまうのがいやで、自分の手を悪行に染めた。

わたしは諦めるわけにはいかなかった。前を見るよりほか無かった。もしもひとたび振り返ったならば、そこには切り立った崖しか見えなかったろう。帰る道などどこにもないのだ。

「……そうですね。迷わせてしまって申し訳ありません」

神子は小さくうなずいた。

「彼が真に望んだならば復活するはず。それまで様子をみる必要があるでしょう」

言葉の通り、毎日、わたしたちは遺体の様子を見に行った。

その日には、硬直していた身体は緩んでいた。関節は柔らかく、腕も動かすことが出来た。

ある時には、肌の色が青く染まっていた。破れた着物から腹部も変色しているのが見えた。ある時には、じっとりと黒い腐液で濡れている身体を、烏がついばんでいるのを散らした。ある時には、胸を悪くする臭気が風に吹かれ消えていった。まともに

見ることが出来ない。ある時には、異臭が野原に漂っていた。鼻を摘まなければそばに寄ることも出来なかった。ある時には、既に余分の肉は獣に持ち去られていた。残されていたのはただ骨だけだった。

とある日に、わたしたちは大王の骨を地に埋めた。そうして静かに両手を合わせて拝んだ。

風が強く吹いていた。もう冬が間近に来ていた。雪がいつ降り始めてもおかしくはない。野原を揺らす強風にわたしたちは二人とも震えていた。手をつなぎあわせることも、抱き合って身体を温めることもなかった。二人は、どこまでも一人と一人のままだった。

「……駄目だったな」

「ええ。どうやらそのようです」

深く瞑目したままで、神子は拝み続けた。自分の非礼をわびるようでもあった。

「やはり、大王は死の前にご満足されていたのでしょうか」

「いや、失敗した原因は他にもある。śarīra が、邪魔をした可能性があるだろう」

丹が効果を持った屠自古と、そうでない大王の違い。

śarīra 以外の相違点は数多あったが、呪術の類についていえば、大王の方がより高

度な術で守られているはずだった。だが śarīra だけは避けられなかった。美食家で贅沢な食事になれきっている大王が、米を食べないということなどあり得なかった。

「確認する必要があるでしょう」

神子は静かに言った。わたしはじっと神子を見た。

「……大丈夫。君に頼むほどの薄情ではありません」

笑んでいた。にこやかで、儚げだった。唇がわずかに震えていた。

「それに、万が一失敗して死んだとしてもそんなことは大したことでは、」

「嘘だ」

短く遮る。わたしは、何をおいてもそう言わなければならない。神子の言葉が実際のところ、嘘であろうとなかろうと、嘘だと断じなければならない。

神子は、どんなことがあっても不屈でなければならない。志を折られてはならない。強くなければならない。

そうでなければ、わたしが頼るよすがは何処にある。神子だけが、わたしの生きる理由なのだ。兄を亡くし、一族も没落し、友人もまた深い眠りについている。それならば、わたしがなすべきことというのは神子の手助けの他にはない。

わたしは口走っていた。いざという時の頑迷さは兄譲りなのだと気付いた。頑固で

意固地で執念深い物部の血。それは確かにわたしの中に流れていた。
「死ぬのが怖いだろう、神子。しかたがない。我が身代わりになってやろう」
それこそ嘘だった。わたしだって怖くて仕方がなかった。あのように恐ろしい骸(むくろ)を毎日見据え、徐々に腐っていく有様を眼に焼き付けて、自分もやがてああなってしまうのだということを考えては恐ろしくないわけがない。
それでもわたしは嘘をついた。
「先生の丹が、我に効かぬはずがない。同じ道を学んだのだ。素質もある。いつでも太子様が望んだ時機に復活してみせよう。それが我にとって最大の貢献だ」
嘘だ。
嘘だ。
これは全部、嘘だ。
わたしは友達に、大切な友達に嘘をついた。自分の理想を押しつけた。
神子は、死を恐れなければならなかった。そして永久の命を望まねばならなかった。
それを望んだのはわたしだ。神子が神ならばわたしは人間。彼女を信じる狂信者。
「神子は、それを見ていてくれ。わたしの身体が腐らないかどうか、定められた時になるまで眠り続けていられるかどうか確かめてくれ。そして心が定まった時にわたし

を追いかけてきてくれ」
わたしは笑む。出来るだけ神子と同じような慈愛に満ちた顔を向ける。
「では、先にゆくよ」
わたしは、このときになって初めて、神子の先を行くことが出来た。
未知の世界は恐ろしく、しかし広大だった。

そして今、眼前に神子はいる。わたしの後を追いかけてくれたことについて、わたしは安堵して良いのか、それとも無理矢理にそのようにさせたことを悔やむべきなのかどうか判らなかった。
「ありがとう、布都」
神子はただ笑むばかりだ。わたしのことを責めはしない。
わたし自身のことだけ考えるならば、神子がついてきてくれたことはありがたいことのはずだった。神子がいなければわたしは路頭に迷ってしまうのだから。
けれど、それは本当に正しいことだったろうか？　このような、寄る辺のない場所で三人きりになってしまうことは。

「ねえ、布都。わたしは君のこと、本当に感謝しているのです。今度こそはわたしが先に行こうと思っていた。けれどやはりわたしは臆病者なのです。君が無意識に見抜いたように、わたしの本質はただの臆病で卑怯な人間なのです。一人では先に行けない。一人ではさみしすぎる」

気持ちを読んだように、神子は小さく息をついた。わたしは背中を冷たいものが降りていくのを感じた。すがるように言いつのる。

「神子、どこへ行こうと言うのだ。この世界から、誰も出ることなど出来はしない。全ては道(タオ)によって形作られたに過ぎぬ。道(タオ)から逃げることなど……」

「とてもいい仕組みを妖怪寺の尼僧が教えてくれました」

――頭文字を取って、ハルモニア(HARMONIA)システムと呼ばれている。

「正しくは高感度アバランシェ増倍型モノリシック涅槃集合システム(High-gain Avalanche Rushing type MOnolithic Nirvana Assembly system)と言います。時代が進み人間の精神が徐々に進化していった遠い未来においては悟りへ至るためのポテンシャル障壁が低くなります。その状態でひとたび悟りを開くものが現れた際には、それに感化されて雪崩が起きるようにして頓悟(とんご)するものが増えていく、所謂アバランシェ増大現象が起こります。それに対応するべく一つの規格化されたモノリス上にそれぞれの涅槃(ねはん)を組み立てるシステムであり、従来のśarīraでは対応出来なかった涅槃

者に対する救済措置と――」

そこまで言いかけて、わたしの目が点になっているのに気付いたのだろう、神子は説明を打ち切った。小さく首を横に振る。

「まあ、難しいことを言っても始まりませんね。不死者、あるいは神仏にとっての死後を司るシステムだと思っていただいて構いません。厳密には死ではないのですけれど、個体としては存在しなくなります」

息を継ぐ。話は続く。長い概念の話。解釈の話。本当かどうか判らない難しい話。

「わたしは、一つの涅槃にいたりました。涅槃というのは、仏教なりの言い方で道（タオ）を得たもの、太極を内側に練り上げたものを表したに過ぎません。全てのものは根源たる道（タオ）へかえる。生きているも死んでいるも同じであるということを理解し、その、大いなるものの中に真に同一になることが仙人に至るための必要十分条件であり、生きながらにして仏になるということでもある。これらは全て同じことを示しているが、終わりがないということに耐えられなくなった場合に備えて仏教は新たなシステムを構築しておいたのです」

仏教の話など聞きたくないわたしはただかぶりを振る。けれど神子には通じない。

「ハルモニアとは、西欧の古い女神の一人だと聞きます。とある国の始祖に嫁ぎ、た

くさんの子供を産んで幸せに暮らすかと思われましたが、建国にまつわる呪いを受けて子供たちは次々に不幸な死に方をすることになる。女神ハルモニアはこれ以上呪いが国に降りかからぬよう、夫と共に放浪の旅へ出て、最期には呪いを受けた夫が蛇に変化する際に、ずっと彼を抱き続け、最後には自らも蛇に転じてしまったという。このシステムは国のために自らの幸せを捨てた立派な王妃の名を冠しているのです」

西洋のことなどわたしは知らない。けれどその美談はわたしには呪われたものに感じられる。

自らの幸せと、国の行く末と、どちらが大事か。

「このシステム、今はまだβ版ですが、デバッガーを募集するぐらいには出来上がっている。わたしは尊い女神に敬意を表して、それに応募しようと思――」

「わからぬ！」

わたしは遮った。

わからない。ただひたすらに彼女の述べていることがわからなかった。

どうして、そうしなければならないのか。どうして終わらなければならないのか。

「我らは永遠を求めて眠りについた。そうではないのか。終わらない物語を求めて眠りについた。いつまでも子供のままで、死ぬことなしに、この楽しく美しい時間を過

ごそうと誓い合って復活したのではなかったか。それだのになぜ、神子は終わろうとするのだ。我らの生き様を否定するのか」
ハルモニアシステム。涅槃へ到達したものへの救済。
それは――そんなものは、ただの――――
「体(てい)の良い、自殺ではないか！」
叫びが、響いては消えた。星々のようにゆらめいていた神霊がその声に怯えるように、ひとたび光を控えた。
言葉はしばらく影を潜めた。風も吹かずにただ空間だけがそこにあり、動くのはちらちらとしたかすかな光だけで、それらも少しずつしか広がっていかない。空間の本質は基底にある闇なのだ。あまたある神霊たちの光があまりに雑多であったので、気付かなかったが、この小さな宇宙の本質は、暗い闇にこそある。
「――否定は、しません」
神子は言う。そして手の内の笏をこちらへちらりと向ける。
「わたしは、今まで起こったことを全て書き付けていました。君の思いを、君の目から見たわたし自身のことを過去からずっと見つめ直していました。そして、わたしがどれだけ人々を救いたかったのかについて、考えて、思い返していました」

そして、思い出す。原初のはじまりのこと。
「わたしは何でもない人々をこそ、救いたかった。神に弄ばれては死んでいく哀れな民草をこそ救済したかったのです」
それが、現状を見てみればどうだろう。
「既に幻想入りを果たしたわたしは外の世界では居ない者として扱われている。人々はもう救済を必要としないのです。人々はもう十分に強くなったということでしょう」
「だからといって……！」
叫びながらも、わたしはもう自分が判っていたことに気付いた。
いつまでも馬鹿で無知で世間知らずな子供ではないのだ。身体はやせっぽちの子供のままでも、要らない知恵は積み重ねてきた時間の分だけついて回る。
神子の視線と合う。
その目は同じ色をしている。お互いの瞳の中に写った、お互いの姿を見つめている。
「何故、生きるのか。その理由なんて無いことに、君だって気付いていたでしょう？」
そうだ。それは目覚めて一番最初に言ったことだ。
誰も目覚めを祝福してくれないことに気が付いた瞬間。
――じゃあ、なんで、我は復活したのか？

初対面の紅白巫女に面と向かって疑問をぶつけてしまうほどに、無防備に心のそのままをさらけ出していた。その疑問を何一つ解決しないままに、巫女と戦い、そして負けた。

――こんなにあっさり負けてしまうとは。

――我はなんの為に千四百年も眠っていたのだろうか。

復活を成し遂げた尸解仙（しかいせん）よりも今を生きる人間の方が強かった。

それが意味するところはただ一つ。

救世主など、要らない。尸解仙など、望まない。

永遠を生きるモノなど邪魔なだけで、死を救済として受け入れるほどの強さを人間は持ち得た。

全ては結局のところ無駄だったのだ。

「無、空、虚無……言い方はたくさんある。わたしは申し訳ないことをした。君を先に行かせ、私みずからもそれに引きずられるようにして歴史の大いなる流れから分断されたのです」

「我は……それを望んだ」

残せるものなんてないから。神子以外に寄る辺がないから。

「そうでしょうか。守屋は君を残した。君もそうすればよかったのです。せっかく生き延びたのだから、馬子とでも幸せに暮らしていればよかった」
「どうしてそんなことを今になって言うのだ！　我には、もう、あなたしかいなかったのに！」
あのまま神子に捨て置かれるなど、あり得なかった。自分自身の生を全うすることなど出来るはずはなかった。神子なしの生き方など出来るわけがなかった。
「あなたがいなくなれば、我にはもう死ぬよりほかなかった。ならばいっそ我が先に死んでおけばそれで何ら問題はなくなるはずだったのだ！」
目頭からこみ上げてくる熱いものをこらえきれない。目の前がぼやけ、頬をすうっと熱いものが通り過ぎて、すぐに冷たくなる。ぐずぐずと鼻がつまって、息が苦しくて何も言えなくなる。神子が自分を信じてなどいなかったのだと思うと悔しい。そんな風に思われるなど屈辱でしかない。言葉にならないほどに想いが高まる。
好きだったのだ、とても。
命を賭しても惜しくないと思えるほどに。
死をすら超越するほどに。
「……申し訳ありません。言い過ぎました」

神子は小さく頭を下げた。
「わたしは、悔いているのです。皆がわたしについてこなければ、こんな世界に来ることもなかった。ここは歴史の流れの中にも位置づけられず、輪廻からも遠ざかり、極楽など程遠い。人々を救うことさえ出来ない永遠など、何のためにあるのでしょう」
寂しげに言う神子を、わたしはもう怒れない。そこにはわたしと同じ絶望がある。
どうしてここにいるのか。なんのために生きているのか。
神子は手の内の笏を小さく振る。
「ハルモニアシステムの本質は、終わりなきものに終わりをもたらすことです。個人を個人たらしめている意識を融解し、一つの基盤（モノリス）の上で働く部材（チップ）に再変換する。基盤は世界の根源たる道（タオ）と同期して世界の質的安定性を向上させるインフラストラクチャーとして他の部材と協調して働くことになります。世界全体に貢献が出来ることを、わたしは誇りに思います」
わたしは小さく首を横に振った。正直なところ、そのシステムなぞに興味はない。
「ごまかしだ。たかだか我々はそれぐらいのことしか出来ないということであろう。だがよかろう。縋ることにしよう。……だが、屠自古はどうなる。あいつは尸解仙ではない。ただの亡霊でもそのシステムはつかえるのか」

「……わたしたちがいなくなれば、屠自古の成仏もかなうのではありませんか」
わずかなためらいを含んで、神子は言った。
昔からそうだ。神子は、大切なことを屠自古にだけは言わない。それが一つのわがままであるということをわたしは知っている。
「置いていくのか。あいつは怒るだろう」
「そうでしょうね。でも、その方がきっといい。彼女には普通の人間らしい幸せを味わって欲しかった。彼女を亡霊たらしめているのは、わたしたちへの心残りです。わたしたちさえいなくなれば、彼女もまた成仏するでしょう。それは人間として、生き物としてあるべき自然の摂理なのですよ」
勝手な物言いだ。それは判っているのだ。けれど、どうすればまともな幸せがつかめるのかなんて、わたしたちには判らなかったのだ。
「だから我だけをここへ入れたのか」
「……本当は一人でいこうかとも思ったのです。けれど最後に迷いが生じてしまった。どうしても、君を呼んで話をしたかった」
そう言って、彼女は今にも泣きそうな顔で笑んだのだ。そのように弱々しい笑顔の神子をわたしは見たことがなかった。どうしようもなく愛おしくて、抱きしめたくな

った。
「我は……そのように思われていることを誇りに思う」
「ごめんなさい。巻き込んでしまったわたしの弱さを許してください。幸せにしてあげることの出来ない、弱いわたしを許して下さい」
神子の手を取る。暖かい。この感触も多分消えてなくなるのだろう。そう思うと僅かに名残惜しいような気もしたけれど、消えてもなお神子がわたしとともにあるのなら、それで構わない。
「君は、どうします」
「神子はどうして欲しい？」
「わたしは……出来ることならば、共に。でも、無理にとは申しません」
「馬鹿な。神子ひとりで行かせるなど、ありえぬ」
そうだ。ひとりではさびしすぎる。
万全の幸せではないにしても、せめてもの安らぎ。せめてもの癒し、慰めとなることを願って。
「我も共に行こう。それが我のつとめである」
屠自古には申し訳がないけれど、わたしはやはり神子を放ってはおけない。彼女が

もしも折れてしまったら、わたしが支えなければならない。わたしが後ろから神子を追い続けてきたのは、そのためだ。

「ありがとう、布都」

「当然である」

せめて虚勢を張る。わたしだって怖い。

けれど二人で一緒なら。暖かな手のぬくもりがあるなら。

――さよなら、世界。

神子の声が聞こえた気がした。声ではなかったかもしれない。

――さよなら、わたし。

わたしもまた同じように声なき声でささやいた。

さよなら、わたし。

さよ
なら

た わ

<null>

わたし

<nu/>
<11>

「そんな結末は認めない」

和

終わらないうたを歌おう。

~~<part:number=epilogue:title=In The Twilight/>~~

※箔押しされた紙や防水加工された紙、
インキのたくさんついている古紙は回収できません。
分別はゴミ回収のしおりに従ってください。

もう、奇妙なタグは要らなくなった。神子が書いたあの物語の結末は燃やされたのだ。だからわたしはわたしの言葉で物語を自由に語ることが出来る。けれどどう書いたらいいものか考えあぐねている。こうなってしまったら一体、何を書くべきなのだろう？

今、物語は残すためではなく、ただ語ることだけに目的がある。誰に読まれるとも判らないけれど、元々言葉というのはそういうものではなかっただろうか？　声に出しただけの言葉は、空気の中を響いていってやがては消えてしまう。書いたものだって、永遠に残る道理はない。紙や笏（メディア）が焼かれればそれは消えてしまうのだ。

とにかく、ことの顛末だけは説明しておこう。それがわたしに残された最後の役割だと思う。

ハルモニアシステムが起動する直前に割り込んできたのは屠自古と青娥と尼僧――白蓮（びゃくれん）であった。書いたものを屠自古の稲妻に燃やされても、神子は怒らなかった。ただ呆然として目の前で泣いている屠自古を見ていた。

「……ゆるさない。二回も置いていったら」

屠自古の言葉はそれだけだった。それからわたしの手を取り、神子と共に抱き寄せ

た。力強い抱擁だった。息が苦しくなるぐらいに、彼女の腕はわたしたちを捕らえて離さなかった。
「あの、ちょっと、いたいです」
「ばか」
神子の言葉に反抗して、ますます力が強くなる。
「あたしのほうが、いたい」
いつまでも彼女のすすり泣きと、ばか、ばか、とののしる言葉が耳にこだました。とくとくと鳴る心臓の音や暖かい体温が誰のものとも判らずに感じられた。三人で一つのものを確かに分かち合っていた。

ここから先は、後から聞いた話である。
夢殿の前でわたしと別れた後の屠自古は、まっすぐに聖白蓮の元へ赴き、弾幕勝負を申し込んだのだという。そして、何度こてんぱんにのされても立ち上がり続けたのだという。言葉の端々から状況を理解した白蓮は、何はともあれ夢殿までやってくることにした。
閉じきっていた扉を飛び越したのは青娥の能力であった。彼女の鑿(のみ)はどんな壁をも

通り越すことが出来る。かくして、彼女たちはようやく間に合ったというわけだ。

……こうして起きたことをそのまま言葉にすると、味気ないぐらいに簡単に圧縮できてしまう。けれどその時に生じた屠自古の焦燥や葛藤やいてもたってもいられない感情などは、物語の形でしか表すことが出来ない。

それは書かれなかった物語だ。

それをわたしの口から語ることはしない。それはわたしの領域を超えている。

もしも書けるとすればそれは神子かもしれない。神子はひとの欲望が見える。わたしが考えていたこと、望んでいたこと。それらを見越して、わたしを連れて行こうとしたのだろうとさえ今となっては思う。わたしの中にあった願望に同調して、引きずられたのではないか、と。それを見越して青娥が警告していたのだとすれば、それは正しい。

だが、あの後、神子は急に腑抜けたようになって、ものを書くことを止めてしまった。だからわたしはこのような形でなんとか続きを書こうとしている。

しかし、あの後のことをどう語ろう。

事実だけを言うならば、あの後の屠自古は三日ほど神子にひっついて離れなかった。亡霊らしくべったりと後ろに取り憑いていた。たまりかねた神子がおずおずと言う。

「あのう、厠(かわや)と風呂だけは勘弁して欲しいのですが」
「ダメ」
にべもなかった。見守る青娥がにやにやして言った。
「仲むつまじいですねえ」
「先生、そういう問題ではない。太子殿が困っておられるではないか」
「良いではありませんか。青娥娘々は恋する乙女の味方ですのよ」
鼻歌など歌っていて、至極楽しそうだった。
と。
「たのもー。文々。新聞並びに求聞史紀編集部のものですがー」
騒がしい者たちがまた来て、わたしは思わず顔をしかめた。このところ入り浸っている人間と鴉天狗のコンビだった。人間の方、稗田(ひえだ)という聞き慣れない姓を名乗っているが、中臣の遠い親戚だと言って憚らない。最近流行の詐欺なのではないかと心配になる。
彼女たちには弱った。わたしは自分のことを話すことには慣れていないし、次から次に質問されるので休む暇もなかった。とはいえ言葉の端々から阿求がこちらに敬意を抱いているのはわかるから無碍(むげ)にも断れない。

――日本で最も古い書物というのはその頃に書かれたのだと聞いています。
――わたしの好きな梅も蜜柑もお箸もお味噌もその頃に導入したと聞きました。
――たくさんの苦労があったと思うのです。わたしは全てを書き残しておきたい。
――長い間に失われた記録は多い。けれど、こうして再び会えたことを感謝したい。
――さあ、教えて下さい。あなたたちがどうやって生きてきたのかを。

このように物部一族の末路が滅亡ではなかったということには何か救われたような思いがする。兄の生きてきた記憶、残されたわたし。物部を受け継ぎ、終わらせた者として。

しかし彼女たちのせいで落ち着いて書き物など出来はしないのには困った。うっかり見られてばらまかれても困る。

……でも書いていて思ったのだがそれならそれで良いのかもしれない。

まだ生き続けるのなら改めて何かを整理して書き付ける必要などない。遺書というのはじきに死にゆく者が書くものだ。

であるならば、神子の書いたあの遺書のような物語はやはり完結する必要などないのだろう。わたしたちは未だ子供のままだ。そしてわたしたちは今のところ永遠に生きるつもりでいる。

未発動のハルモニアシステムは白蓮が早々に片付けて封印してしまったし、屠自古はずっとあんな感じだし、神子は……よくわからない。けれど、今のところ、わたしたちに付き合ってくれている。疲れて眠っていることも多いのだけれど、三人で昼寝をしたり、おやつを食べたり、それからお弁当を持って幻想郷の色々な場所へ遠足に行ったり、そういうことで、どうにか彼女はごまかされてくれている。

人里近くの小高い丘にのぼって、梅を見に行ったときのことを思い出す。三人で暖かな日の光の中、ぼんやりと平和そのものの空気を楽しんでいた。ごく遠くで寺子屋の子供たちが何か、聞き覚えのある和歌を斉唱しているのが聞こえてくる。後の世にまとめられた万葉集には太子が作った歌も納められているという。そう言おうとして振り返ると神子はうとうとと船をこいでいる。

「色々あったもんね」

屠自古はそう言って、膝の上に神子の頭を横たえ、優しく撫でる。

そういう時に流れている空気について、わたしはうまく語ることが出来ない。

過去に屠自古がひとりで抱えていた焦燥や、白蓮との何度も負け続けたたくさんの弾幕勝負や、そうして勝ち取った新しい生活のことについて、わたしの手ではうまく書き表すことが出来ないみたいに、多分、この感じというものは語られない物語の中

にある。

この物語の外側で、楽しいこと、面白いこと、優しいこと、暖かいことが動いている。これから先、終わらない歌がずっと続く。三人で旋律を重ね合わせて、時折休符をはさみながら和声を奏(かな)でていく。柔らかな声と、お互いに交わした目配せと息継ぎ、その合間に響く余韻が空気を震わせる。草原を撫でていく風や葉の擦れ合う音や、桜の花びらがゆっくりと地面の上に落ちる時のかすかな気配を伴奏にして、わたしたちの中を言葉にはならないものが通り抜けていく。

それらを全て書き残すには、言葉というものは狭すぎる。

断片的な事実だけを書いたのでは、総体を表すことが出来ない。言葉にする行為自体が、ものごとを嘘にしてしまうような気がして、わたしはさっきから字を書いては紙を破り捨てるなどしている。言葉の持つ曖昧さをわたしは許容することが出来ない。「青」と一文字書いたとして、それは水の深い色も空の淡い色も、碧玉の冷たい色も藍染め布の柔らかな色も、全てを包含している。言葉を尽くせば尽くすほどにそれらの多様な意味合いを多重に含んで、誤謬は深まってしまう。ひとつのものを見れば誰にでも明らかであることが、それを言葉に起こしただけで、読んだ者にまったく別の意味合いを感じさせてしまう。読んだ人がその言葉から連想されるものは一人一人で違

ってしまうのだから。

そのひとが神仏であるならば、ことばにしてはならない。

ひとがしびとになると、ことばになる。

しびとがほとけになると、空(くう)になる。

言葉として書かれたものは全て嘘だ。ひとが死んだならば、そのひとは嘘になってしまう。神仏のような尊いもの、大切なものは言葉に置き換えてはいけない。嘘にしてはならない。

やはり、この物語には結末など不要なのだと改めて思う。未練たらしく何時までも筆を抱えている必要などない。この書き置きは人里のちり紙交換にでも出すことにしよう。そうやって、わたしたちを嘘にしてしまうのを防ぐことにしよう。

わたしたちはこの紙の外で生き続けるのだ。

本作品は、
2011年12月30日　コミックマーケット81
にて発行した書籍を、電子化したものです。
公開にあたり、一部表現を修正しております。

Toho Project FanZine
POTAPOTA-YAKI

Project Shrine Maiden FanZine

ハルモニア

2014年1月1日　電子書籍版公開

著　者　　水之江めがね
発　行　　ぽたぽた焼
イラスト　　あとき（アトキンソン）
DTP・デザイン　　moki（heri/hodie）
歴史考証　　妹尾在処（在りや）
原　作　　東方Project（上海アリス幻樂団）

本作品は二次創作であり、原作とは一切関係はありません。
私的利用を超える範囲での複製、および、無断転載を禁じます。
autumn_kite [at mark] yahoo.co.jp
http://i0-0i.sakura.ne.jp/harmonia/